

木古内町

大平遺跡(4)

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成28年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

木古内町

大平遺跡(4)

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成28年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



大平遺跡調査区遠景 大平川河口から望む



調査区南西から 縦貫するのは左から北海道新幹線・道南いさりび鉄道・国道 228 号

口絵 2



大平遺跡調査状況 北東から



斜面から出土した縄文時代晩期後葉の遺物



P-243 断面



P-246 断面



P-243 遺物出土状況



P-246 遺物出土状況



晩期後葉の遺物出土状況



竈状遺構（烟跡）検出状況



晩期前葉の遺物出土状況



後期後葉の土偶出土状況

口絵 4



斜面から低地にかけての土層堆積 途中に地すべりとみられる無遺物層を挟む



斜面から低地にかけての土層堆積 水付部分



1号小ピット (SP-1) 検出状況と、上部の断面



中位の土器の状況



下位の土器の状況



1号小ピット 出土土器



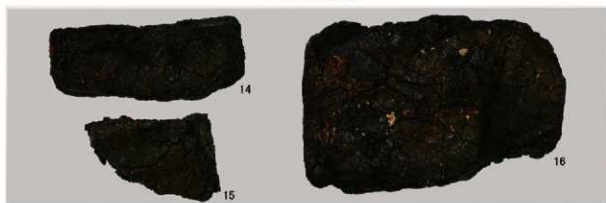
c95区 遺物出土状況



e98区 遺物出土状況



P-243 出土遺物



包含層出土 漆製品



包含層出土 土偶

例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局が行う高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成25年度に発掘調査を実施した、上磯郡木古内町大平遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 報告内容は、木古内町大平遺跡平成25年度調査範囲（1,700㎡）の遺構と遺物である。
3. 大平遺跡では、北海道新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書が、これまでに3冊刊行されている。本書を『大平遺跡(4)』（北理調報329）としたのは平成22年度刊行の『大平遺跡・大平4遺跡』（北理調報280）、平成27年度刊行の『大平遺跡(2)』（北理調報321）、平成28年度刊行の『大平遺跡(3)』（北理調報328）に続く報告書としたからである。
4. 本書の執筆は畝状遺構を谷島由貴と土肥研品が、その他執筆・編集は土肥が担当した。
5. 整理事業の担当は土肥が、掲載遺物の写真撮影を、第2調査部第1調査課の中山昭大（平成27年度）が、調査時に破損した漆塗り堅櫛の復元と分析を、第1調査部第1調査課の高橋美鈴（平成25年度 現類似町教育委員会）が行った。
6. 発掘調査の土工事は株式会社大森組、基準杭設置は小林土木工業所、空撮をシン技術コンサルに委託した。
7. 各種分析・同定・実測は下記に委託した。
 - 土器・石器実測の一部：株式会社トラスト技研
 - 炭化種実同定：株式会社古環境研究所
 - 黒曜石の産地分析：株式会社パレオ・ラボ
 - 炭化種実同定：株式会社古環境研究所
 - 放射性炭素年代測定：株式会社加速器分析研究所
 - 漆塗り製品の保存処理：株式会社東都文化財研究所
8. 出土遺物は木古内町教育委員会が保管する。写真などの記録類は当センターが保管する。
9. 調査・報告にあたっては、下記の諸機関および諸氏に御協力、御指導をいただいた。

北海道教委員会、木古内町教育委員会、北斗市教育委員会、知内町郷土資料館
野村広章（木古内町教育委員会教育長）、木元 豊（木古内町教育委員会）
西脇対名夫（北海道教育委員会）、村本周三（北海道教育委員会）、中田裕香（北海道教育委員会）
工藤研二（北海道教育委員会）、森 靖裕（北斗市教育委員会）、高橋豊彦（知内町教育委員会）
竹田 聡（知内町教育委員会）、石井淳平（厚沢部町教育委員会）、山田 央（七飯町教育委員会）
高橋 毅（森町教育委員会）、高橋美鈴（類似町教育委員会）、奥山さとみ（江差町教育委員会）
須藤 隆（東北大学名誉教授）、横山英介（北海道考古学研究所）、佐藤由紀男（岩手大学教授）
右代啓視（北海道博物館）、鈴木拓也（北海道博物館）、大阪 拓（北海道博物館）
飯島義雄（ぐんま史跡維持支援団）、大沼忠春

記号等の説明

1. 本文中および図、表中では以下の記号を用い、確認順に番号を付した。また、遺構番号は平成21～23年度に北海道新幹線建設工事に伴い当センターが実施した、同遺跡の発掘調査で付された番号を踏襲し、土坑が241号から、焼土が101号から、小ピットが1号からとした。平成27年度刊行の『北埋調報321 大平遺跡(2) - 遺構編 -』の内容を確認すると、報告済みの土坑は230号までと250号となっており、大平遺跡全体では欠番が231号～240号と249号の11基あることになる。また、畝状遺構には番号を付していない。

P: 土坑(墓を含む) P-241から、F: 焼土 F-101から、SP: 小ピット SP-1から。

2. 遺構図や遺物の縮尺は、墓坑としたP-241、243、246を1:20、その他の土坑、焼土1:40、SP-1断面図1:20、遺物出土状況図1:10、畝状遺構 平面図2:125・断面図1:25、大平遺跡土層断面図1:100、土器実測図・拓影図1:4、土偶2:3、土製円盤1:3、剥片石器・礫石器1:2、P-246出土の台石・石皿10:375、包含層出土の漆製品2:3、P-243出土の櫛1:1、サメ歯1:1、石製品2:3、とし、それぞれにスケールを付した。
3. 遺構の規模は、確認できた形状の上場長軸長×短軸長、坑底面の長軸長×短軸長、上場から坑底面までの最大深を示し、土層図、遺構図中のレベルは標高(単位m)を示し、遺構ごとに方位記号を記している。出土した遺物について、土器はIV章にすべて掲載し、出土状況図に小さい実測図と、IV章の掲載番号を示した。石器、漆製品、サメ歯については遺構ごとに図版を作成した。
4. 土器の大きさは、器高は計測可能な個体の突起部を含む最大高で計測、口径・底径は計測可能なもののみ、器厚は胴部の平均的な厚みで示した。石器の大きさは最大長×最大幅×最大厚で(単位mm)記してある。なお、破損しているものについては、現存の最大値を示した。石器実測図中でたたき痕はV-V、すり痕は|—|で範囲を表した。また、自然面はドットで表現した。掲載遺物の写真は縮尺を統一していない。

5. 土層の観察には『標準土色帖』(小山・竹原1977)および『土壌調査ハンドブック』(ペドロジスト懇談会1984)を用いている。また、火山灰について以下の略号を用いている部分がある。これらは層位的な検出状況と外見から判断しており、分析による同定は行っていない。

Ko-d: 駒ヶ岳d降下火山灰(1640年降下)、B-Tm: 白頭山-苦小牧火山灰(10世紀降下)

6. セクション図に用いられている土層番号と土層内容は以下のとおりである。
 - I 攪乱層を含む表土層で、台地上は耕作、台地下は道や宅地跡などの攪乱を受けている。発掘調査ではB-Tm層までスコップ等で荒く掘るため、II層上位中の遺物のもI層扱いになった。
 - II 遺物包含層である黒色土層で、部分的にKo-d層やB-Tm層の薄い堆積が見られる。
 - III II層下にある黒褐色から暗褐色の遺物包含層で、縄文時代晩期後葉の遺物が集中する箇所がみられた。また、台地下の低地部では、狭小な範囲ではあるが、本層がシルト質の間層を挟んで3つの層に分層する。
 - IV 褐色ローム質土層 崖の表面観察で、本層は標高7m付近まで堆積し、その下に砂礫層が約2m、橙色粘土層が約0.5m、それより下は基盤の凝灰岩層となり、大平川の河床や河口付近の海岸部に岩盤の露頭が観察できる。

目 次

口 絵	
例 言	
記号等の説明	
目 次 挿図・表・図版	
I 語 言	
1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査に至る経緯	2
4. 調査の方法	2
(1) 調査範囲とグリッドの設定	2
(2) 濁水対策	5
(3) 包含層掘削	5
(4) 遺構調査	5
(5) 整理の方法	5
(6) 遺物の分類	6
5. 調査結果の概要	7
II 遺跡の位置と環境	9
1 位置と環境	9
2 土層	9
3 周辺の遺跡	12
III 遺構	15
IV 遺物	29
V 自然科学的分析	145
1 大平遺跡出土黒曜石製石器の産地同定	145
2 大平遺跡炭化種実同定	148
3 大平遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)	151
4 大平遺跡出土の漆塗り櫛の分析	154
VI まとめ	156
引用・参考文献	162
写真図版	165
報告書抄録	

挿 図 目 次

図 I - 1 大平遺跡位置図	3	図 II - 1 大平遺跡土層断面図	10
図 I - 2 大平調査区位置図	4	図 III - 1 遺構位置図	16
図 I - 3 グリッド設定図	5	図 III - 2 P-241	16

図Ⅲ-3	P-243	18	図Ⅳ-35	土器実測図31	69
図Ⅲ-4	P-243出土遺物	19	図Ⅳ-36	土器実測図32	70
図Ⅲ-5	P-246	21	図Ⅳ-37	土器実測図33	71
図Ⅲ-6	P-246出土遺物	22	図Ⅳ-38	土器実測図34	72
図Ⅲ-7	P-242・244・245・247・248	24	図Ⅳ-39	土器実測図35	73
図Ⅲ-8	F-101・102・103・104・SP-1	26	図Ⅳ-40	土器実測図36	74
図Ⅲ-9	畝状遺構平面図・断面図	28	図Ⅳ-41	土器実測図37	75
図Ⅳ-1	晩期後葉 器形区分	31	図Ⅳ-42	土器実測図38	76
図Ⅳ-2	晩期後葉 突起の形状区分	33	図Ⅳ-43	土器実測図39	77
図Ⅳ-3	晩期後葉 文様帯の区分と 貼瘤の分類	35	図Ⅳ-44	土器実測図40	78
図Ⅳ-4	晩期後葉 文様の分類	37	図Ⅳ-45	土器実測図41	79
図Ⅳ-5	土器実測図1	39	図Ⅳ-46	土器実測図42	80
図Ⅳ-6	土器実測図2	40	図Ⅳ-47	土器実測図43	81
図Ⅳ-7	土器実測図3	41	図Ⅳ-48	土器実測図44	82
図Ⅳ-8	土器実測図4	42	図Ⅳ-49	土偶実測図	83
図Ⅳ-9	土器実測図5	43	図Ⅳ-50	土偶・土製品実測図	84
図Ⅳ-10	土器実測図6	44	図Ⅳ-51	石器実測図1	87
図Ⅳ-11	土器実測図7	45	図Ⅳ-52	石器実測図2	88
図Ⅳ-12	土器実測図8	46	図Ⅳ-53	石器実測図3	89
図Ⅳ-13	土器実測図9	47	図Ⅳ-54	石器実測図4	90
図Ⅳ-14	土器実測図10	48	図Ⅳ-55	石器実測図5	91
図Ⅳ-15	土器実測図11	49	図Ⅳ-56	石器実測図6	92
図Ⅳ-16	土器実測図12	50	図Ⅳ-57	石器実測図7	93
図Ⅳ-17	土器実測図13	51	図Ⅳ-58	石器実測図8	94
図Ⅳ-18	土器実測図14	52	図Ⅳ-59	石器実測図9	95
図Ⅳ-19	土器実測図15	53	図Ⅳ-60	石器実測図10	96
図Ⅳ-20	土器実測図16	54	図Ⅳ-61	石器実測図11	97
図Ⅳ-21	土器実測図17	55	図Ⅳ-62	石器実測図12	98
図Ⅳ-22	土器実測図18	56	図Ⅳ-63	石器実測図13	99
図Ⅳ-23	土器実測図19	57	図Ⅳ-64	石器実測図14	100
図Ⅳ-24	土器実測図20	58	図Ⅳ-65	石器実測図15	101
図Ⅳ-25	土器実測図21	59	図Ⅳ-66	石器実測図16	102
図Ⅳ-26	土器実測図22	60	図Ⅳ-67	石器実測図17	103
図Ⅳ-27	土器実測図23	61	図Ⅳ-68	石器実測図18	104
図Ⅳ-28	土器実測図24	62	図Ⅳ-69	石器実測図19	105
図Ⅳ-29	土器実測図25	63	図Ⅳ-70	石製品・漆製品実測図	106
図Ⅳ-30	土器実測図26	64	図Ⅳ-71	大平遺跡測量遺物全点	130
図Ⅳ-31	土器実測図27	65	図Ⅳ-72	土器出土状況図1	131
図Ⅳ-32	土器実測図28	66	図Ⅳ-73	土器出土状況図2	132
図Ⅳ-33	土器実測図29	67	図Ⅳ-74	土器出土状況図3	133
図Ⅳ-34	土器実測図30	68	図Ⅳ-75	土器出土状況図4	134
			図Ⅳ-76	土器出土状況図5	135

図Ⅳ-77	土器出土状況図6	136
図Ⅳ-78	土器出土状況図7	137
図Ⅳ-79	土器出土状況図8	138
図Ⅳ-80	土器出土状況図9	139
図Ⅳ-81	土器出土状況図10	140
図Ⅳ-82	土器出土状況図11	141
図Ⅳ-83	土器出土状況図12	142
図Ⅳ-84	土器出土状況図13	143
図Ⅳ-85	土器出土状況図14	144

図Ⅴ-1	北日本の黒曜石原石 採取地の分布図	146
図Ⅴ-2	黒曜石産地推定判別図	147
図Ⅴ-3	暦年較正年代グラフ	153
図Ⅴ-4	堅樫構造模式図	155
図Ⅴ-5	XRF分析データ3元素指定	155
図Ⅵ-1	晩期後葉器種別編年図	159
図Ⅵ-2	北海道内の出土例	161

表 目 次

表Ⅳ-1	掲載土器一覧1	107
	掲載土器一覧2	108
	掲載土器一覧3	109
	掲載土器一覧4	110
	掲載土器一覧5	111
	掲載土器一覧6	112
	掲載土器一覧7	113
	掲載土器一覧8	114
	掲載土器一覧9	115
	掲載土器一覧10	116
	掲載土器一覧11	117
	掲載土器一覧12	118
	掲載土器一覧13	119
	掲載土器一覧14	120
	掲載土器一覧15	121
	掲載土器一覧16	122

表Ⅳ-2	掲載土製品一覧	122
表Ⅳ-3	掲載石器一覧1	123
表Ⅳ-3	掲載石器一覧2	124
表Ⅳ-3	掲載石器一覧3	125
表Ⅳ-3	掲載石器一覧4	126
表Ⅳ-4	遺構遺物一覧	127
表Ⅳ-5	掲載石製品・漆一覧	127
表Ⅳ-6	出土遺物一覧	128
表Ⅴ-1	分析対象となる黒曜石製石器	145
表Ⅴ-2	北日本黒曜石産地の判別群	145
表Ⅴ-3	測定値および産地推定結果	146
表Ⅴ-4	出土層位および器種別の産地	146
表Ⅴ-5	試料一覧	148
表Ⅴ-6	炭化種実同定結果	149
表Ⅴ-7	放射性炭素年代測定結果	152
表Ⅴ-8	放射性炭素年代測定結果	153

図 版 目 次

口絵1	大平遺跡調査区遠景 大平川河口から望む 調査区南西からの遠景
口絵2	大平遺跡調査状況 北東から 斜面から出土した縄文時代晩期後葉の遺物
口絵3	

P-243	断面
P-243	遺物出土状況 晩期後葉の遺物出土状況 晩期前葉の遺物出土状況
P-246	断面
P-246	遺物出土状況 畝状遺構(畑跡)検出状況

後期後葉の土偶出土状況

口絵 4

斜面から低地にかけての土層堆積

斜面から低地にかけての土層堆積 水付部分

口絵 5

1号小ピット (SP-1) 検出状況と、上部の断面

中位の土器の状況

下位の土器の状況

1号小ピット 出土土器

口絵 6

e95区 遺物出土状況

e98区 遺物出土状況

口絵 7

P-243 出土遺物

包含層出土 漆製品

口絵 8

包含層出土土偶

図版 V-1 黒曜石製石器原材料産地分析資料

図版 V-2 大平遺跡の炭化種子

図版 1

調査前の状況

表土除去

段丘上の調査

段丘上遺物検出状況

C94・95土器捨て場 確認状況

土器捨て場 調査開始

土器捨て場 調査中盤

土器捨て場 調査終盤

図版 2

墓坑の調査状況

P-243 検出状況

P-246 検出状況

P-241 調査状況

P-241 断面

図版 3

P-244 検出

P-244 調査状況

P-245 確認状況

P-245 坑底面の遺物

P-242 調査状況

P-247 検出

SP-1 断面

P-248 断面

図版 4

F-102・F-103

F-104

畝状遺構 断面
段丘上4ライン 断面
3ラインに現れた小さな沢状の断面
調査区北東縁7ライン 断面

図版 5

97ラインセクション 低湿部
96ライン 下位の段丘断面
95ライン 断面

図版 6

低位段丘面の調査状況
出土遺物量ピークに達する
斜面と低位の中間の調査
調査済みの斜面には基盤の岩盤が露頭
降雨中の測量作業
調査終了状況

図版 7

土器506 出土状況
土器に混じり玉類出土
土器285 出土状況
土器275と土器381
土器404に重なり土器600出土
土器507 出土状況
土偶2 出土状況
土器126 Ⅲ-2層より一括出土

図版 8

P-246 1～3
P-241 碟
P-243 碟
P-246 碟

図版 9 土器7・14・16・17

図版10 土器15・18～20・32～35・55・56

図版11 土器60・63・64・75～80

図版12 土器81・85・91～93

図版13 土器94～98・112～115・122・123

図版14 土器124～126

図版15 土器127～132・100+218

図版16 土器219～222・228・229・238～248

図版17 土器249～251・253・254・274～276

図版18 土器280・282・284～288・290

図版19 土器299～304・309・311・312・314

図版20 土器317～325

図版21 土器326～328・330・331・344・346

- 图版22 土器349~351·360~364·367·375+376
图版23 土器396~399·403~405·407
图版24 土器408~409·413·420~424
图版25 土器425~432
图版26 土器433~435·437·440~443·445
图版27 土器454~461
图版28 土器462~467·469·470·481·484
图版29 土器505~507·509~512·514
图版30 土器569~576·583~587
图版31 土器591·593·594·596~610·619
图版32 土器620~630
图版33 土器631~642·647~649·655
图版34 土器1~6·21~31·36~39
图版35 土器40~51
图版36 土器52~54·57~59·61·62·65~74·82~84·86~88
图版37 土器89~90·99~111·116~121·135·137·138
图版38 土器133·134·136·139~148
图版39 土器149~166
图版40 土器167~189
图版41 土器190~218
图版42 土器223~227·230~237·252
图版43 土器267~272·277~279·281·283·289·291~298·303·305~308
图版44 土器310·313·315·316·329·332~339
图版45 土器340~343·345·347·348·352~357
图版46 土器358·359·365·366·368~374·377~387
图版47 土器388~395·397·400·402·406·410~412·414~419
图版48 土器436·438·439·444·447~453·468·471~474·476
图版49 土器475·477~480·482~483·485~496
图版50 土器497~504·508·513·515~524·526~529·531~533·536~544
图版51 土器525·530·534~535·545~568·577~580
图版52 土器581·582·588~590·592·595·611~618·643~646·650~654·656~660
图版53 土製品2·4~23·石製品1~13
图版54 石器1~109
图版55 石器110~178
图版56 石器179~201
图版57 石器202~233
图版58 石器234~267
图版59 石器268~289
图版60 石器290~306
图版61 石器307~320

I 諸言

1. 調査要項

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

遺跡名：大平遺跡（北海道教育委員会登載番号 B-05-07）

所在地：上磯郡木古内町字大平63-3

調査面積：1,700m²

発掘期間：平成25年5月13日～平成25年11月8日

整理期間：平成25年7月1日～平成29年3月31日

2. 調査体制

平成25年度	理事長	坂本均
	副理事長	畑宏明
	事務局長	中田仁（専務理事兼任）
	常務理事	千葉英一（第1調査部長兼任）
	第1調査部第3調査課	平成25年度調査体制
	課長	土肥研晶（発掘担当者）
	主査	立川トマス（8月1日から）
	主査	谷島由貴（8月1日から）
	嘱託	奥山さとみ（7月11日まで）
平成26年度	理事長	坂本均
	副理事長	畑宏明（平成26年8月28日死去）
	事務局長	中田仁（専務理事兼任）
	常務理事	千葉英一（第1調査部長兼任）
	第1調査部第3調査課	課長
		土肥研晶（編集担当者）
平成27年度	理事長	坂本均（6月26日まで）
		越田賢一郎（6月26日から）
	副理事長	中田仁（6月26日から）
	事務局長	山田寿雄（6月26日から）
	常務理事	長沼孝（6月26日から）
	第1調査部第3調査課	課長
		土肥研晶（編集担当者）
平成28年度	理事長	越田賢一郎
	副理事長	中田仁
	事務局長	山田寿雄
	常務理事	長沼孝（第1調査部長兼任）
	第1調査部第3調査課	課長
		土肥研晶（編集担当者）

3. 調査に至る経緯

高規格幹線道路「函館江差自動車道」は、北海道縦貫自動車道・函館新道と一体となって高速ネットワークを形成する一般国道228号の自動車専用道路で、近隣主要都市を經由し、函館港・函館空港への物流の効率化と生活の利便性を向上させる目的で、北海道開発局により整備が進められている。現在（平成28年7月）、函館IC～北斗茂辺地ICの18.0kmが供用され、北斗茂辺地IC～木古内ICの延長16.0kmの「茂辺地木古内道路」で平成31年度の供用開始をめざし事業が進められている。

平成11年、国土交通省北海道開発局函館開発建設部（以下「函館開発建設部」）は、函館江差自動車道、茂辺地木古内道路における埋蔵文化財包蔵地に関する事前協議書を北海道教育委員会（以下「道教委」）に提出した。これを受けて現地踏査を実施した道教委は、木古内町大釜谷から大平までの範囲の15地点に関して所在確認調査が必要と通知した。大平遺跡における所在確認調査は平成24年10月4日に実施、海岸段丘台上の606㎡について、発掘調査が必要と回答された。函館開発建設部は、工事計画の変更は不可能であることから、平成25年度4月1日（公財）北海道埋蔵文化財センターに発掘調査を委託した。事業を受託した当センターは、平成25年度5月から発掘調査を実施した。

発掘調査着手後もなく、調査範囲の外に遺物包含層が広がることがわかり、協議の結果、平成25年6月25日に低地部の範囲確認調査を実施、遺物包含層の拡がりが確認され、調査面積は1,094㎡追加の合計1,700㎡となった。追加範囲の調査は9月10日から始まり、調査期間の一週間の延長による対応で11月8日現地調査を終了した。

4. 調査の方法

(1) 調査範囲とグリッドの設定

大平遺跡の調査区設定に当たっては、本調査区の北側約50mで北海道新幹線建設事業に伴い当センターが平成21～23年度に実施した、大平遺跡の発掘調査で設定した調査区（北理調報280）を用いた。

設定に使用した基軸は北海道新幹線計画路線上の中心線115k300～115k400で、この座標から平行移動したb40～b60とC40～C60を算出、これをもとに調査区内に5m×5mの方眼杭を設定した。発掘区はアルファベットと数字の組み合わせで表示している。路線と平行方向の5m毎に設定されているローマ数字は、大平遺跡調査区中央付近で0となり、次に再び99から始まり数字が小さくなる設定、路線垂直方向に5m毎に設定しているアルファベットは調査区北端で大文字のZに達し、次に再び小文字aから始まる設定としている。このメッシュは大平遺跡と孫七川を挟んだ大平4遺跡も共通で使用しており、遺構・遺物の対比には好都合であるが、一方で同名のグリッド番号が生ずる不都合があったが、さいわい調査年度の違いなどから混乱は今のところ生じていない。

北海道新幹線の中心線上の115k300と115k400の世界測地系による座標は、平面直角座標第Ⅰ系に基づき以下の数値となっている。また、この軸は真北に対し39°50'55"東偏する。

115k300	X=-256,239.449Y=16,593,122
115k400	X=-256,263.675Y=16,657,198

(2) 湧水対策

調査計画段階での湧水対策は、土壌による用地際の補強と溝の掘削により湧水が用地から直接大平川への流入するのを防ぐものであったが、調査区拡張後は、表土除去後の低位の調査区は水の逃げ道がなく、降雨のたびに水没したため、効率よく調査を進めるために、雨水などの湧水を1ヶ所に集めて排水する方法に切り替えた。具体的には、先に南東側角の調査を終え、そこに5×10×3mの穴を掘削し、調査区内の雨水が集まるよう溝を切りながら調査をすすめ、集めた水の上澄みをポンプ排水する方法をとった。

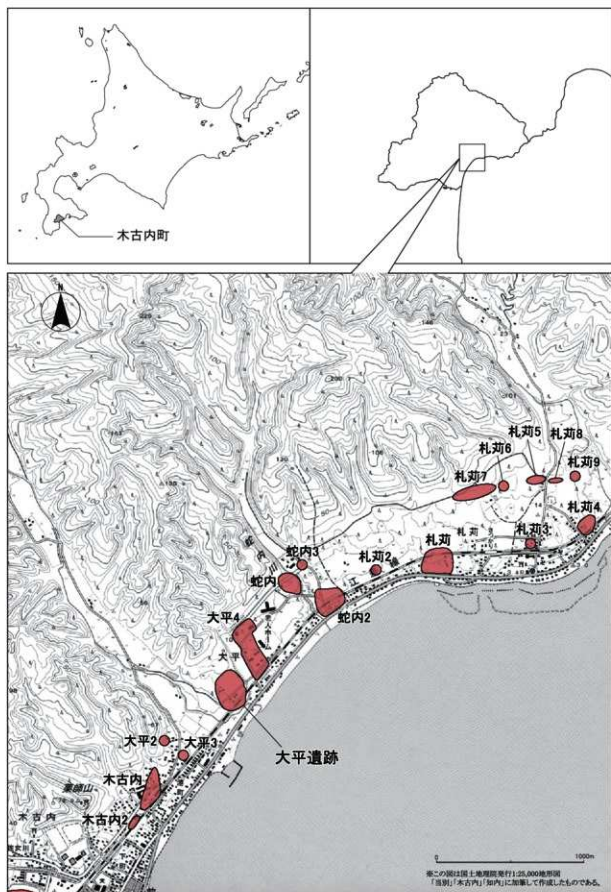


図 I-1 大平遺跡位置図

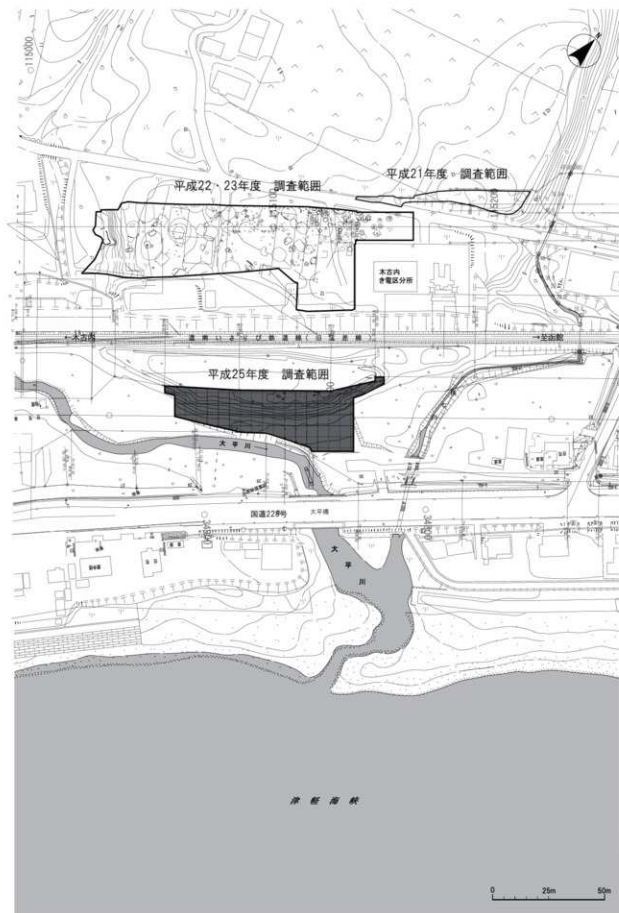


図 I-2 大平遺跡 調査区位置図

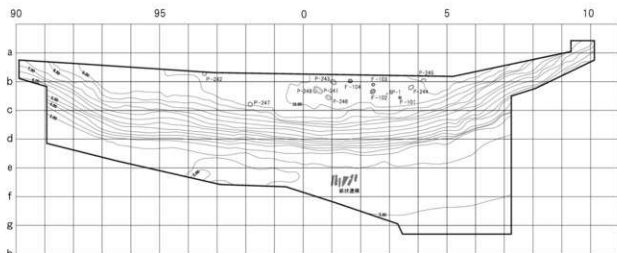


図 I-3 グリッド設定図

(3) 包含層掘削

当初計画では、台地上の狭小な範囲の調査で、重機も近づけないことから、表土から人力による掘削を行う予定であったが、笹や灌木などの根が深くは入り、表土からの掘削作業は困難とみられた。調査にあたり、全面を覆う笹を刈ったところ、台地上で耕作を行っていた頃のものと思われる道筋が2ヵ所みつき、これを少し拡張し、小型の重機を段丘上に上げ、表土除去を行った。台地上の包含層は、5ライン付近が最も残りが良く、B-Tm層を挟んで黒色土が層厚約70cmが残っていた。出土する遺物は、笹の根直下の黒色土層（Ⅱ層）から縄文時代晩期の土器・石器が多数の出土し、黒色土層より下位の黒褐色土層（Ⅲ層）に達すると、ほぼ無遺物層になる。耕作による削平とみられるが、0ラインより南西側や斜面部では、黒色土層が失われている部分が多く、このような場所はスコップによる掘削を行った。包含層出土の遺物は、細かい破片は取り上げ、ある程度の大きさのあるものや、まとまって出土する遺物については、図化を行い、グリッド毎にNo.1から番号を付けて取り上げた。

(4) 遺構調査

検出された墓坑は、包含層Ⅱ層の掘削中に小礫が集中が出土することで墓と判断した。小礫集中の範囲を検出、図化後、墓の長軸で半截し、断面実測、完掘を行った。墓坑埋土中にも多数の小礫が出土したが、大型の礫や副葬品とみられる遺物以外は図化していない。そのほかの土坑は、Ⅲ、Ⅳ層面上で上位層の落ち込みとして確認している。

遺物集中域は極力出土状況を図化し番号を付けて取り上げ、玉類など微細な遺物出土が見込まれる範囲は土砂を回収し土壌水洗を行った。ただし、扱いは包含層出土の遺物と同じで、遺構名は付けず、測量遺物の集合で現わしている。

畝状遺構は低位の段丘で狭小な範囲で確認され、畝間の測量の後、耕作痕の検出も行ったが確認面からの耕作深度は浅いせいか、はっきりしなかった。

(5) 整理の方法

取り上げた遺物は、現地では原則として以下の作業工程で整理を行った。遺構・包含層それぞれの「遺物取り上げ台帳」、および「土壌水洗サンプル取り上げ台帳」を作成し、これをもとに水洗、乾燥、分類、注記、点数集計等の作業を進めた。注記の内容は、大平遺跡を「大」と略記し、その後に

グリッド名、層位、取上げ番号の順に記した。注記するスペースのない、小さな遺物については省略した遺物の出土グリッド、層位、点数、分類名、日付などの情報は「遺物カード」に記録し、遺物とともにビニール袋へ入れ、収納した。カードの情報は遺構ごと、分類ごとの情報を集計し、最終的な遺物台帳を作成した。

(6) 遺物の分類

(1) 土器

土器は大きな区分である時期ごとの特徴から、便宜的に縄文時代早期に属する資料をⅠ群とし、以下順に前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群、続縄文時代をⅥ群、擦文時代相当のものをⅦ群、とし、各群にアルファベットの小文字を組み合わせ、前半(a類)、後半(b類)、あるいは前葉(a類)、中葉(b類)、後葉(c類)に分類した。また、本遺跡で最も多く出土した縄文時代晩期後葉(Vc類)の土器群の器形、突起の形状、文様などについては、図Ⅳ-1～図Ⅳ-4に示した記号を掲載遺物一覧表中で用いた。

Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群

- a類：貝殻条痕文、貝殻腹縁文、などが施される
- b類：燃糸文、組紐圧痕文、絡条体圧痕文、貼付文、縄文等の施されるもの

Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群

- a類：縄文の施された丸底・尖底を特色とするもの。春日町式など
- b類：円筒土器下層式に相当するもの

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群

- a類：円筒土器上層式に相当するもの
- b類：円筒土器上層式に後続する土器群で見晴町式・榎林式・大安在B式・ノダップⅡ式・煉瓦台式に相当するもの

Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群

- a類：初頭～前葉の土器。天祐寺式・涌元式・トリサキ式・大津Ⅶ群・白坂3式に相当するもの
- b類：中葉の土器。ウサクマイC式、手稲式、ホッケマ式併行に相当するもの
- c類：後葉の土器。堂林式・三ツ谷式・湯の里3式に相当するもの

Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器

- a類：大洞B・BC式・上ノ国式に相当するもの
- b類：大洞C1式・C2式、聖山Ⅰ式に相当するもの
- c類：大洞A・A'式、聖山Ⅱ式に相当するもの

Ⅵ群 続縄文時代に属する土器群

Ⅶ群 擦文時代に属する土器群

石器等

石器等は以下の器種に分類した。

石鏃：主に両面加工で整形され、尖頭形を呈するもの 最長で5,66mm

石錐：端部に錐状の突出部が作り出されたもの

ナイフ：主に両面加工で整形され、尖頭部をもたず、直線的な刃部や柄を有するもの

端部にノッチ状の加工によるつまみが作り出されたものも含めた

へら状石器：刃部は主に片面加工の左右対称形の細長い石器で、最大幅が刃部付近にあるもの
スクレイパー類：素材の側縁・端部に連続的な剥離によって刃部が作り出されるもの

Rフレイク、Uフレイクもこの分類に含む

楔形石器：素材の両端部に、対向する剥離や潰れが認められるもの

石核：剥片を剥離した痕跡が認められる、剥片石器と共通する石材のもの

石斧：研磨で整形された斧状の刃部を有するもの、製作時の擦り切りにより生じた、残片に刃部が付
けられるものも多い

たたき石：礫にたたき痕が認められるもののうち、手に持って使用されたと想定されるもの

すり石：礫にすり痕が認められるもののうち、手に持って使用されたと想定されるもの

砥石：礫にすり痕が認められるもののうち、研磨作業に使用されたと想定されるもの

扁平打製石器：扁平な礫の縁辺を打ち欠き、半円または楕円に整形されたもので、縁辺に擦り痕を有
するもの

石鋸：板状の礫などの素材の縁辺に、断面がV・U字形を呈するすり痕が認められ、石斧製作時の擦
り切り作業に使用されたと想定されるもの

石錘：扁平な礫の縁辺に、打ち欠きが認められるもの

台石：礫にたたき痕が認められるもののうち、置いて使用したと想定されるもの

凹み石：礫の主面に敲打によるくぼみが観察される石器

石皿：礫にすり痕が認められるもののうち、置いて使用したと想定されるもの

フレイク：石核・石器などから剥離されたもので、二次加工・使用痕が認められないもの

原石：頁岩産地のため、頁岩系の礫が多く、使用痕・加工痕のないものは礫に分類した

5. 調査結果の概要

検出された遺構は、墓3基、土坑5基、焼土4ヵ所、小ピット1ヵ所、畝状遺構（畑跡）1ヵ所である。このほかに、調査区斜面や低地から土器、礫などの捨て場がみつまっている。

検出された墓は、いずれも段丘面上の標高10.5m前後の黒色土層中から小礫が集中出土してみつ
かっている。時期は縄文時代晩期前葉の上ノ国式併行で、3基のうち2基からは土器、石器のほか漆
塗り堅壺やサメ歯を利用した装身具などの副葬品がみつまっている。これら墓坑は密集して分布して
いることから、墓域があるとみられ、その範囲は調査区外にも広がると考えられる。

墓坑から東、約10メートルからは、墓と同時期の土坑が2基検出された。平面形は小判型、掘り
込みは比較的浅い皿状で、覆土は黒色土層の落ち込みである。どちらの土坑も坑底面から、まとま
った土器片などが出土している。この2基の土坑も近接しており、墓域の東側に分布域をもっている可
能性がある。時期不明の円形土坑は墓坑より西側に散在して3基検出された。そのうちの1基は墓坑
に切られて検出されている。時期は縄文時代晩期前葉よりも古いとみられる。焼土は縄文時代晩期前
葉の墓と土坑が分布する範囲の間で4ヵ所検出されている。晩期後葉の遺物散布面より下からみつ
かっていることから、墓や土坑と同時期とみられる。晩期前葉の遺構は、海岸段丘上の包含層の残り
が良い範囲と重なって検出されているため、より西側にも焼土や浅い土坑はあった可能性もあるが、
今回調査した狭小な範囲では、西から墓坑群、焼土群、土坑群と遺構毎に集中域があるようにみえた。

晩期後葉の遺構では、海岸段丘上から小ピット1ヵ所を検出し、その覆土上部には土器3個体が伏
せた状態で重ねられていた。調査区c94・95区からは時間幅の狭い晩期後葉の土器捨て場もみつかつ

ている。

畝状遺構は、海拔3m弱の斜面裾で、B-Tm層を切る畝間5条が確認された。B-Tm層が残る範囲でなければ気づかないため、確認範囲は狭く、上部の断面も失われているため、隣接地の畝の掘り下がった地点で断面測量を行っている。

遺物は、土器63,777点、石器類64,804点、その他土製品、石製品、漆製品他201点をあわせ、合計128,782点が出土した。

過年度の調査で、本調査区の北側約50mから縄文時代前期の大規模な集落址が見つかったが、それと同時期の遺構はなく、遺物も土器の細片が少量出土しただけであった。出土した土器の7割強は縄文時代晩期後葉のもので、土器捨て場や包含層からは、聖山式以降の新しい時期の土器が、平面的なまとまりをもって出土した。聖山式以降の土器としては、森町の尾白内貝塚や函館市日ノ浜遺跡などからみついているが、その内容を上回る出土量で、これらの土器には、工字文や変形工字文が付される搬入品が伴って検出され、新旧の時期差もあるものとみられる。

表 I-1 出土遺物一覧

		遺構 計	包含層 計	合計
土 器	Ⅱb		44	44
	Ⅳa		28	28
	Ⅳc		2987	2987
	Ⅴa	1335	13036	14371
	Ⅴc	75	46055	46130
	Ⅵ		72	72
	Ⅶ		128	128
	陶磁器		17	17
	土器合計	1410	62367	63777
	石 器	石鏃	5	204
石鏃		1	94	95
ナイフ			9	9
へら状 石器		1	9	10
スクレイ パー			631	631
視矽石器			24	24
フレイク		1032	27379	28411
石槌			41	41
石器合計		1039	28386	29425
硬石器		石斧		34
	たたく石	1	209	210
	すり石		3	3
	礎石		24	24
	扁平打製石器		1	1
	石鏃		44	44
	石鏃		1	1
	台石・石皿	2	8	10
	凹み石	1	49	50
	硬石器合計	4	373	377
縄	縄	10337	24665	35002
	縄合計	10337	24665	35002
土製品	土製品		2	2
	土偶		10	10
	土製円盤		26	26
	焼成粘土	34	29	63
	土製品合計	34	67	101
石製品	石製品		1	1
	石棒		12	12
	玉・磨物		11	11
	石製品合計		24	24
その他	漆製品	28	3	29
	近現代	1	13	14
	サメの歯	18	0	18
	ベンガラ顔料	1	13	14
	鉄滓		1	1
	その他合計	46	30	76
総 計	12870	115812	128782	

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

木古内町は北海道の南西部、渡島半島の南端付近の函館駅から西南西に直線で約25km、渡島半島西部の江差町、松前町、函館市の中央に位置し、漁業、酪農などを基幹産業とする町である。町名の由来はアイヌ語の「リコナイ（高く昇る瀨）」または、「リコナイ（潮の差し入る川）」から転化したものと言われている。木古内町の中心にある木古内駅は、1930年（昭和5年）に江差線の終着駅として開業し、1937年（昭和12年）の松前線開業にともない、江差線と松前線の分岐駅となった。1988年には松前線が廃止となったが、同年、海峡線の開業とともに東北新幹線連絡特急「はつかり」の停車駅となる。連絡特急はその後「白鳥」・「スーパー白鳥」と改称し2008年（平成20年）からはすべての特急が停車する駅となった。2014年、江差線の木古内駅～江差駅間が廃止され、再び江差線の終着駅となるが、2016年（平成28年）3月26日に北海道新幹線の木古内駅が開業し、北海道新幹線「はやぶさ」・「はやて」の13往復のうち、8往復16本が停車する駅となった。その一方、江差線の五枝郭駅～木古内駅間はJR北海道から経営分離され、第三セクターの「道南いさりび鉄道」へ移管された。町の人口は1961年（昭和36年）の青函トンネル建設開始前後にピークを迎えるが、その後減り続け、平成28年2月末で4,515人である。大平は、町の中心から東へ2kmほどの地域の字名で、地名の由来は江戸期の松浦武四郎『竹四郎回浦日記』に「ヲヒラ川 スフケサワの川ノ名也」そのヲヒラが転じて大平になったものとみられる。「ヲヒラ」はアイヌ語の地形地名「o-pira: (川) 口にある崖」があらわれ、大平遺跡南端の海岸段丘崖（調査地点一帯）が地名の由来となった地形とおもわれる。調査範囲は現海岸線から100m内陸の大平川左岸の標高12m前後の海岸段丘上から標高3m前後の低位の段丘面までで、低位の段丘縁は、現大平川により浸食され、法面には遺物包含層が露頭していたが、河口付近は護岸されている。川底は基盤の凝灰岩層が露頭しており、河口付近の海底まで同じ状態であることが干潮時に視認できる。海岸段丘脇を流れる大平川と孫七川は調査区から国道228号を越えた南側、約50mで合流し、津軽海峡にそそぐ。調査地点の内陸側は道南いさりび鉄道（旧江差線）で寸断され、さらに約30m山側には北海道新幹線の路線が通る。段丘上からは天気の良い日には対岸の津軽半島の建物までが目視できる。

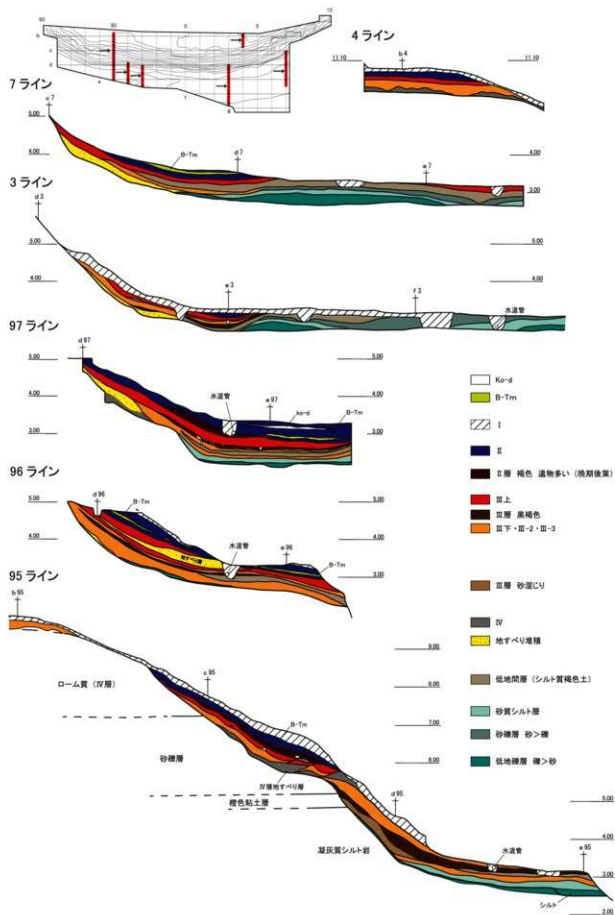
2 土層

遺跡は津軽海峡と後背の山地に挟まれた標高12m前後の海岸段丘上から、大平川が開析した標高3m前後の低位の段丘面上にひろがる。付近の地形の基盤は凝灰質シルト岩で、段丘部では標高5m付近から現れ（口絵2、図Ⅱ-1・95ライン参照）、河床部や河口付近の潮間帯にかけて露頭している。こうした潮間帯にはカモメガイ類が岩に穿孔して生息し、その痕跡が残る穴の開いた円礫が遺跡からもしばしば出土した。基盤上には、空気に触れると褐色になる粘土層が20～30cmで堆積し、その上に砂礫層が2～3m、その上にⅣ層とした褐色ローム層が2～3m堆積する。

基本土層は台地上の包含層調査からⅠ～Ⅳ層に分層した。

Ⅰ層：Ⅱ層起原の黒褐色土層で、攪乱層を含む表土層。台地上は耕作、台地下は道や宅地跡などの攪乱を受けていたが、その後荒地となっており、全面笹原に覆われ、層中には笹の根が密に入っていた。層中には下位層からの遺物が含まれている。

Ⅱ層：遺物包含層である黒色土層で、残りの良い本層中にはKo-d層（2.5Y8/1灰白色）やB-Tm



図Ⅱ-1 土層断面図

層(7.5YR6/6橙色)の薄い堆積が見られる。台地上のⅡ層は、a5調査区付近が最も残りが良く、B-Tm層(7.5YR6/6橙色)を挟んだ上位に30cm、下位に10cmほどの堆積が観察された。遺物包含層は火山灰層直下の黒色土層から縄文時代晩期の遺物が出土し、それより下位の黒褐色土層(Ⅲ層)になると遺物はなかった。低位の段丘面では、崖縁にd4区付近(図Ⅱ-1・3ライン参照)から発生し、d96区(図Ⅱ-1・97ライン参照)で調査区南側に外れる、融雪期などに水が流れた痕跡(流路跡)が検出された。流路上では包含層が厚く堆積し、最も下流側のe96区付近では、Ⅱ層中に、K-o-d(2.5Y8/1灰白色)とB-Tmの2枚の火山灰層が残っていた。

Ⅲ層：Ⅱ層下にある黒褐色(10YR2/3)から暗褐色(10YR3/4)の遺物包含層で、段丘上では遺物がほとんど含まれなかった。調査区の拡張後、低位の段丘面の調査でも、Ⅱ層下に段丘上と同じく黒褐色土層があらわれたため、同じ基本土層で調査をすすめたが、低位の段丘で現れるⅢ層は、段丘上のⅢ層とは異なる層であることが調査を進めるにつれ判明した。まず、流路跡では、狭小な範囲ではあるが、本層がローム質の間層を挟んで3つの層に分離していた。これを上層のⅢ層に対し、中間の層をⅢ-2層、下層をⅢ-3層とし調査をすすめた。出土する遺物は、Ⅲ-2層からは縄文時代晩期前葉、Ⅲ-3層からは縄文時代後期後葉の遺物が出土した。また、Ⅲ-3層から出土する遺物は0ラインより東側にかざられた。d96区斜面際には、厚く黒褐色土層が堆積し、その下位には、拳大ほどの円礫を多く含む縄文時代晩期後葉の層が確認された(図Ⅱ-1・97ライン参照)。さらにその下位には縄文時代晩期前葉の遺物を含む黒褐色土層があり、流路部で3層に分離し、Ⅲ-2層からは、上ノ国式の深鉢が一括で出土した。このことからd96~97にかけてⅡ層下には遺物を含む縄文時代晩期後葉の人為的な廃土層が挟まっていたとみられる。また、「地すべり層」とした無遺物のブロック状のⅣ層と砂礫層の混土層がd95区のⅢ層中にみられた(図Ⅱ-1・96ライン参照)。この層はc94・95区の風倒木などで生じたとみられ、その結果くぼんだ斜面に土器などが廃棄され、堆積した地すべり層にぶつかり流路跡はd96区で南にそれたと考えられる。同様な地すべりの可能性のある層は斜面裾d、e97~99区の低地でも確認された。砂礫層の薄い堆積がⅡ層中に挟まり、その上下から縄文時代晩期後葉の遺物が出土している。時期差は不明である。

Ⅳ層：褐色ローム質土層、本層は黒褐色土層下の漸移層~褐色ローム層とする。台地上の包含層で基本土層を決めたため、遺物の出土しない暫移層を設定していない。崖の堆積状況から、Ⅳ層は標高約7mまで堆積する。

その他：低位の段丘面を調査する際に設定した土層である。土層堆積が二次的(地すべり層)とみられる部分には、層中にドットを加えている。95ラインなどでは、斜面中腹でⅢ層とⅣ層の逆転しているところがあり、ドットが付されたⅣ層が96ラインの地すべり層と繋がり、その下位のⅢ層からは後期前葉の土器6、後期後葉の底部片土器52が出土しているほかはほとんど遺物がない。流路跡のⅢ層が分離する間層に「低地間層」とした土層を設定した。

海岸段丘裾の流路は、e3区付近から生じていたようだが、付近にコンクリート製の住宅基礎が残っており、詳細不明である。また、e3区より東側は孫七川側にゆるやかに傾斜し、Ⅲ層中には同様に低地の間層が挟まるが、Ⅲ層以下から遺物は出土しなかった。3、7ラインの観察から、遺物包含層は海岸段丘裾の沢を越えた海側では、河川性の堆積層(青系で彩色)が標高3m付近まで高まっており、黒色土層も標高4m付近まであった可能性があるが、住宅等で削平されていた。

3 周辺の遺跡

木古内町内の遺跡は、海岸に沿った段丘上に集中することが知られている。平成28年8月現在、木古内町内で周知されている遺跡は62ヵ所である。そのうち、これまでに調査あるいは一部調査の行われた遺跡は全部で35ヵ所である。近年、緊急発掘調査が増えており、農道整備事業で9遺跡、砂利採取事業で2遺跡、北海道新幹線建設事業で6遺跡、高規格道路函館江差自動車道建設事業で14遺跡の調査が行われている。

大平遺跡周辺には、南西側に大平2遺跡(21)、大平3遺跡(22)、木古内遺跡(3)、木古内2遺跡(28)が、北東側には大平4遺跡(29)、蛇内遺跡(8)、蛇内2遺跡(19)、蛇内3遺跡、札苅2遺跡(30)、札苅遺跡(4)がある。()内は搭載番号。このうち、調査された遺跡について、概略を記す。

大平遺跡：報告範囲の北側では、北海道新幹線建設工事に伴い、平成21～23年度に4,786㎡の発掘調査が実施され、縄文時代前期後半の大規模な集落跡がみつまっている。検出された遺構は、竪穴住居跡53軒(擦文文化期6軒、後期前葉1軒、中期初頭1軒、前期後半45軒)、土坑52基、フラスコ状ピット64基、柱穴状ピット36基、盛土遺構1ヵ所などで、出土遺物総数は178万点にのぼる。前期以外では、擦文文化期の竪穴住居跡が、大平川に近い、台地上西側に6軒が並んで検出されている。時期は8世紀中葉が5軒、9世紀中葉が1軒である。また、台地上の住居跡の覆土の落ち込みなどからは、縄文時代晩期後葉の遺物がまともって出土している。(北埋調報280・321)

大平4遺跡：孫七川左岸にひろがる。発掘調査は、平成21・22年度に北海道新幹線建設工事に伴い、183㎡、平成24～26年度にかけては高規格道路函館江差自動車道建設事業で15,593㎡、合計18,776㎡の発掘調査を実施している。縄文時代中期後半の集落跡が検出されている。遺構は、竪穴住居跡14軒(中期後半12軒、早期後半2軒)、土坑68基、Tピット4基などで、出土遺物総数は約148,000点である。(北埋調報280・292・調査年報25・26・27)

木古内遺跡：北海道新幹線建設工事に伴い平成22・23年度に12,020㎡の発掘調査を実施した。

検出された遺構は、竪穴住居跡31軒(擦文文化期2軒、早期後半7軒、前期後半14軒、後期前半6軒、縄文時代2軒)、土坑153基、Tピット9基、擦文文化期のものとみられる溝状遺構1ヵ所などで、出土遺物総数は138,574点である。(北埋調報304)

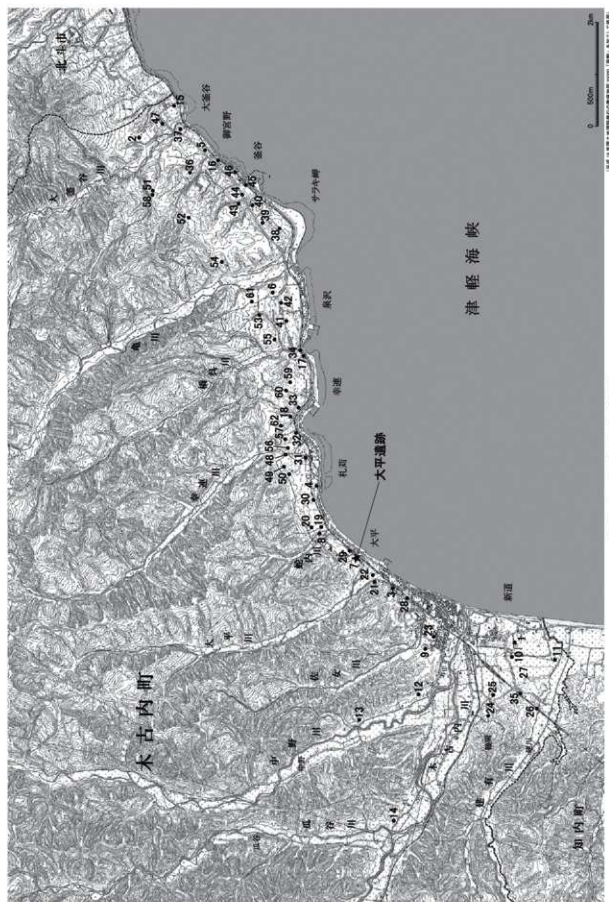
木古内2遺跡：北海道新幹線建設工事に伴い平成22・23年度に1,280㎡の発掘調査を実施した。

台地縁の狭い範囲から、長径11mを越える大型竪穴住居跡を含む縄文時代前期後半の竪穴住居跡6軒等が検出された。出土遺物総数は19,323点である。(北埋調報278・293)

蛇内遺跡：広域営農団地農道整備に伴い平成12年度に1,200㎡の発掘調査を実施し、竪穴住居跡8軒、土坑39基、捨て場遺構などを検出した。(木古内町教育委員会1997)

蛇内2遺跡：北海道新幹線建設工事に伴い平成21～23年度に11,357㎡の発掘調査を実施した。検出された遺構は、竪穴住居跡15軒、土坑87基、フラスコ状ピット9基などで、出土遺物総数は138,574点である。(北埋調報281・292)

札苅遺跡：北海道開拓記念館(現北海道博物館)が昭和46～47年度に学術調査353㎡を実施し、晩期中葉の墓60基や竪穴住居跡2軒がみつまっている。(北海道開拓記念館1976)昭和48年度には、国道拡幅に伴う発掘調査812㎡を木古内町教育委員会が実施し、竪穴住居跡2軒、和人の墓1基、アイヌ墓1基などがみつまっている。遺物は、縄文時代晩期前・中葉の遺物を中心に約176,000点が出土している。(木古内町教育委員会1974)昭和60年度には津軽海峡線建設工事に伴う発掘調査1,753㎡が実施され、晩期中葉の土坑4基などが検出されている。(北埋調報34)



図II-3 木古内町内の遺跡

表Ⅱ-1 木古内町の遺跡一覧

登録番号	遺跡名	種別	主な時期	調査歴(報告年)
B-05-01	新道遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-02	大釜谷遺跡	遺物包含地	縄文(中期～後期)	
B-05-03	木古内遺跡	集落跡	縄文(前期・中期)・弥文	2010・2011 道埋文(2013)
B-05-04	札苜遺跡	集落跡	縄文(晩期)・近世	1971・1972 北海道開拓記念館(1976) 1973 町教委(1974) 1983 道埋文(1986)
B-05-05	釜谷遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)・弥文	1991～1993 町教委(1999)
B-05-06	泉沢遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-07	大平遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)・弥文	2009～2011・2013 道埋文(2011・2015・2016本書)
B-05-08	蛇内遺跡	集落跡	縄文(前期～後期)	2000 町教委(2004)
B-05-09	新栄町遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-10	新道3遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	1996 町教委(1997)
B-05-11	新道2遺跡	集落跡	縄文(前期)	1997～2002 町教委(1999・2004)
B-05-12	中野A遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-13	中野B遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-14	瓜谷遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-15	大釜谷2遺跡	遺物包含地	縄文(前期・中期)	
B-05-16	釜谷2遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-17	佛侶遺跡	遺物包含地	縄文・縄文(前半期)	
B-05-18	幸津遺跡	遺物包含地	縄文(中期・後期)	
B-05-19	蛇内2遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)	2009～2011 道埋文(2011・2012)
B-05-20	蛇内3遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-21	大平2遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-22	大平3遺跡	遺物包含地	縄文(中期)	
B-05-23	高校高台遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-24	鶴岡遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-25	鶴岡2遺跡	遺物包含地	縄文(前期～後期)・縄文	1988・1989 町教委(1989・1990)
B-05-26	埴川遺跡	遺物包含地	縄文(早期～後期)	1984 道埋文(1986)
B-05-27	新道4遺跡	集落跡	旧石器・縄文(早期～晩期)・縄文	1984～1996・2013 道埋文(1986・1987・1988・2015)
B-05-28	木古内2遺跡	集落跡	縄文(前期)	2010・2011 道埋文(2011・2012)
B-05-29	大平4遺跡	集落跡	縄文(早期～中期・晩期)	2009・2010・2012～2014 道埋文(2011・2012・2016)
B-05-30	札苜2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-31	札苜3遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-32	札苜4遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-33	幸津2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-34	佛侶2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-35	埴川2遺跡	集落跡	縄文(前～晩期)	1985・1986 道埋文(1987)
B-05-36	釜谷3遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	
B-05-37	釜谷4遺跡	遺物包含地	旧石器・縄文(早期～後期)	1990 町教委(1991)
B-05-38	亀川遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	
B-05-39	亀川2遺跡	遺物包含地	縄文(中期～晩期)	1995 町教委(1998)
B-05-40	亀川3遺跡	集落跡	縄文(早期～後期)	1995 町教委(1998)
B-05-41	泉沢2遺跡	集落跡	縄文(前期～晩期)・弥文	1996～2001 町教委(2003・2004)
B-05-42	泉沢3遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	1996 町教委(1998)
B-05-43	亀川4遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-44	釜谷5遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)	1993 町教委(1995)
B-05-45	釜谷6遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-46	釜谷7遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-47	大釜谷3遺跡	集落跡	縄文(前期～晩期)	2001 町教委(2003)
B-05-48	札苜5遺跡	遺物包含地	縄文(早期・前期・後期)	2011 道埋文(2012)
B-05-49	札苜6遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	2011 道埋文(2013)
B-05-50	札苜7遺跡	集落跡	縄文(中期・後期・晩期)	2013～2016 道埋文
B-05-51	釜谷8遺跡	遺物包含地	縄文(早期・中期・後期)	2011・2012 道埋文(2013)
B-05-52	釜谷9遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-53	泉沢4遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-54	亀川5遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	2014 道埋文(2016)
B-05-55	泉沢5遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	2014 道埋文(2016)
B-05-56	札苜8遺跡	集落跡	旧石器・縄文(前期)	2014 道埋文
B-05-57	札苜9遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-58	釜谷10遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	2016 道埋文
B-05-59	幸津3遺跡	遺物包含地	縄文(中期)	2015 道埋文
B-05-60	幸津4遺跡	遺物包含地	縄文(前期後半・中期後半～後期前半)	2015・2016 道埋文
B-05-61	泉沢6遺跡	遺物包含地	縄文(早期後半・後期前半)	2015・2016 道埋文
B-05-62	幸津5遺跡	集落跡	縄文(前期・中期)	2016 道埋文

町教委:木古内町教育委員会、道埋文:北海道埋蔵文化財センター

III 遺 構

検出された遺構は、墓3基、土坑5基、焼土4ヵ所、小ピット1ヵ所、畝状遺構(畑跡)1ヵ所である。縄文時代の遺構はいずれも段丘面上の標高10.0mより高い位置から掘り込まれている。特に縄文時代晩期後葉の墓、焼土、土坑は標高10.5mよりも高い場所に集中分布している。

晩期前葉の墓(P-241、P-243、P-246)は、包含層Ⅱ層中から小礫が集中出土することからみつかっている。長軸は東西方向で、頭位は東側にあるとみられる。(図Ⅲ-1 遺構位置図) 時期は大洞BC式併行の上ノ国式で、3基のうち2基から土器、石器のほか漆塗り堅櫛やサメ歯を利用した装身具などの副葬品が出土している。墓坑は密集分布していることから、墓域を形成しているとみられ、その範囲は調査区外にも広がると考えられる。

縄文時代晩期後葉の土壇2基(P-244、P-245)は、墓から東に約10m離れた場所で検出された。平面形は小判型で、掘り込みは皿状で比較的浅く、覆土はⅡ層の落ち込み堆積である。坑底面付近からは土器片などがまとまって出土している。この2基の土壇も近接しており、墓域の東側に分布域をもっていた可能性がある。時期不明の円形土坑(P-242、P-247、P-248)は墓坑より西側に散在して3基が検出された。そのうちの1基は墓に切られてみつかっている。時期は縄文時代晩期前葉よりも古いとみられる。焼土(F-101~104)は縄文時代晩期前葉の墓と土坑が分布する範囲の間で4ヵ所みつかっている。付近には晩期後葉の遺物散布面があったが、それより低い面で検出されていることから、墓や土坑と同時期とみられる。晩期前葉の遺構は、台地上の包含層の残りが良い範囲と重なって検出されているため、より西側にも焼土や浅い土坑はあった可能性もあるが、今回調査した狭小な範囲では、西から墓坑群、焼土群、土坑群と遺構毎に集中域があるようにみえる。

以下個々の遺構の記載にはいるが、遺構番号順ではなく、掲載順に墓、土坑、焼土の順に記載する。

P-241 (図Ⅲ-2・図Ⅳ-8-62・図Ⅳ-13-194・図版2・8・36・41)

位置 b0区

規模 181.0×81.2×50.4cm

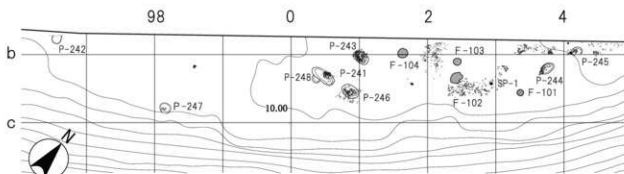
平面形 長円形

確認・調査: 表土層を取り除いたあとのⅡ層面に小礫が集中する場所を発見したことから墓の存在する可能性があるとして調査を進めた。墓の掘り込み面は攪乱を受けているとみられるが、まず小礫集中範囲を平らに検出し、その範囲を測量したのち、検出された範囲の長軸を軸とし北側を掘削した。覆土にも小礫は多量に含まれ、測量は検出面と北半分の掘削直後にとどめたが、覆土の全面を覆っていたとみられる。小礫層をこえると黒褐色土層の堆積になり、含まれる小礫の量は減ったが、この時点で手を掘りすぎた。礫層下の黒褐色土層はⅢ層とⅣ層の混土で、遺構の中央で山形に盛り上がり、堆積の裾は長軸両端付近に達した。覆土下位なるにつれⅢ層とⅣ層がブロック状に混じりあう堆積に変化する。検出面で確認した小礫層は本層に重なって堆積する。坑底面は平らで、少量の円礫がみられたほか遺物や遺体の痕跡はみつからなかった。

遺物出土状況: 検出面から覆土にかけて出土した小礫は、頁岩、珪岩質の粒径3~4cm前後の円礫が主体で、付近の海岸や河原の粒径がそろっている場所から持ち込んだものと考えられる。回収できた礫の総数は3,422点、総重量39,522gで、それに混じり土器の小片や剥片類が出土した。

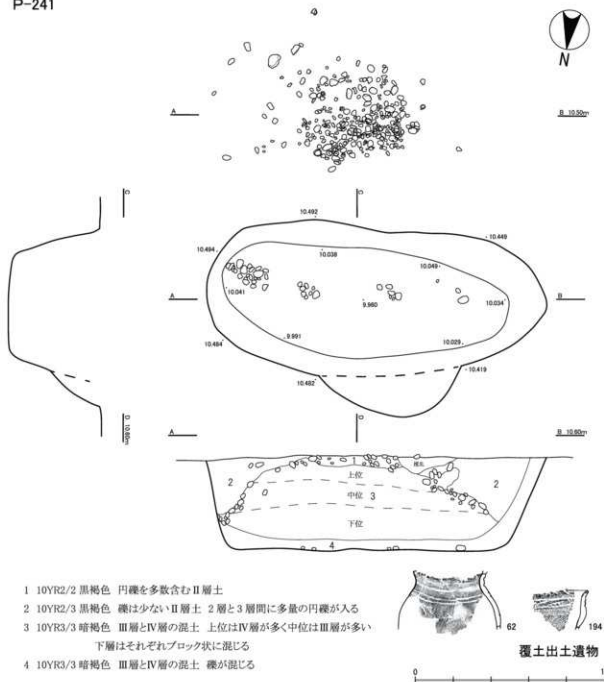
時期: 検出された土器はすべて縄文時代晩期前葉で、墓も同時期とみられる。

掲載遺物: 土器62は搬入品とみられる壺形土器の頸部片で、無文地に頸部に3条の沈線、体部上半には三叉文が施される。土器194は頸部に羊歯状文が施された鉢の口縁部片である。



図Ⅲ-1 遺構位置図

P-241



- 1 10YR2/2 黒褐色 円礫を多数含むⅡ層土
- 2 10YR2/3 黒褐色 礫は少ないⅡ層土 2層と3層間に多量の円礫が入る
- 3 10YR3/3 暗褐色 Ⅲ層とⅣ層の混土 上位はⅣ層が多く中位はⅢ層が多い
下層はそれぞれブロック状に混じる
- 4 10YR3/3 暗褐色 Ⅲ層とⅣ層の混土 礫が混じる

覆土出土遺物

図Ⅲ-2 P-241 平面図・断面図

P-243 (図Ⅲ-3・図Ⅲ-4・図Ⅳ-10-132・図Ⅳ-8-91・93・口絵3・7・図版2・12・15)

位置：b1 杭下

規模：115.8×72.4×55.6cm

平面形：小判形

確認・調査：包含層調査が進むと、b1の杭の周囲に小礫が集中出土することがわかり、杭山を小さく削り小礫集中の範囲の検出を進めた。全体の範囲が見えてくると、一部礫のない場所が現れ、その脇に大型礫が2個、範囲中央に向かって落ち込む状況で検出された。そこで、2つの大型礫に重なる方向で断面測量の軸を決め、その南側を掘削した。断面はこの位置でほぼ墓の中央にあたり、上部に落ち込む包含層Ⅱ層と杭を取り除くと(口絵3 P-243断面参照)、上層の小礫が多数混じる黒褐色土層が墓の中央に落ち込み、その上に二つの大型礫がのっているのが解った。覆土下位はⅣ層起原の暗褐色土層になり、坑底面付近に薄くベンガラ混じりの層が入る。坑底面は平らで、坑底東側から大白歯が2本、中央から白歯の破片が検出された。

遺物出土状況：出土した小礫は、ほとんどが検出面から覆土1層で出土し、覆土中や坑底面面からも少量が出土した。ほかの墓坑と同じく粒径3～4cm前後の頁岩や珩岩質の円礫が主体で、付近の海岸や河川から持ち込んだものと考えられる。回収した礫の総数は4,151点、総重量45,677gである。墓坑中央で出土した大型礫は長径20cm前後で、白いメノウ質のもの、桃色に近い珩岩質の礫で、こういった礫も木古内では普通にみられる。出土状況から、墓の上面に小礫を敷きつめ、その上に大きな礫が長軸方向に2個並んでいたとみられる。

坑底面南側からは副葬品とみられる大型の台付深鉢底部片がまとまって出土し、その周辺からP-246に副葬されていた2個体の土器の一部の破片が出土している。装身具とみられるアオザメの歯15点や塗漆り整櫛2点は坑底面のベンガラ混じりの薄い層上や層中から出土している。

これら装身具は、墓坑を半載している際に、縦櫛頂部の装飾を破損し、破片を掘り上げた土の中から回収している。また、その際にサメ歯もみつかっており、掲載したサメの歯15点中の5点は排土から回収したもの、残る10点中の、No.4～7の位置は掘り手の申告位置である。整櫛(図Ⅲ-4-1)は、結歯部の破片が断面中に残っており、出土位置や層位、出土方向は確定できた。完掘の際、坑底面に薄く堆積するベンガラ混じりの層上から縦櫛1の結歯部と、サメ歯No.3が重なって出土した。

時期：副葬された土器から縄文時代晩期前葉の墓とみられる。

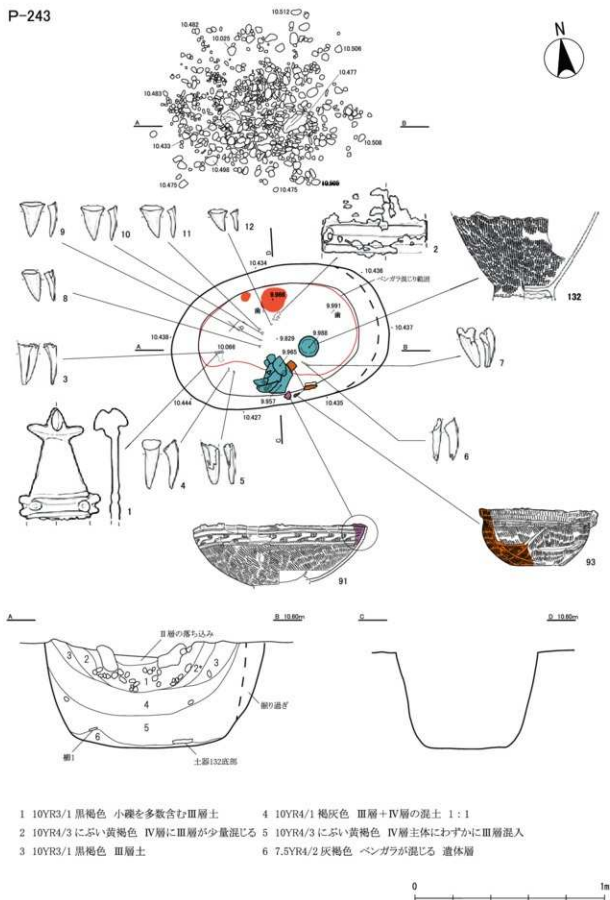
掲載遺物：土器132は大型の台付深鉢底部片で、口縁部から胴部と台の端部を欠く。台にへら状の工具による刺突列が施されることから、縄文時代晩期前葉の上ノ国式相当と考えられる。土器91は同時期の墓P-246の坑底面付近から出土した底部を欠く浅鉢で、口縁部片の1片が、土器132隣の南壁面に付く状況で出土した。土器93もP-246の覆土中からまとまって出土した破片だが、口縁部から胴下部の破片が土器132の下からと脇の南壁面で出土している。

櫛1(図Ⅲ-4-1)は結歯部から上部の装飾部を破損し、接合復元したもので、表面に水銀朱が塗布される。櫛歯は8本で、両脇の歯が太かったとみられる。頂部の装飾の加工が搬入品の大洞BC式土器にみられる貼瘤文と酷似しており、搬入品と考えられる。詳しい分析は第Ⅴ章に記載している。

櫛2(図Ⅲ-4-2)は脆弱な状況で出土したため、出土状況で固めている。水銀朱が塗布され、結歯部の幅は55mm、厚さは5mmほどで、櫛歯は10本程度あったとみられる。

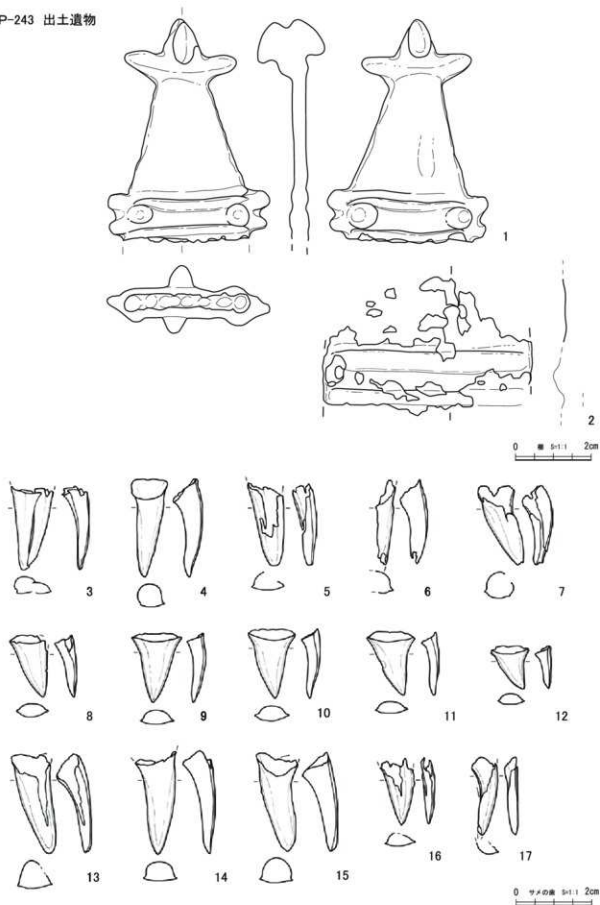
図Ⅲ-4-3～17はサメ歯の装飾品とみられる。歯根部は失われており、穿孔などの加工があったかは不明である。アオザメの下顎の歯がほとんどで、重複している歯が多い(サメの歯は同じ歯が複数ある)。同じ歯でも大きさが異なることから、同一個体の歯ではないとみられる。

P-243



図Ⅲ-3 P-243 平面図・断面図

P-243 出土遺物



図III-4 P-243 出土遺物

P-246 (図Ⅲ-5・図Ⅲ-6・図Ⅳ-10-132・図Ⅳ-8-91・93・口絵3・図版2・8・12)

位置 b0

規模 周囲を掘りすぎている。推定される規模は106.8×56×36.6cmである。

平面形 小判形

確認・調査：縄文時代晩期前葉の墓P-241の東側の包含層調査で1m×1.5mほどの範囲に散らばる大小の円礫が出土しはじめた。墓があるとき検出を進めると、礫の分布範囲の中に割れた大型円礫が深く落ち込む状況で検出された。この礫は墓に入っているものと推測されること、付近の墓の長軸は2基とも東西方向であったため、この礫を通る東西方向のセクションラインを決め、礫の周囲を中心にライン南側の掘削を進めた。覆土にも小礫が多数含まれたが、測量は検出面と途中の遺物検出の際に出土したものとどめた。墓の形状を探りながら調査を進めていると、大型の円礫が出土しはじめ、掘削の妨げになってきた。これらの礫を取り上げなければ断面の観察ができないため、セクションラインの調整や、礫の輪郭を出すよう掘り広げたが、結果的には土坑の壁面を掘りすぎることとなった。出土した大型礫の位置を重ねると、土坑の平面形と、ほぼ重なることとみられ、覆土中位に礫をはめ込むように入れ、被葬者の上を覆っていたものとみられる。これは、ほかの2基の墓に比べ、深さが浅く、動物に掘り起こされるのを防ぐための策だった可能性もある。断面図には現れなかったが、大型礫間から坑底面まで小礫を含む層で埋められており、その層から副葬された土器も出土した。坑底面は平らで、坑底面東側の石皿下からは人の大白歯2本とサメ歯が出土した。

遺物出土状況：出土した長径30cmをこえる大型の円礫3点と長方形に近い形状の石皿1点は、覆土の中央にあり、被葬者を埋めたのち上部を覆うように敷き詰めたとみられる。石皿は被葬者の頭上におかれ、円礫が土坑中央に2列、土坑西側に最も大きい礫1点が置かれ、これらの大型礫間の隙間を埋めるように長径20cmほどの礫5点が西側や中央付近に配置されていた。石皿以外の大型円礫は被熱のためか、色調が赤みを帯びる安山岩で、供給元は不明だが、持ちこんだものである。これと似た砕石が工事現場で使われていたため、どこの砕石か聞いたところ七飯町の鳴川と教えてくれた。

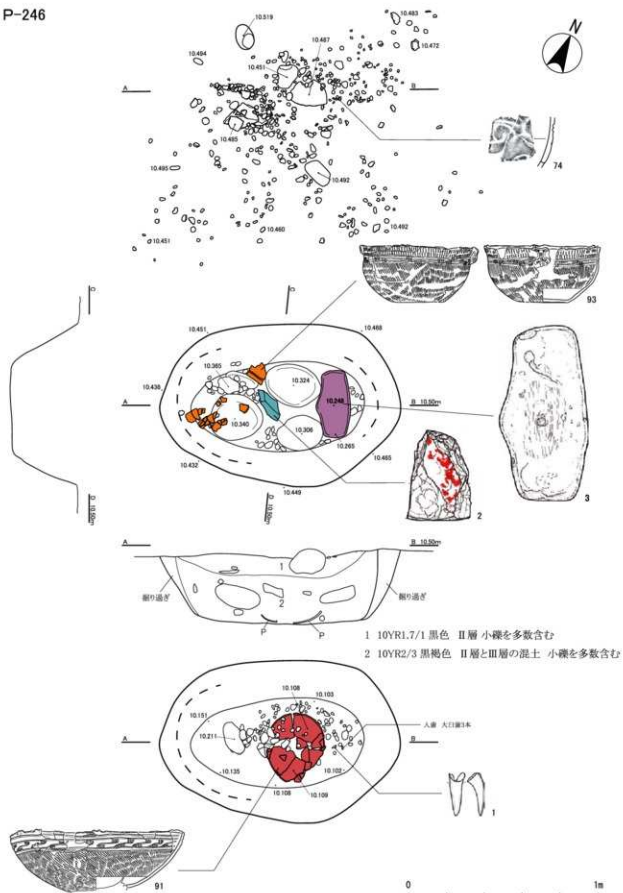
小礫は、検出面から坑底面までの覆土全般に混じる粒径3～4cm前後の頁岩や珪岩質の円礫が主体で、付近の海岸や河川から持ち込んだものとみられる。P-246から回収した礫の総数は2,631点、総重量83,498gであった。大型の礫が多い分、総数は他の墓より少ないが、総重量は倍近くある。

副葬された土器は2点あり、土器91は大型礫より下から底部を打ち欠かれて出土した。出土状況から、ある程度形状を保った状態で被葬者の上に置かれていたとみられる。土器93の破片は、西側覆土中位の大型礫の間や上から出土した。2点とも破片のほとんどがそろっていることから、副葬する際に割ったとみられる。また、土器91の口縁部片1片と土器93の口縁部から胴下部の破片10片がP-243の坑底面の副葬土器片のそばから出土しており、P-243・246は同時期につくられた墓である可能性がある。土器74は大洞BC式の搬入品の破片で、検出面付近の小礫層の間からみつかった。副葬品ではなく、同時期の包含層の遺物が紛れたものとみられる。墓坑の中央付近から、被熱した安山岩坑製の台石片が出土、底面東側からは、小礫が散らばる間から、人の大白歯が2本、その4センチ離れた同レベルからアオザメの歯が1点出土した。

時期：副葬された土器から縄文時代晩期前葉の墓とみられる。

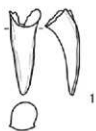
掲載遺物：土器91は縄文時代晩期前葉の上ノ国式相当の浅鉢で、口縁部～胴下部がほぼそろっているが底部を欠く。土器93も縄文時代晩期前葉の上ノ国式相当の浅鉢で、底部は無文で平らに調整され、胴下部の地紋の上には指先ほどの幅のある凹帯で文様が付され、一部交差する。口縁部にはヘラ状の工具による刺突列が2段付され、その下位に太い沈線と刺突で羊歯状文が施される。土器74は覆土に

P-246

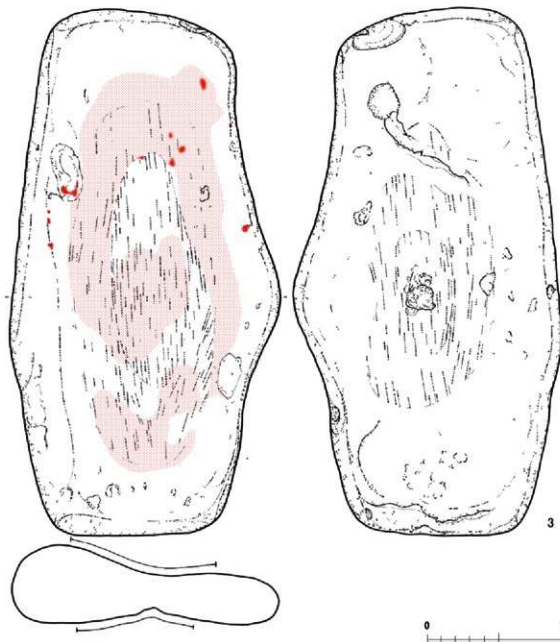
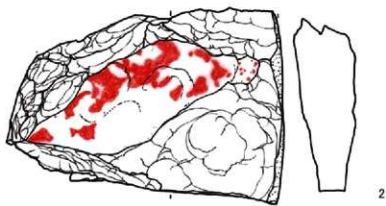


図III-5 P-246 平面図・断面図

P-246 出土遺物



0 ヤメの線 5:1 2cm



0 10cm

図Ⅲ-6 P-246 出土遺物

紛れて出土したとみられる大洞BC式相当の破片で、器面には漆が塗布された痕跡がのこる。

サメ歯1は坑底面の人歯付近から1点出土した。アオザメの下顎歯であるが、P-243から出土しているサメ歯より小さい個体である。2は墓坑中央から出土した台石片で、被熱している。周囲に故意に割った痕跡があり、表面にベンガラが付着する。3は遺体の頭上から出土した安山岩製の石皿である。両面が使用され、出土時の下面側にはベンガラが付着する。2、3の石器に付着するベンガラは石皿で精製されたというよりは、坑底付近の覆土にベンガラが混じっており、それが付着したものとみられる。

P-242 (図Ⅲ-7・図版3)

位置 a96 規模 72.0×66.0×8.8 平面形 円形

確認・調査：海岸段丘上のa列は1m前後の幅しかないため、包含層のⅡ層の残りが悪く遺物の出土しない0ラインより西側では、スコップでⅢ層を掘り下げⅣ層まで一気に包含層を掘り下げる調査をすすめていた。そのおり、Ⅳ層上面に円形のプランが現れ遺構を確認した。

遺構の一部は調査区外に出ているため、壁面に対し垂直方向の断面を設定し半截した。残りの覆土は浅く、10cmも掘ると坑底面に達した。完掘すると、調査区境に残る断面が観察でき、本遺構上でⅢ層が水平体積し、それより下から掘り込まれている状況が観察できた。覆土下位には黒色土層が堆積しているが、埋め戻されない土坑の中に腐植土層がたまったものとみられる。

遺物出土状況：上部はスコップで掘り進めていたためか遺物は1点も出土していない。

時期：Ⅲ層より下から掘り込まれているため、縄文時代後期後葉以前の土坑とみられる。

P-244 (図Ⅲ-7・図Ⅳ-8-81・図Ⅳ-67-307・図版3・12・61)

位置 b3 規模 101.2×68.8×7.2 平面形 楕円形

確認・調査：b3地区の包含層調査が進み、遺物が出土しなくなるⅢ層に達した時点で、Ⅲ層中にⅡ層が円礫や土器片と一緒に楕円形に落ち込むことから確認した。礫に混じる土器片は同一個体とみられ、被熱し細かく割れている状態であった。長軸でセクションラインを設定し、その東側を掘削したところ、すぐに底が出た。皿状の浅い土坑で、覆土にはⅡ層が落ち込み、坑底はⅢ層中である。坑底面中央はやや平らだが坑底面縁は緩やかに立ち上がる。掘り込み面は、より上層のⅡ層中だが、せいぜい20cm前後の深さしかなかったと推測される。

遺物出土状況：検出面から坑底面まで、覆土中には円礫や被熱した土器片が入っていた。礫の一部も被熱しているのか、割れている状況がみられた。

出土した土器片は613点で、ほとんど同一の縄文時代晩期前葉の壺形土器の破片で、接合の結果ようやく全体像がわかる程度の復元に至った。出土している円礫は65点、最大のもので長径15cm前後である。礫の中に凹み石が1点含まれていた。

時期：出土した土器から縄文時代晩期前葉の土坑とみられる。

掲載遺物：土器81は上ノ国式相当の壺形土器で、口径10.5cm、器高26.4cmある。破片は多数あったがほとんど接合せず残片となってしまった。底部は上げ底で、胴部は縦長に緩やかに膨らみ高さの半分ほどにピークがくる。口唇は丸みをおび、口縁部は無文である。

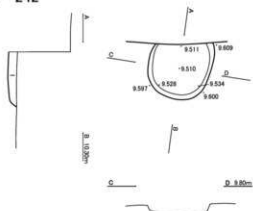
石器40は両面が使用された頁岩製の凹み石である。

P-245 (図Ⅲ-7・図Ⅳ-9-90・図Ⅳ-9-96・図Ⅳ-10-124・図版3・13・14・37)

位置 a4 規模 (88.0)×64.0×12.0 平面形 楕円形

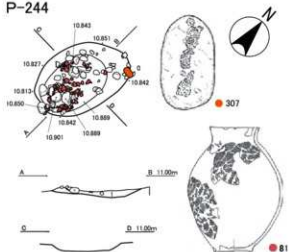
確認・調査：a4、b4区境にトレンチを入れたところ、断面のⅢ層中に円礫や土器片と一緒に落ち込むⅡ層の窪みが見つかり、遺構と気づく。セクションはトレンチと並行に10cmほど奥まった位置で設

P-242



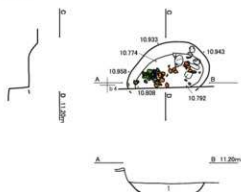
I 10YR2/1 黒色 黒色の腐植土がたまったものとみられる

P-244

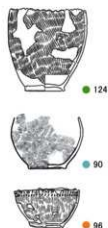


I 10YR2/1 黒色 II層の落ち込みとみられる

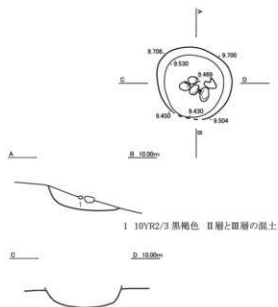
P-245



I 10YR2/1 黒色 II層の落ち込みとみられる

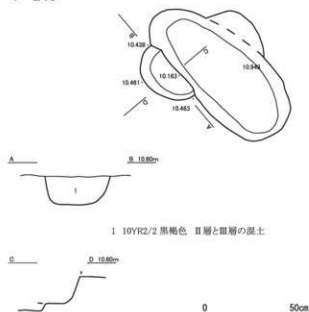


P-247



I 10YR2/3 黒褐色 II層とIII層の混土

P-248



I 10YR2/2 黒褐色 II層とIII層の混土

図Ⅲ-7 P-242・244・245・247・248 平面図・断面図

定した。トレンチにより、土坑の4分の1、南側の壁の立ち上がり部分が失われている。深さは12cmほどで、掘り込み面が多少上面からだとし、深くて20cm前後しかなかったと推測される。坑底面は比較的平らだが、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土中にも遺物は入るが、土器、礫などの多くは坑底面から集中して出土し、3個体の土器が復元された。

遺物出土状況：本土坑からは118点の土器片が検出され、坑底面から出土した破片から3個体が復元された。土器90は坑底面西側から出土した細かい破片37点が接合した。土器96は坑底面に広く散らばる15点の破片から、底部のから口縁部の半分までが接合し、a3区から口縁部の半分の破片が接合した。土器124は坑底面西側の土器90上に重なる破片32点が接合した。坑底面東側では円礫が3点出土している。

時期：出土した土器から縄文時代晩期前葉の土坑とみられる。

掲載遺物：復元された3点はすべて縄文時代晩期前葉の上ノ国式相当の土器である。土器90はキャリパー形の口縁部を持つ鉢で、僅かに残る口唇には刻みが付される。胴部は地文のみで、底部は上げ底である。土器96は小形の鉢形土器で、地文は縦に施文され、口縁部には半截竹管工具による刺突列が2段付される。口唇部は平らに調整され、6ヵ所突起があったとみられる。底部は上げ底である。土器124は小型の深鉢で、器面には地文のみが施される。口唇部は小波状に刻まれる。

P-247 (図III-7・図版3)

位置 b98 規模 81.5×76.8×24.4 平面形 円形

確認・調査：b98区の包含層調査をIV層まで下げた時点で、礫が集まっていることから確認された。包含層の残りが悪い、斜面落ち際にある土坑で、検出面上に長径15cm前後の礫5点がみつかった。検出面も傾斜しているが、深さは約24cm残る。

遺物出土状況：検出面上から長径15cm前後の礫5点、礫片1点が出土。本来は土坑覆土中にあったものとみられる。

時期：後期後葉以前の土坑とみられる。

P-248 (図III-7・図版3)

位置 b0 規模 69.6×-×29.6 平面形 円形

確認・調査：縄文時代晩期前葉の墓P-241の完掘ご、壁面に現れた土坑である。壁面に現れた土坑面を垂直になおし、断面測量した。半分は失われているが、直径70cm前後の円形土坑だったと考えられる。深さは約30cm残る。

遺物出土状況：遺物は覆土から礫が1点だけ出土した。

時期：晩期前葉の墓に切られることから、後期後葉以前の土坑とみられる。

F-101 (図III-8)

位置 b3 規模 51.2×52.0cm 平面形 円形

確認・調査：b3区のII層から検出された焼土である。斜面落ち際で検出したため上面は傾斜している。焼土層は厚いところで約9cmである。遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：縄文時代晩期前葉の焼土とみられる。

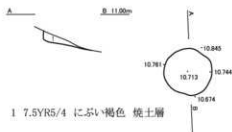
F-102 (図III-8・図版4)

位置 b2 規模 95.2×75.6cm 平面形 不整形

確認・調査：b2区II層の晩期後葉の遺物層より下位からF-103と並んで検出された焼土。焼土層は厚いところで5.2cmである。遺物出土状況：遺物は出土していない。

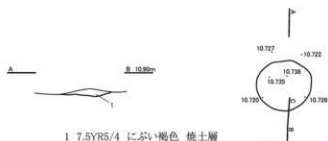
時期：縄文時代晩期前葉の焼土とみられる。

F-101



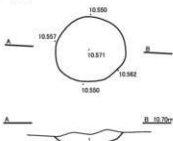
I 7.5YR5/4 にぶい褐色 焼土層

F-103



I 7.5YR5/4 にぶい褐色 焼土層

F-104



I 5YR4/4 にぶい赤褐色 焼土層

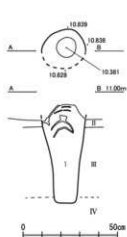
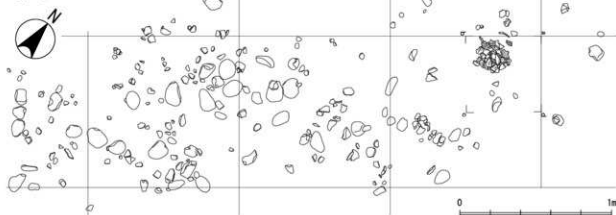
F-102



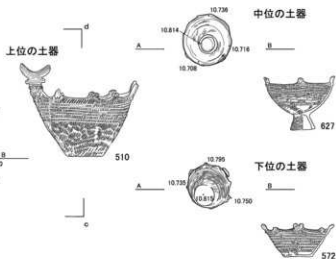
I 7.5YR4/4 褐色 焼土層

0 50cm

SP-1



I 10YR2/2 黒褐色 II層とIII層の混土 しまり弱い



図Ⅲ-8 F-101 ~ 104・SP-1 平面図・断面図

F-103 (図Ⅲ-8・図版4)

位置 b2 規模 52.8×59.2cm 平面形 円形

確認・調査：b2区Ⅱ層の晩期後葉の遺物層より下位からF-102と並んで検出された焼土。F-102よりやや低い面で検出している。焼土層は厚いところで7.6cmである。

遺物出土状況：土器3点、フレイク2点が見つかった。

時期：縄文時代晩期前葉の焼土とみられる。

F-104 (図Ⅲ-8・図版4)

位置 a1・b1 規模 75.6×67.6cm 平面形 円形

確認・調査：a1区、b1区の境Ⅱ層から検出された直径約70cmの円形の焼土である。焼土層の厚さは最大で14cmである。遺物出土状況：土器1点、フレイク1点が見つかった。

時期：縄文時代晩期前葉の焼土とみられる。

SP-1 (図Ⅲ-8・図Ⅳ-40-510・図Ⅳ-45-572・図Ⅳ-47-627・口絵5・図版3・29・30・32)

位置 b2 規模 25.0×25.0×44.0cm 平面形 円形

確認・調査・遺物出土状況：b2区の斜面縁Ⅱ層から、およそ1m×3mの範囲で、長径10～15cmの円礫を中心とした縄文時代晩期後葉の遺物が集中して検出された。出土している土器には変形工字文の付される破片が含まれていたため(図Ⅳ-72参照)、晩期後葉の遺物中でも新しい時期のものとも推測された。この遺物集中の東端から、1個体の鉢形土器が底部を上面に潰れた状態で検出された。周囲の遺物の出土レベルは標高10.9～10.85m前後で、鉢の検出レベルとほぼ同じであったが、周囲の遺物が地面から浮いて検出されるのに対し、この鉢は底部を頂部に口縁部はさらに掘り下げて検出する状況だった。鉢の取り上げ作業を進めたいとき、大きな装飾の付く口縁部片が動かなかったため、断面を残し下げてみると、口唇に付く装飾の先端にさらに大きな三日月形の装飾が付いていることと、別個体が下に重なっていることが判明した。そこで、土器を残しながら、西側を大きく広げると、下に重なる土器が台付鉢であることと、さらに鉢形土器が下に重なることがわかった。土器の周囲の土が柔らかいことが気になったが、断面には特に周囲と変わった様子がなかったため、土器の重なる状況を記録し取り上げた。その後、広げた穴をⅣ層まで下げると、黒色土中に掘り込まれた小ピットであることが判明した。覆土は単調でⅡ層とⅢ層の混土層で坑底面は直径約10cmの円形で、平らに調整されⅣ層上位に達していた。最上部の鉢も口縁部片を検出するため周りを掘り穿めたが、底部はあまり風化していないことから、本来は埋まっていたものとみられる。

時期：縄文時代晩期後葉

掲載遺物：土器510は、最上部に置かれていた鉢形土器で、口縁部に6ヶ所の突起を有する。端部に三日月形の装飾を有する最大の突起の対面に2番目に大きい突起が付き、その左右に同じ形状の突起が並ぶ。見方によっては3個一組の突起の大小が対で口縁部に付されているようにもみえる。口縁部には、突起の中心の位置に貼瘤文が付され、4条の沈線の下に等間隔で貼瘤文が付される短刻沈線が施され、その下位に2条の沈線が付される。胴部には3対の補修孔が付される。

土器572は最下位から出土した。口唇部には4単位の大きな突起間に小さい突起が付される合計8単位の突起を有する鉢である。口縁部の文様は、上から突起下にA状の貼瘤文が付される短刻線文、3条の沈線、短刻線文、2条の沈線の順に施文される。大きな突起の1ヶ所には2つの貫通穴が空けられ、沈線間にはベンガラが付着する。底部は無文である。土器627は中位から出土した台付鉢である。口唇の突起は4単位。口縁部には上から突起下と突起間に沈線を施された横幅1cm前後の貼瘤文8個が付され、貼瘤文間に短刻線、その下に4条の沈線、貼瘤文と短刻線、3条の沈線が施される。

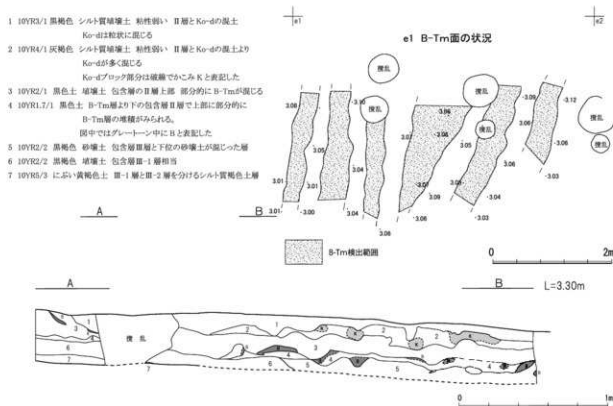
畝状遺構 (図Ⅲ-9・口絵3・図版4) 位置 e1区 規模 400×200cm 約8㎡

確認・調査: 調査範囲の拡張で低位段丘面の調査に入ると、海岸段丘裾に融雪期などに水が流れた跡と考えられる、黒色土層に褐色の層が挟まる低地性の土層の落ち込む堆積が見つかった。この低地上部のⅡ層中にはKo-d層(1640年降下)やB-Tm層(10世紀降下)の堆積がみられた。調査は縄文時代が主であったため、これらの火山灰層までは荒く掘り下げ、B-Tm層より下からは丁寧な掘削を行っていた。そのなか、e1地区掘削の際、検出したB-Tm層が規則的に途切れる状態が現れ、畑跡(畝状遺構)の存在に気付いた。それまでの掘削でもB-Tm層を見失うことたびたびあり、畝は西側にも広がっていた可能性はある。断面は、検出された畝では上部堆積が失われているため、隣接するe0区への掘削していない壁面で行った。

検出された畝状遺構は約0.7m間隔に並行した溝状の畝間が3本と、畝の方向が異なる約0.7m間隔に並行した溝状の畝間が2本の合計5本である。畝間の幅は24~30cm、B-Tmからの深さ2.5~4.8cm、確認された最長の畝間は、低地堆積と重なった範囲に限られるため、約2mであった。

畑跡は河川堆積物により栄養が良いのだが、海岸に近く、冬の時化などでは海水を含む風が崖に当たる所であることから、地味豊であるが、塩分も多い土地であることが想定される。

畑跡は畝間が約70cmで間隔は、森町の森川3・森川4・上台2遺跡などで検出された畑跡より狭く、規模も小さい。前記、調査の時、農業指導員であった方からお聞きした話で、松前町など海岸に近い畑では、通常より高さを盛り上げた高畝で畑が営まれているとのことである。この畑跡も高畝で作られた畑であった可能性があるが、この畑跡は、立地から狭い範囲に営まれた畑で、家庭菜園程度と推定される。また作物は、塩分に強いものが栽培されていたものではないだろうか。残された痕跡では、B-Tmの掘り込みは森町で検出された畑跡とさほど違いがないが、上部のKo-d層畝間と重なって乱れている様子もあり、10世紀以降の耕作である可能性も否めない。(谷島・土肥)



図Ⅲ-9 畝状遺構 平面図・断面図

IV 遺物

1 土器

土器は63,777点出土した。内訳は縄文時代前期の円筒下層式相当が44点、縄文時代後期前葉28点、後期後葉2,987点、晩期前葉14,371点、晩期後葉46,130点、統縄文時代72点、擦文文化期128点、陶磁器類17点である。包含層の調査は、大きい遺物や、まとまった破片については出土状況を記録し、番号を付して取り上げたが、細かい遺物などは、層ごとに日々取り上げる方針で進めた。

図Ⅳ-71には、遺構も含め、出土記録を残した遺物をまとめた。実際には記録を残した遺物の数倍が取り去られているわけだが、出土した遺物の多くが、低位の段丘面に集中している状況がみとれる。掲載土器の詳細については表Ⅳ-1にまとめた。

図Ⅳ-5-1～3は円筒下層式相当の破片である。小さな破片だが、調査区から出土した同時期の破片では大きいもので、他の多くの破片は2に近い円筒下層b式併行とみられる繊維を多く含んだ土器の細片で、おもに段丘上の包含層から出土した。

図Ⅳ-5-4～6は口縄文時代後期前葉の破片である。土器6は、斜面裾の流路跡から外れたd94区のⅢ層から出土している。土器4、5は斜面裾から縄文時代晩期の破片に混じて出土している。

図Ⅳ-5-7～図Ⅳ-7-59は、縄文時代後期後葉である。出土状況は、図Ⅳ-83～85に示した。全般に堂林式の新段階のもので、貼瘤文などが付される個体が混じる。掲載した後期後葉の土器はすべて低位の段丘や斜面から出土したものである。流路跡では、Ⅲ層が3層に分かれるが、後期後葉の破片はその最下層であるⅢ-3層から出土した。接合結果は必ずしもきれいに分かれなかったが、流路跡から出土した復元個体は、e0区から出土した、土器33・35・40・53で、それより西側では流路からの出土例はなかった。最も多く出土しているのは、斜面裾の堆積層で、図Ⅳ-84・85中のd区とe区の境付近から出土しているものが該当する。海岸段丘上ではb98区Ⅲ層から唯一まとまった鉢の破片が出土したが、脆弱な破片なため復元には至らなかった。出土量は後期後葉の1割に満たない。土器7は、遺物はほとんどないとみていたd93区のⅢ層から形を保った状態で出土した。頸部から上の破片は発見時の排土から回収し、同時に土器36の破片もみつかった。後期後葉の土器は、器壁が比較的厚く、胎土に町内で産する頁岩系の細礫が混じる傾向があった。

図Ⅳ-8-60～図Ⅳ-14-220は、縄文時代晩期前葉で上ノ国式併行の土器である。この時期の遺物は、段丘上から斜面裾まで広く出土した。流路跡では、3つに分かれるⅢ層の中間であるⅢ-2層から出土した。段丘上では、遺構から出土し復元された土器81、90、91、93、96、124、132のほか、ある程度の形状を保った状態で、土器75、76、112が出土した（図Ⅳ-72参照）。段丘上面の包含層から出土する土器は割れが細かく、接合作業で復元できた個体は前記以外に土器95だけである。

斜面裾からは、段丘上の2倍の土器片が出土した。出土状況図は図Ⅳ-80～82に示した。流路跡のⅢ-2層から出土した復元個体は、e97区出土の土器126、e99区出土の土器114、e0区出土の土器128である。土器60～74は大洞C式併行の搬入品で、出土状況は段丘上から斜面裾までとほかの晩期前葉の破片と違いはない。復元された鉢、土器60と壺2点、土器63・64は斜面裾から比較的まとまって出土した。d97区の斜面裾からは土器77・80・85の壺形土器がまとまって出土し、d0区の斜面裾からは、土器127・129の深鉢や、土器219・220の鉢類がまとまって出土した。219、220は晩期中葉の可能性があるかと考えたが、出土状況から晩期前葉とした。晩期前葉の土器では、斜面裾山寄りから出土する破片が復元される傾向にある。晩期前葉の破片も、胎土に町内で産する頁岩系の細礫が混じる

ものが多かった。

図Ⅳ-14~221~図Ⅳ-47~647は縄文時代晩期後葉の土器である。本調査では、この時期の遺物が最も多く、段丘上から斜面裾まで広く出土した。時期幅は狭く、大洞A式の範疇に収まるものとみられる。個々の掲載遺物の詳細については表Ⅳ-1に記載するが、この時期の土器の器形や施文が一定の規則に基づいており、同じ説明の繰り返しを避けるため、次のように記号化し、掲載土器一覧に記載した。

器種区分：器種の区分を図Ⅳ-1に示した。基本は壺形土器をⅠ類、深鉢形土器をⅡ類、鉢形土器をⅢ類、台付鉢をⅣ類としている。これらの分類をさらに次の観点から細分した。

壺形土器：搬入品とみられるものをⅠ-1類、在地の土器をⅠ-2類、在地の土器のうち口縁部に1対の貫通穴を空けるものをⅠ-3類とした。

深鉢形土器：口唇部に突起を有するものをⅡ-1類、突起のないものをⅡ-2類、突起の有無ではなく、底部が上げ底のものをⅡ-3類とした。

鉢形土器：(浅鉢も鉢形に含む)は、口縁部に6ヶ所の突起を有し、そのうちの一对が、高さのある最大の突起と次いで大きな突起になるものをⅢ-1類。口唇部に4単位(大小の突起8単位も含む)の突起を有し、そのうちの一つの口縁部に2つの穴が穿孔されるものをⅢ-2類、口唇部に突起を有するものをⅢ-3類、口唇に突起のないものをⅢ-4類とした。Ⅲ-1類では、時期差で突起が大型化する傾向があり、その古手に対しⅢ-1-1類、新手に対しⅢ-1-2類とし、Ⅲ-1類に付される6ヶ所の突起の各名称を土器の上面観から最大なものを前突起、その対になる突起を後突起、前後の突起の左右に位置する突起をそれぞれ、左前、右前、左後、右後とした。左右前後の突起は、一見同じ形状に見えても、前側を大きく作ったり、形状を変えるなど、作り分けをしている例がしばしばある。Ⅲ-2類では、4単位の突起のうち、口縁部に2ヶ所の穿孔が施される位置の突起が、ほかの3ヶ所の突起と異なった装飾有するものをⅢ-2-1類、口縁部に2ヶ所の穿孔が施される位置の突起が、3ヶ所の突起と同じつくりであるものをⅢ-2-2類とした。

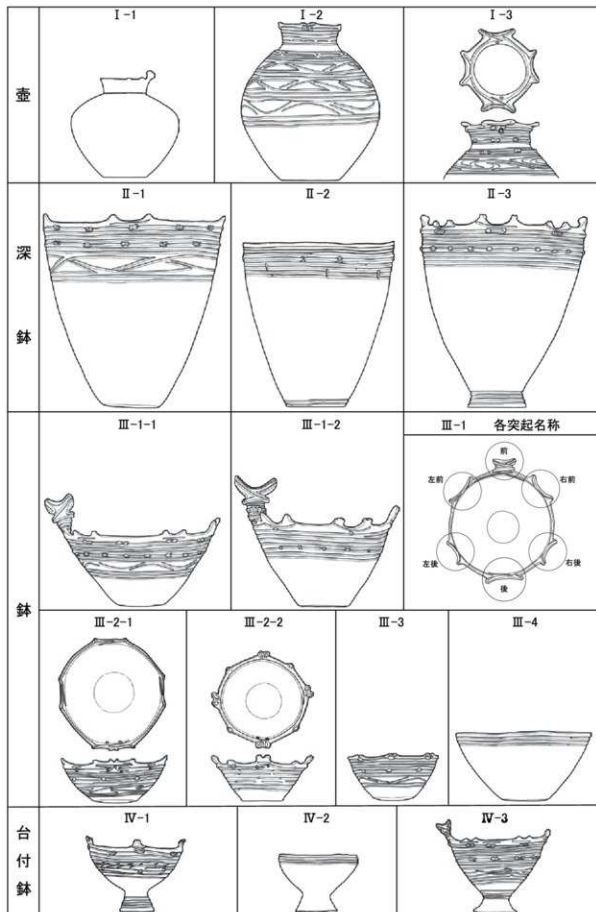
台付鉢：(台付浅鉢も含む)は口唇部に突起を有するものをⅣ-1類、突起のないものをⅣ-2類、口唇の突起の形態が鉢形土器のⅢ-1類と同じつくりになるものをⅣ-3類とした。

これらの分類は、掲載土器一覧の器種2の項目に記載し、晩期後葉以外の分類では-を記入した。器種分類は、口唇部や口縁部の形状を基準にしており、破片では判断できない場合があり、その場合は判るところまでを記号化した。また、壺以外の器種の搬入品の場合は当てはまらない。

突起の形：状図Ⅳ-2には、突起の形状分類を示した。a~d形は、Ⅲ-1類の前突起にみられる形状の分類で、e~mにはその他、深鉢や後突起、左右の突起などにみられる主な形状を示した。

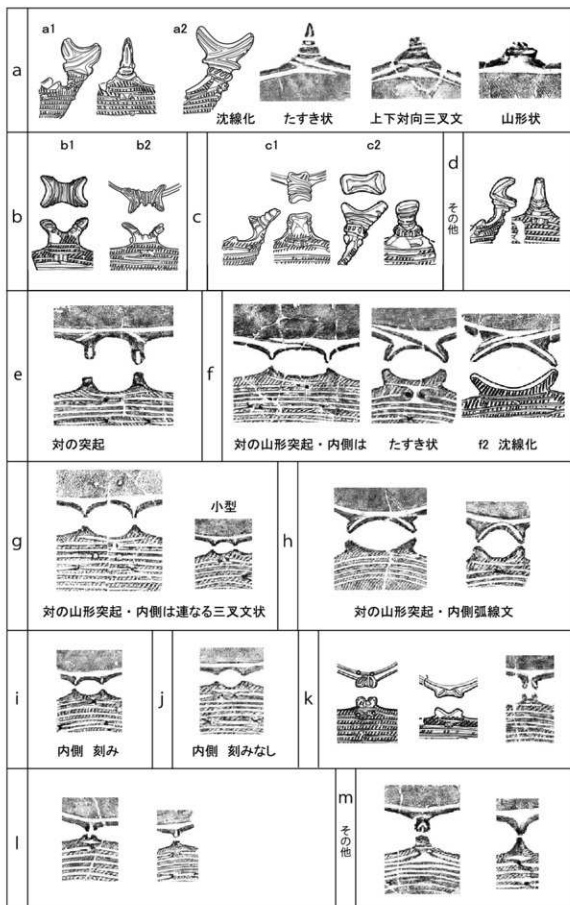
a形：突起端部に三日月形の装飾が器の前後の方向に付くもの。装飾の左右には三叉文が点対象の位置関係で配置された文様が付される。この文様は、入組文様の副要素から変化したものと考えられるが、ここでは「たすき状文」あるいは「たすき状」と称することとする。a形の突起は最も多く出土した形状で、時期が下るにつれ突起頂部が前後に拡がり、たすき状文の沈線化も進む。また、突起の軸部に刻みが施された粘土紐が付される傾向が生じる。この形状の変化からa形の突起古手をa1形、新手をa2形する。前突起は、他の突起より飛びぬけて大きいものを付けるため、それだけが破損して破片がない個体や、補修孔が空けられている例が多い。前突起のない個体の実測図では、突起位置を示すのに最も多いa形の輪郭を用いている。前突起下の口縁部内側の沈線文様には、たすき状、上下対向三叉文、山形状などの文様が付される。

b形：鉢形土器Ⅲ-1類の前突起に比較的多くみられる形状である。a形の突起を中央切り左右に拡



図IV-1 晩期後葉の器形区分

- げた形状で、突起の軸は横幅のあるものになる。上面の左右端部にたすき状文が施される。中心部に沈線が付され、粘土を外側に張り出させるものをb2形に、ないものをb1形にしたが、これは時間的な変化ではないとみられる。下面には施文はなく左右からみると無文である。
- c形：側面が逆へ字で、外側に大きく内側は比較的小さく張り出す突起で、文様は上面から側面にかけて付される。c1形の施文は、外側にたすき状文、内側にはハの字の刻みなどが付される。表示例(土器396)では、内側にもたすき状文が付されるが、このような例は本調査唯一である。c2形は、突起のc1を簡略化したような形状で、上面に沈線、側面に沈線を施すなどしたもの。
- d形：その他の形状のもの。表示例は側面観がC字形のもの(土器465)で、このほかには幅広の突起を貼り合せ、それぞれの上面にたすき状文を施したもの(土器507)や、顔を模したような装飾が付されるもの(土器566)、などがある。突起の形状が異なっても、時期が新しい突起の軸部に、刻みが施された粘土紐が付されるのは変わらない。
- e形：対の突起で、突起頂部を平らに調整し刻みを施すもので、土器302、303、510、577にみられる。全般に少数例である。土器510は鉢形土器のⅢ-1類で、左右後突起に頂部に3ヵ所の刻みが施されたものが付される。
- f形：対の山形突起で、内側にたすき状文が施されたもの。壺～鉢までのすべての器種に見られる突起の形状である。時期が新しく、文様の沈線化が進んだものをf2形とした。壺形土器292や土器486の突起頂部には刻みが施されている。
- g形：対の山形突起で、内側に連なる三叉文状の文様が施されたもの。壺～鉢までのすべての器種に見られる突起の形状である。壺や深鉢では、この形状の突起が4単位付されているものが多く、起鉢形土器Ⅲ-1類では、左右前後の突起にしばしば付される。
- h形：対の山形突起で、内側に弧線文が施されたもの。壺～鉢までのすべての器種に見られる突起の形状で、g形の沈線化が進んだ状態のものである。時期が下るにつれg形からh形に変化すると考えられるが、中間的なものも多く、g形とh形の区分は曖昧である。壺形土器286の突起頂部には刻みが施される。
- i形：対の山形突起で、口縁内側の沈線とは別にそれぞれの突起に刻みを付すもの。対の突起の幅が狭いものがある。土器443、449、499にみられる。
- j形：対の山形突起で、口縁内側は沈線のみで、突起には文様を付さないもの。土器307、313にみられるが、全般には少数例である。
- k形：単体の突起で、突起中央に刻みや凹帯で頂部を分け、それぞれに刻みを加えたもの。表示例中央には、やや幅のある凹帯で頂部を分ける例を示したが、i形の形状の境が曖昧である。土器494、573にみられる。
- l形：単体の突起で、突起中央に刻みや凹帯で頂部を分たもの。大小の突起が8単位付されるもの、小さな突起や小型の鉢にしばしばみられる。
- m形：その他の形状である。単体の突起では、複数の刻みが施されるもの、口縁部と並行に刻むもの、山形突起で内側に三叉文の文様が施されたもの、四角い突起(土器589)などがあり、対の突起では、幅のある四角い突起が並ぶもの(土器578、579)や、Ⅲ-2類ではf形の突起中央にl形の突起を加えたもの(土器571)やf形の突起のそれぞれの端部にk形の突起が付くもの(土器570)、などがある。
- これらの分類は一覧表の「前突起」、「突起」の項目にアルファベットの記号で記入した。前突起の項目には、鉢形土器Ⅲ-1類の突起が残る土器にのみ記号を記入している。1個体に複数の形状の突起がある場合は、該当する形状のすべての記号を記入している。



図IV-2 突起の形状分類

文様帯の区分

図Ⅳ-3の上半には文様帯区分模式図を示した。文様の区分の目安として、器面に付される貼瘤文をや文様の区切りに付される沈線を用いている。aとしているのは口縁部直下（突起がない場合）あるいは突起下に付される貼瘤文の位置で、突起のない鉢ではしばしば貼瘤文が省略されるが、その場合は一番上位の沈線文の位置をaとした。bは頸部の屈曲点にあたる位置に付される貼瘤文である。

晩期後葉の在地の土器には頸部の屈曲がほとんどなくなるが、貼瘤文bは伝統的に残り文様帯の区画位置にしている。貼瘤bが省略されている例もしばしばみられるが、その場合で、下部に異なる文様が付される場合はその直上の沈線をbの位置とし、横走沈線のみで施文が終わる場合は最下部の沈線をbの位置とする。貼瘤だけが省略され、短刻線を巡らすものは、その位置をbとする。cは壺形土器にのみ使用した。壺形土器には頸部に無文帯が付されるため、頸部と胴上部との境に貼瘤文や工字文が施文される。その位置をcとし、他の器形では用いなかった。壺形土器にも貼瘤文が省略することもあるのだが、その場合は無文や胴部に地文のみが施される壺にかぎられた。dは文様帯の終点である。ほとんどの土器が文様帯の上下に沈線を施すため、dは口縁部最下部の沈線文になる。eは底部をさし、fは台付鉢の台端部をさす。文様帯の区分としては、a~bを口縁部、b~cを頸部、b~dを鉢、深鉢形土器の口縁下部、c~dを壺形土器の体部、eを底部、e~fを台付鉢の台部とした。掲載土器一覧では、文様の出現頻度の高い、a~b間の口縁部とb~d間の口縁下部、c~d間の壺形土器の体部にしほり、文様a-bの項目に横走沈線の数を数字で記入した。文様b-d（壺c-d）には図Ⅳ-4に示した文様の分類で記号化した文様番号を記入した。壺形土器の文様帯は多段になるが、その場合上位から順に記し、同じ文様帯の場合はあえて重複した記入はしていない。

貼瘤文の分類

図Ⅳ-3の下半には貼瘤文の模式図を示した。貼瘤文aは、突起が4や8単位のものでは突起下のほか突起間に規則的に付される。鉢形土器のⅢ-1類の突起間では、左右前後の突起間にもっとも付される例が多く、前突起とその左右の突起間に貼瘤文が付されるのは土器396、442の2例、後突起とその左右の突起間に貼瘤文が付されるのは土器409、411、437、485の4例がある。突起のない鉢などでは等間隔で付していると思われる。貼瘤文bは、口縁部の貼瘤文の位置や突起の位置に関係なく、等間隔で付している。模式図では、1~9形までを貼瘤文a、10~12形を貼瘤文bの類型に当てた。

1形：対の貼瘤文間を丁寧に調整し、突起前面に付される沈線と口縁部の横走沈線の上位に短沈線を繋ぎ工字文とするもので、大きな突起であるⅢ-1類の前後の突起下などに施される。事例には土器402後突起、420後突起、436前突起、571、581などがある。模式図では上下対向する三叉文状の沈線で調整している表現だが、ここまで丁寧な調整のものはほとんどない。

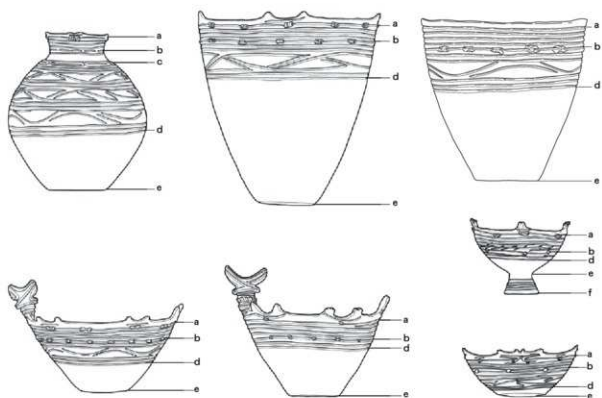
2形：1形を簡略化したものと考えられる。貼瘤文は単体の貼り付けで、その中央を刻むか凹せるかして、突起前部の沈線と口縁部の横走沈線の上位に短沈線間に縦方向の要素を加え工字文状としているもの。事例には土器395前突起、399前突起、429前突起、432前突起、438後突起などがある。

1形、2形のような口縁部の貼瘤文に工字状の文様を施すことができるのは、鉢形土器Ⅲ-1類のような大型突起が付されるものに多くみられる。

3形：対の貼瘤文間に横方向の沈線を付すもの。または、単体の貼瘤文に横方向の沈線を加え、対の貼瘤文状としているもの。事例には土器303、347、362、380後突起などがあるが、類例は少ない。

4形：対の貼瘤文間を丁寧に調整し、突起前面に付されると口縁に付される横走沈線を繋ぎ、工字状とするもの。事例には土器377、387後突起、392、397、406後突起、570などがある。

5形：貼瘤文の中央に刻みや凹みを加えたもの。多くの土器にみられる。



a 突起下・突起間や口唇直下の貼瘤文

b 文様帯中の貼瘤文

c 壺形土器頸部下の貼瘤文

d 文様帯の終点

a~b 口縁部

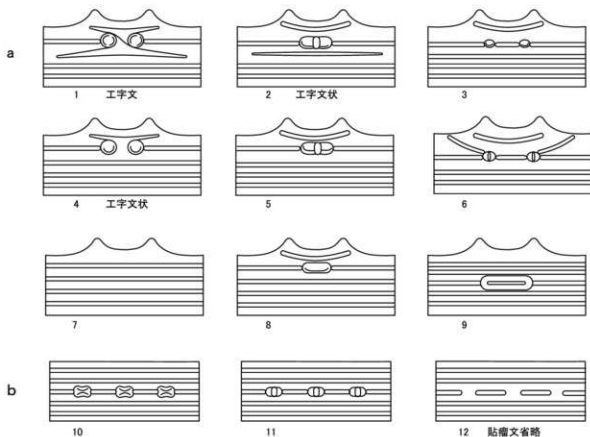
b~c 頸部

b~d 口縁下部

c~d 体部

e 底部

e~f 台部



図IV-3 文様帯の区分と貼瘤文の分類

- 6形：対の貼瘤文に刻みを加え、貼瘤間に横方向の沈線を加えたもの。土器428にみられる。
 7形：貼瘤文を省略したもの。实例には土器318、331、349、392、404、471、504などがある。
 8形：貼瘤を付すもの。瘤の形状には、尖ったものや丸いものがあるが、ここでは区別しない。
 9形：横長に粘土を貼り付け、横の沈線を加えたもの。土器302、505、514の新しい時期にある。
 10形：貼瘤を等間隔に付したもの。瘤の形状は、区別しない。
 11形：貼瘤に刻みを加え、等間隔に付したもの。
 12形：貼瘤は省略するが、短刻線が施されるもの。

以上に示した貼瘤文の分類を数値化し、表Ⅳ-1の貼瘤a、貼瘤bの項目に記載した。鉢形土器Ⅲ-1類では、貼瘤aに複数の類形が施されることがたびたびあり、その場合は、該当する数字すべてを記入している。土器287、458では、貼瘤aに短刻線のみを付し、瘤を省略している。この2例については貼瘤bに相当する12番を当てた。貼瘤bで貼瘤文が省略されるものには「省」の字を記入した。突起の裝飾：前突起の付け根には、突起下の貼瘤文とは違う、突起自体の裝飾が、時期を下るにつれ口縁部に下がってくる傾向がある。ある段階では、丸く大きめの対の貼瘤文となり、区別がつきにくい。しかし、突起の裝飾には、口縁部の内外面に付される特徴があり、正面観だと突起下の貼瘤文に見えるが、断面や側面観の図でみると、内外面に付されているので判断しやすい。土器457、479、512、522、528、530、537、539、540、541、565にそのような例がみられ、475では前突起下の貼瘤文と併用し、530では突起の裝飾下に、別に貼瘤文を付している。

文様の分類

晩期後葉の在地の土器の、壺形土器の体部(c-d間)や、深鉢・鉢形土器の口縁下部(b-d間)には、先の文様変遷の流れを汲みながらも、簡略化・沈線化の進んだ文様が施されていた。

これらの文様は、上下を横走沈線に挟まれた一定の幅に収まる文様帯となっており、横位に連続する文様が施される。一つの文様帯を1段と数えると、壺形土器の体部では1~3段、鉢・深鉢形土器の口縁下部には1段の文様帯が施される。文様の施文方法は、文様割付をしている様子ではなく、端から順に施文しているようで、しばしば施文にミスがみられ、つじつま合わせが行われている。破片資料で、このような部分にあたると、文様そのものに誤解が生ずる可能性がある。また、壺形土器では明らかではないが、鉢形土器では、時期が下るにつれ口縁下部の文様帯はなくなり、数条の沈線になっていく傾向がある。

i形：鉤状の沈線を上下対向で交互に施文し、三角形が交互に連なるような文様を施文したもので、鉤状沈線の交互文とした。聖山式にみられる、上下から交互にCあるいはV字状の凸部が同一方向を向いて並列する文様から変化したものと考えられる。この文様は入組文の変遷から生じたという考え方や、横位連続工字文の変形という考えがあるが、結論はさておき、本遺跡出土の土器群よりやや古手とみられる、函館市日ノ浜遺跡出土の壺形土器や七飯町武佐川遺跡出土の鉢に、i形の原形がある。i形文様には、施文の始点が異なるi-1形、出現頻度の高いi-2形、鉤状沈線が下側のが施されるi-3形がみられた。i-1形は、土器610、611だけにみられる小数例で、この文様の祖形に近いとみられる。いずれもc94区から出土した。i-2形は壺形、深鉢形、鉢形のすべての器種にみられる。壺形土器では土器247・252の下段、土器276の上中段、土器277の上下段にみられ、深鉢では、突起のある個体で2例(土器309、314)、突起のない個体で5例(土器344~348)がみられる。復元に至ったものはすべてc94・95区からの出土である。鉢形土器では多くの個体にみられる。i-3形は土器308のみでみられる。幅10cm前後の深鉢口縁部片のため、施文ミスの部分であった可能性はある。壺形土器276の二段目右側に、施文のつじつま合わせで、似た処理を行っている箇所を観察できる。

i 鉤状沈線の交互文

上下交互のC字状凸部の並列文様
から発生したとみられる鉤状沈線の交互文



日の浜遺跡出土遺物の文様

ii 弧線文

iii 入組文

iv 矢羽状沈線文

v 斜行沈線文

vi 工字文系文①

vii 工字文系文②

i-1

i-2

i-3

ii-1

ii-2

ii-3

ii-4

ii-5

iii-1

iii-2

iii-3

iv-1

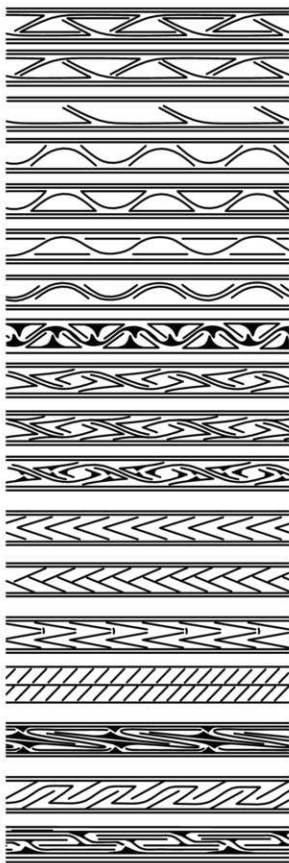
iv-2

iv-3

v

vi

vii



図IV-4 縄文時代晩期後葉に見られる文様の分類

ii形：弧線を上下交互に施文し、波状の文様としたもので、交互弧線文とした。この文様はi形の簡略化から生じたものと考えているが、i・ii形の文様を有する土器が数多く見つかったc94・95区では、出土状況に時間差なく、同時に存在している。施文の誤りは土器276下段、424、439、583の4例と少なく、i形に比べれば簡単な文様である。ii形の文様を細かく観察すると次のような細分が出来る。

ii-1形は弧線を上下交互に施文した、ii形の基本形ともいえる文様で、出現頻度が最も多く、すべての器種で施文される。ii-2形は、弧線の裾を閉じ、弓形文様が交互に施文されるもので、土器428、447のみに見られる少数例である。ii-3形は文様帯中央に緩やかな波状沈線を1条施し、上下の波頂部間に沈線を付したもので、弧線の裾を閉じるii-2形に近い文様にみえる。土器275だけに見られる少数例である。ii-4形は文様帯中央に緩やかな波状沈線を1条施し、各波頂部に並行に弧線を施したもので、土器421だけにみられる少数例である。ii-5形はii-3形に工字文様の加飾をしたもので、波状沈線の波頂部と裾に位置する沈線間に工字文様の調整を加え、沈線両端から波線に並行する線を追加したもので、土器588のみにみられる少数例である。

iii形：入組文で壺形土器にのみみられた。S字文を入組ませながら横位に連続施文し、入組部の左右に文様を充填したものである。iii-1形は、入組部の左右にV字の沈線を充填したもので、土器249、250、252、254などにみられる。iii-2形は、iii-1形の施文が乱れたものとみられ、入組部の左右のV字の一部がS字文や上下の文様帯区画の沈線と結合したり、沈線を追加するなどの施文があるもの。土器251、258にみられる。iii-3形は、iii-1・2形の入組部の左右のV字の充填文に、上下対向する三叉文を追加するもの。土器255、256、264、265にみられる。入組文にはC字文を主要素とした系統もあるが、本調査区では確認できていない。

iv形：矢羽状沈線文である。壺、深鉢、鉢形にみられるが、個体数の多いiii-1形に施文例はなく、全般に少数例といえる。矢羽状沈線文は、連続して施文されるV字の尖頭が丁寧調整されるiv-1形、V字の尖頭が乱れるiv-2形、V字を越えてZ字あるいは多段に施文されるものをiv-3形とした。iv-1形は壺形土器268のほか、深鉢・鉢では、土器313、361、362、577にみられ、iv-2形は土器360に、iv-3形は土器312、592にみられる。文様の半分が失われているが、台付鉢の629も、矢羽状沈線が施されている可能性がある。

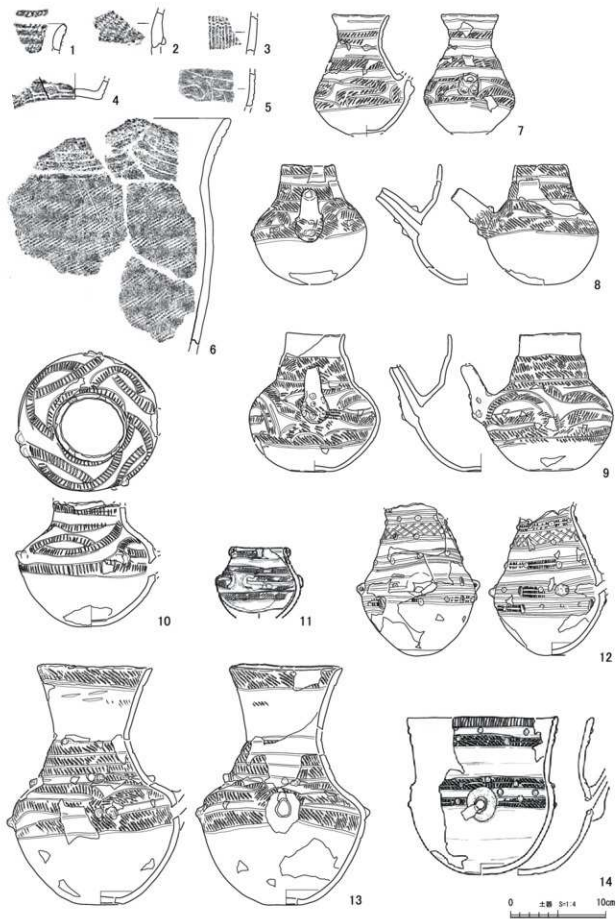
v形：斜行沈線文である。横走沈線の下地に施された例が土器362と台付鉢627にみられるが、後者は実測図では解りにくい一度消しかけた下の文様が残ったものとみられる。

vi形：入組文系文様としたもので、横位の入組み型の変形したものと考えた文様である。残りの良い個体を観察すると、それぞれ施文が異なっており、入組文系の文様か工字文系の文様かは不明である。模式図は土器376の文様を使用した。土器377、379、381、570などに類例がある。

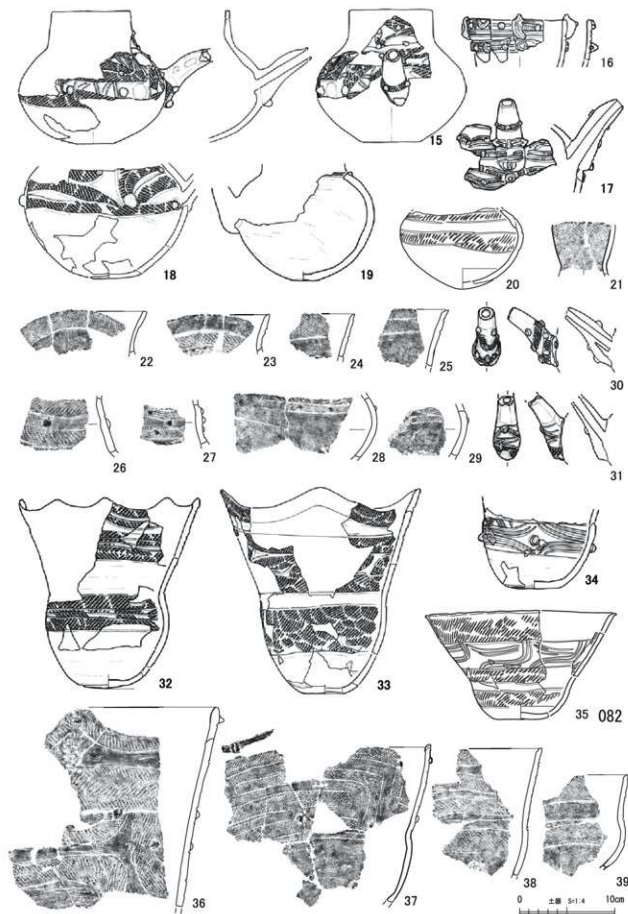
vii形：工字文系文様としたもので、横位連続工字文の変形したものと考えた文様である。壺形土器の頸部と体部境の施文が多段になるものも工字文系とした。土器246、253、264、321、374、378、387、393、630、633などにみられる。

i～viiに示した文様の分類は、掲載土器一覧の文様b-d(壺c-d)の項目に記した。壺形土器など文様が複数段施文されるものについては、該当する文様すべてを記載した。ただし、同じ文様が繰り返し施文される場合は、番号は1つだけ記載した。

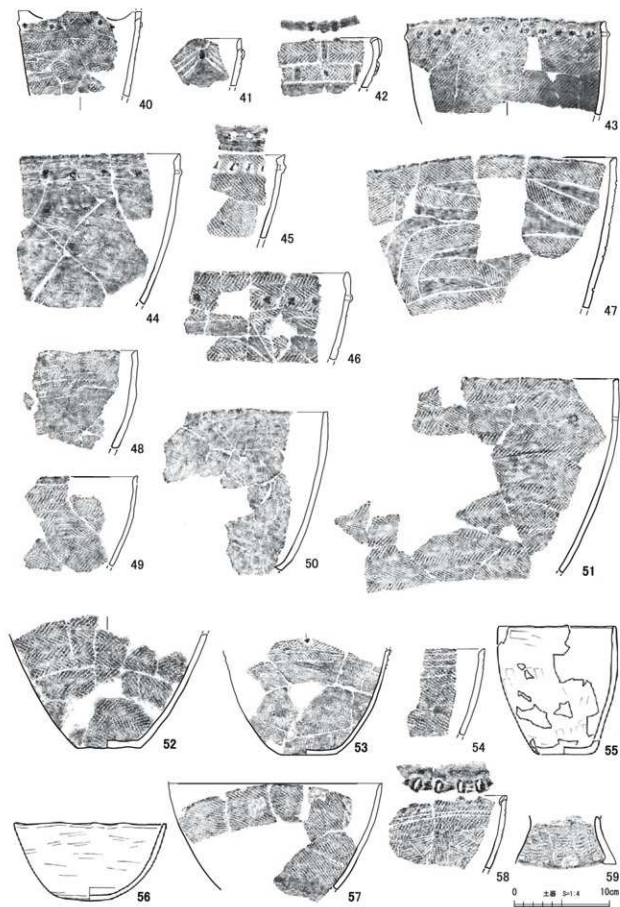
図IV-48には統縄文時代、擦文文化期、近現代の遺物を掲載した。土器648～654は恵山式土器土器である。復元された土器648、649は低位の段丘の標高290cm前後で2個体が近い位置で一括出土したものの。655～658は擦文文化期の遺物である。土器655は台地上からC94区までの破片が接合したものの。658は北大式とみられる。土器659、660は陶製の鉢形の焔炉の破片である。



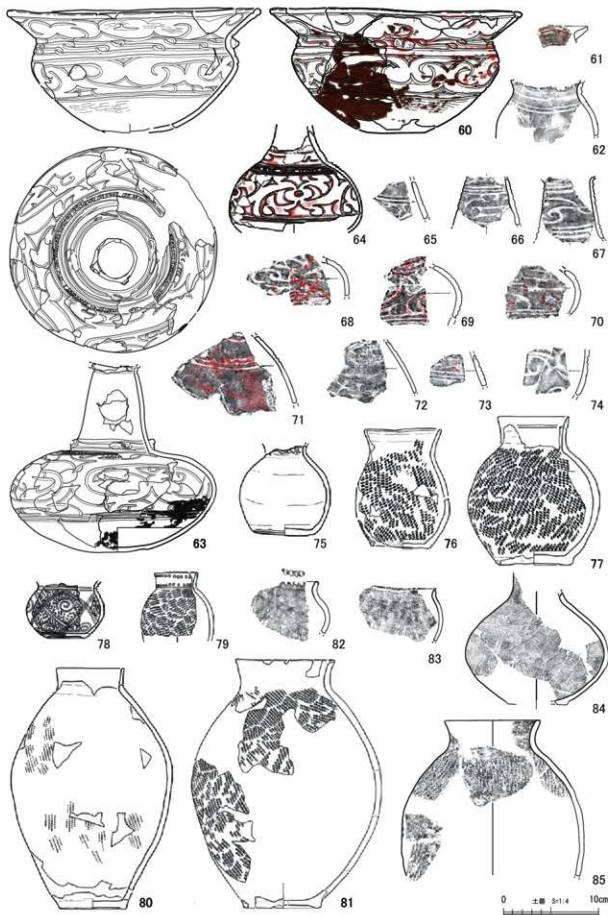
図IV-5 土器実測図 1



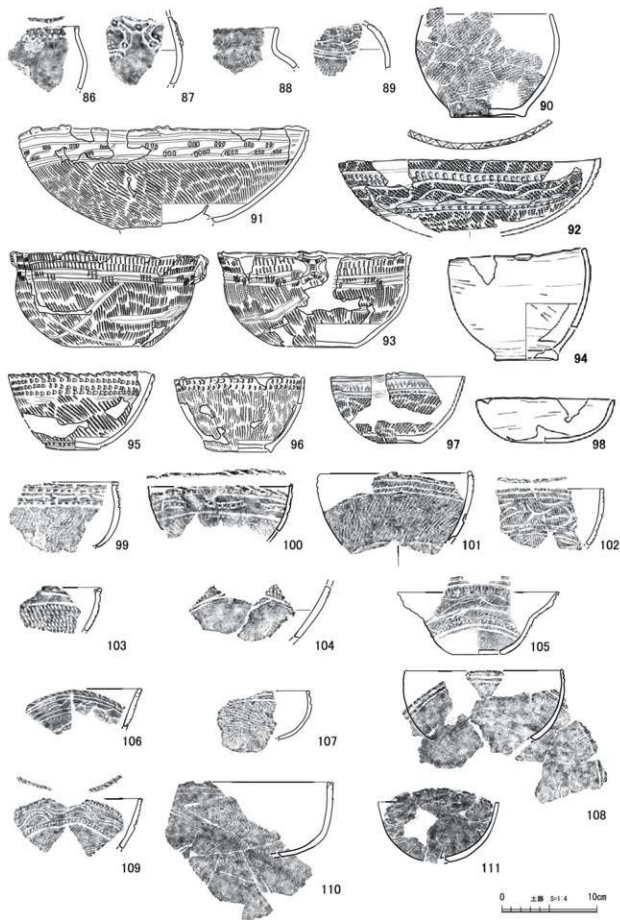
図IV-6 土器実測図 2



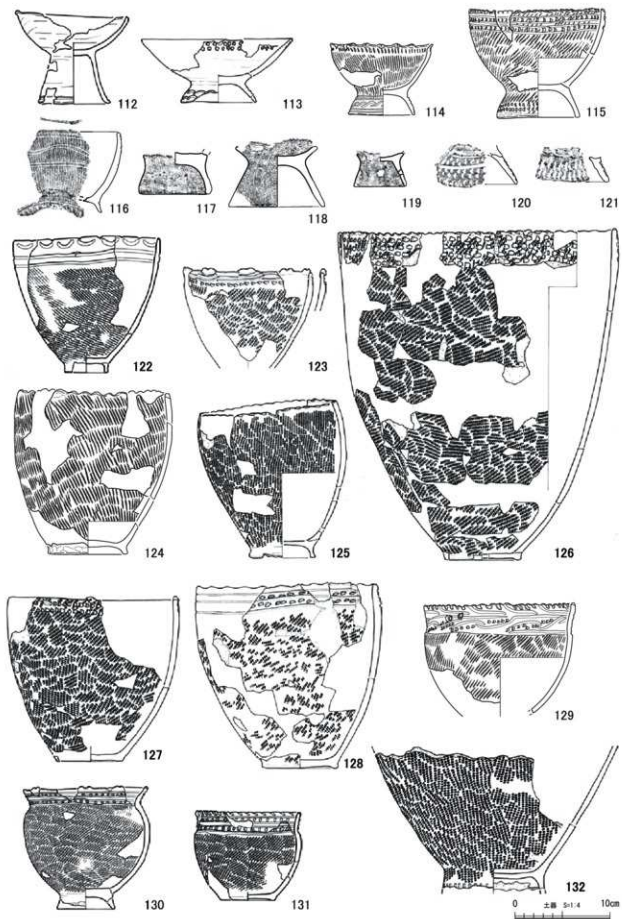
图IV-7 土器实测图3



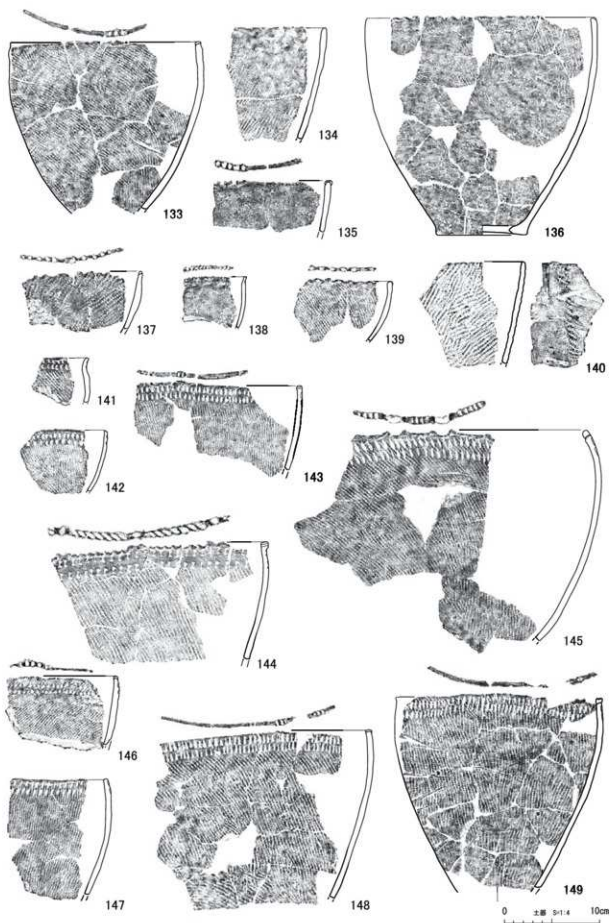
図IV-8 土器実測図4



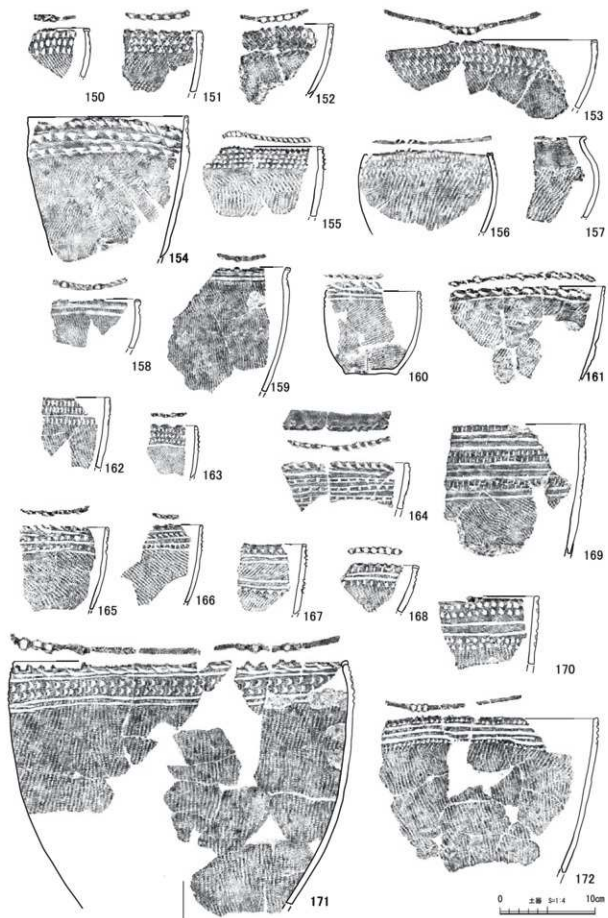
图IV-9 土器実測图5



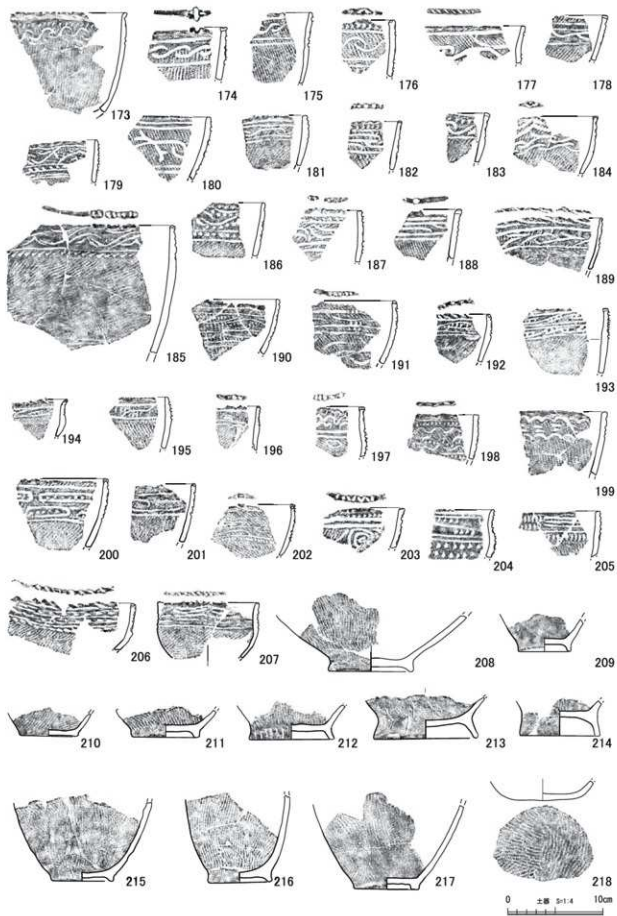
図IV-10 土器実測図6



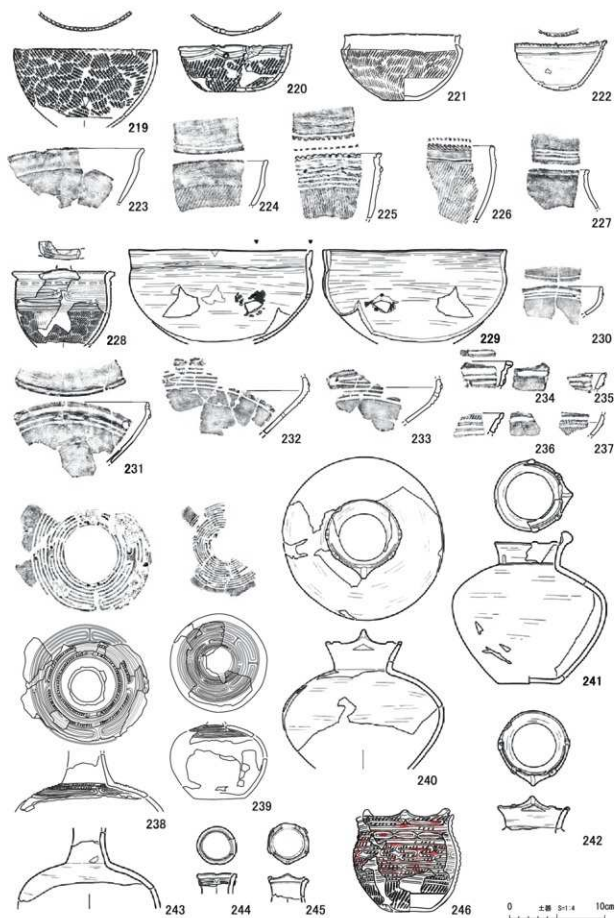
图IV-11 土器实测图7



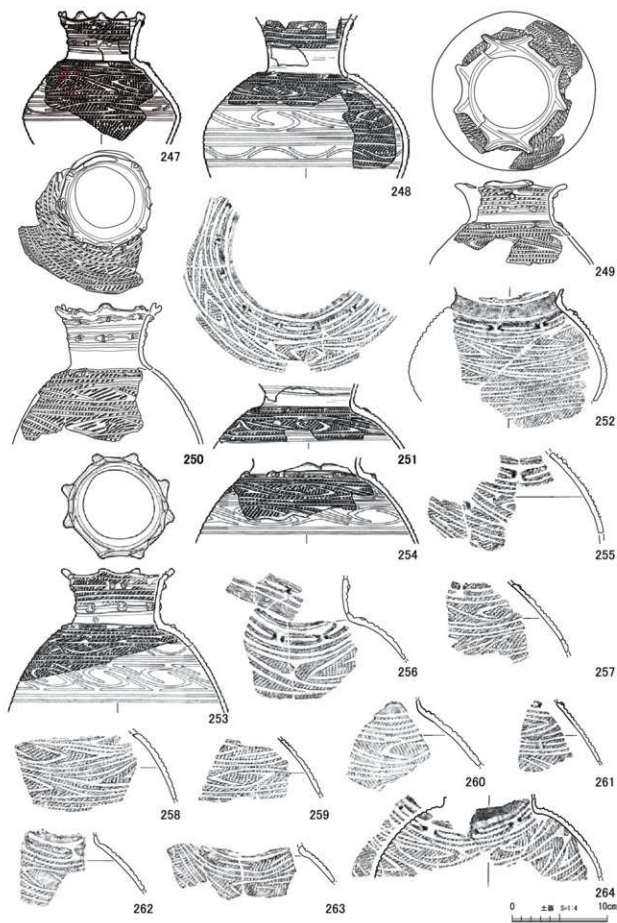
図IV-12 土器実測図8



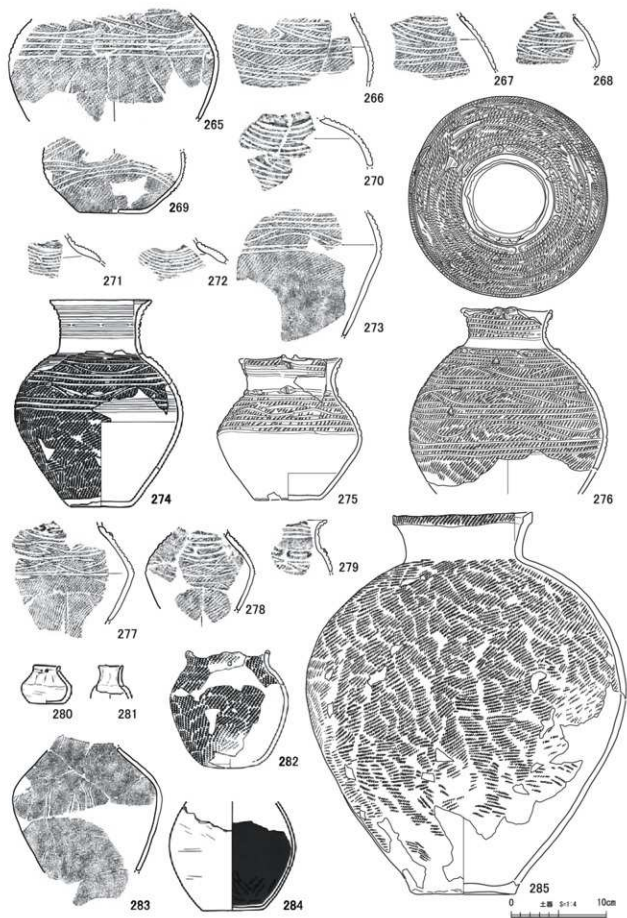
图IV-13 土器实测图9



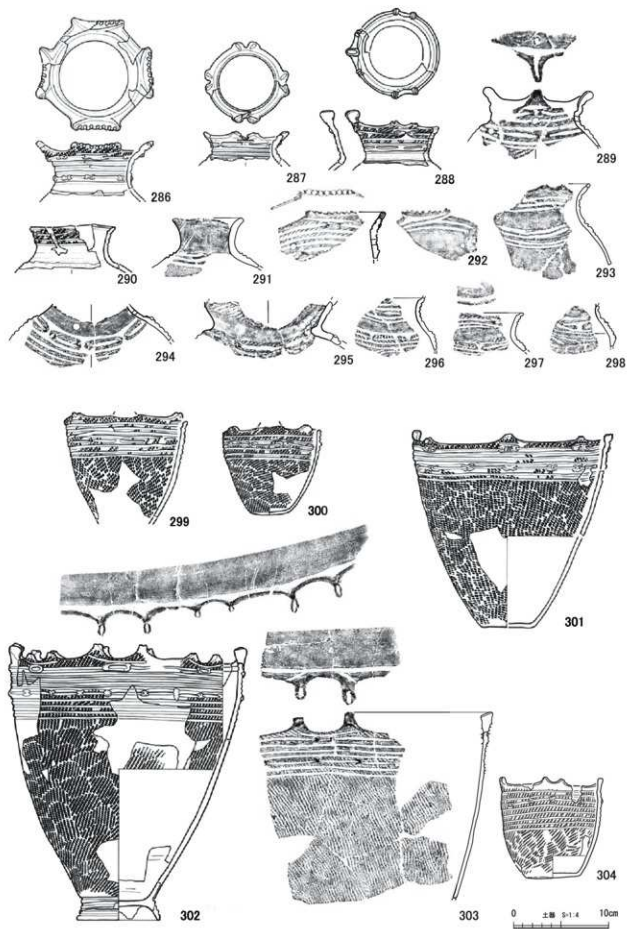
図IV-14 土器実測図 10



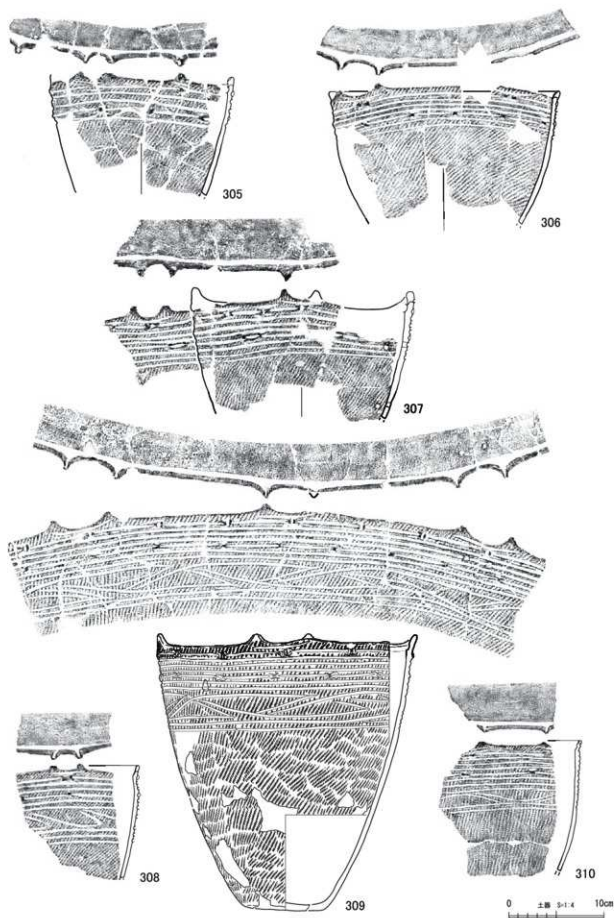
圖IV-15 土器実測圖 11



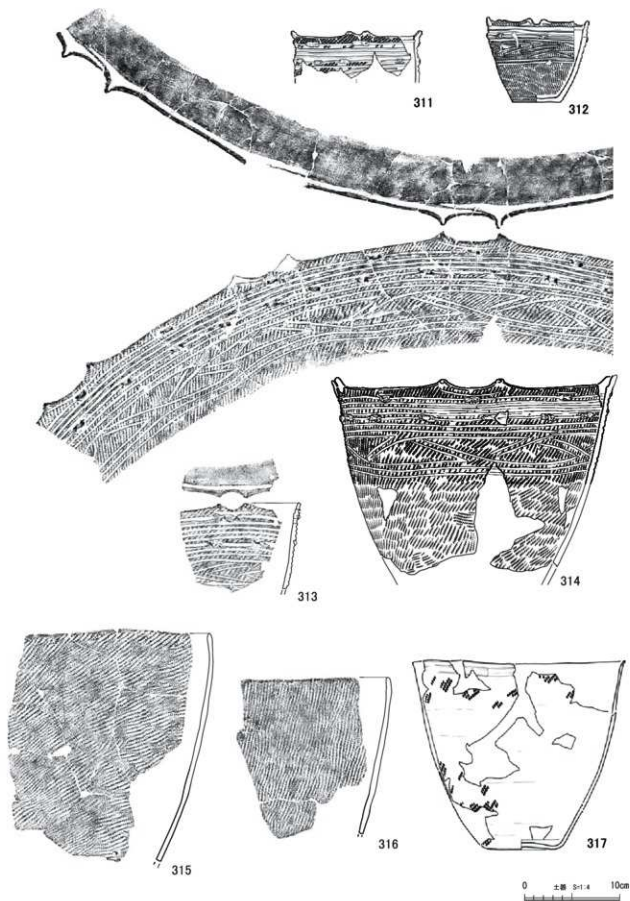
圖IV-16 土器実測圖 12



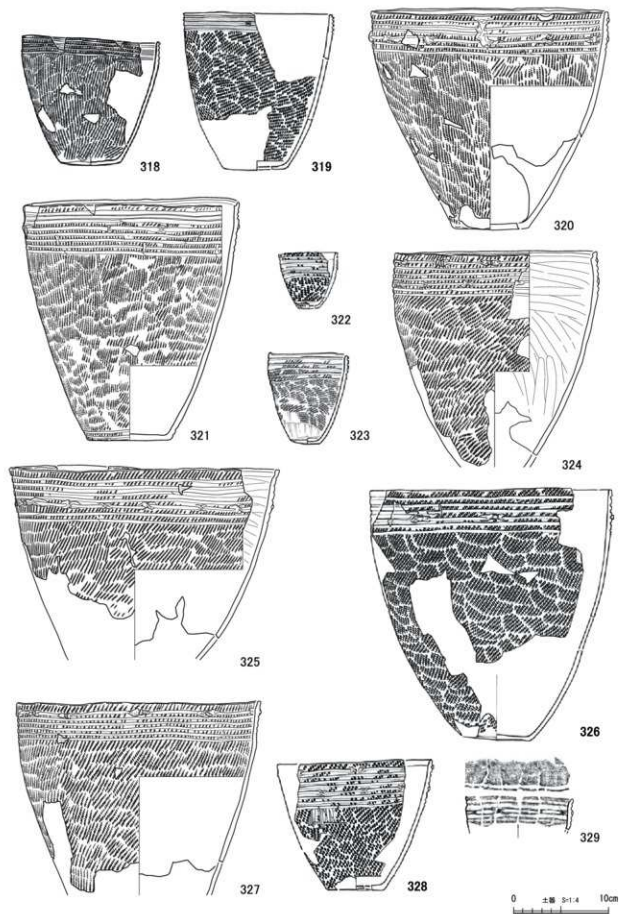
圖IV-17 土器実測圖 13



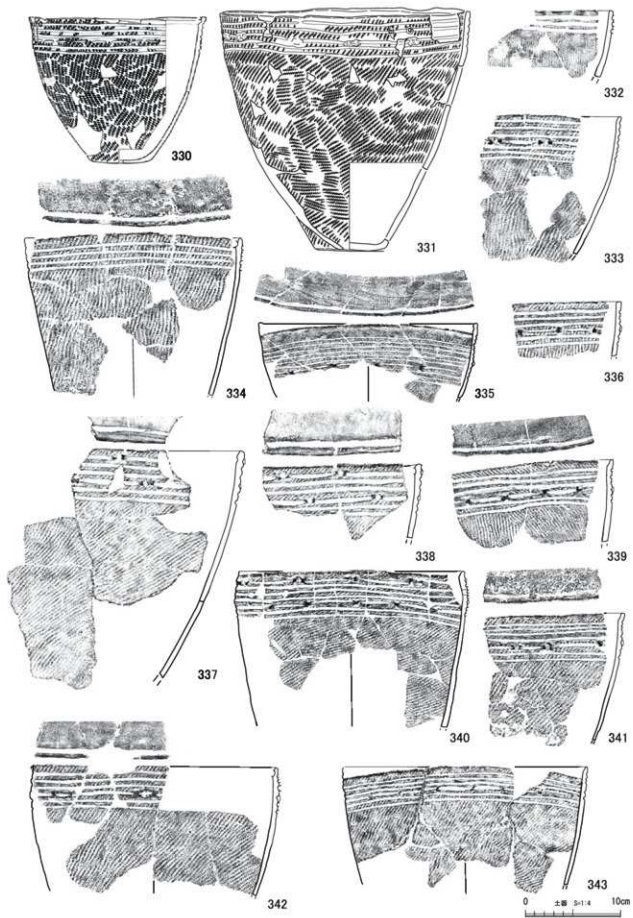
図IV-18 土器実測図 14



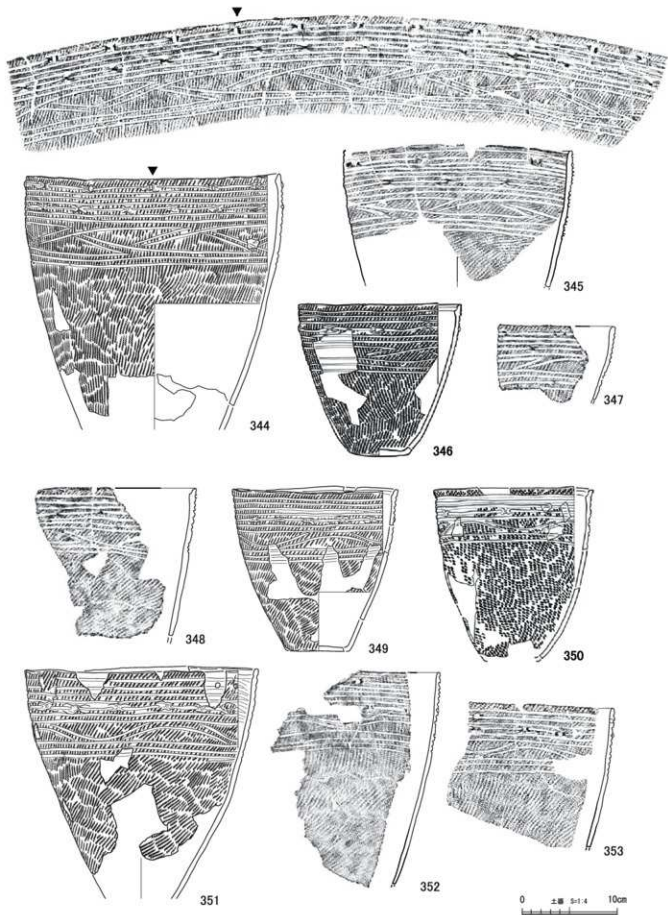
圖IV-19 土器実測圖 15



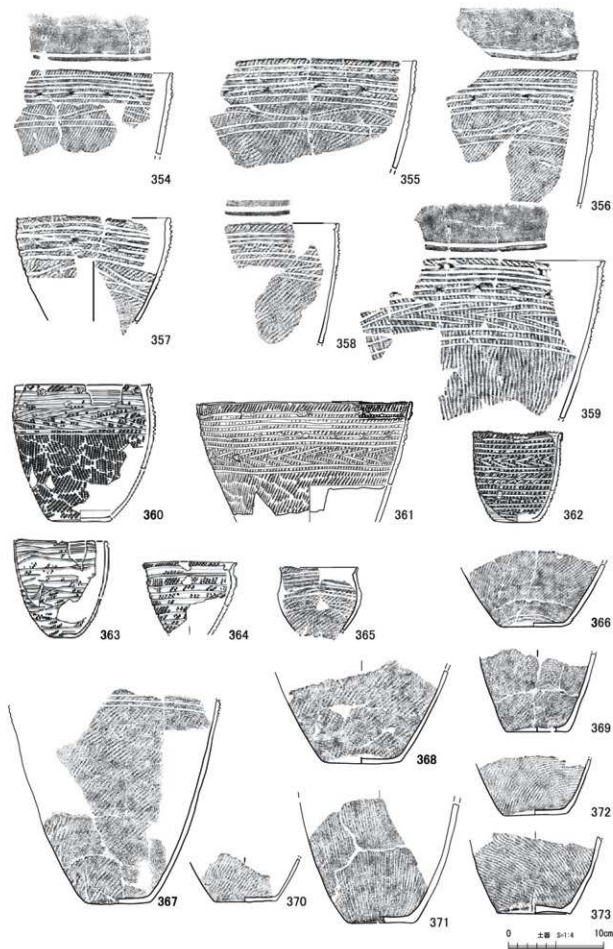
図IV-20 土器実測図 16



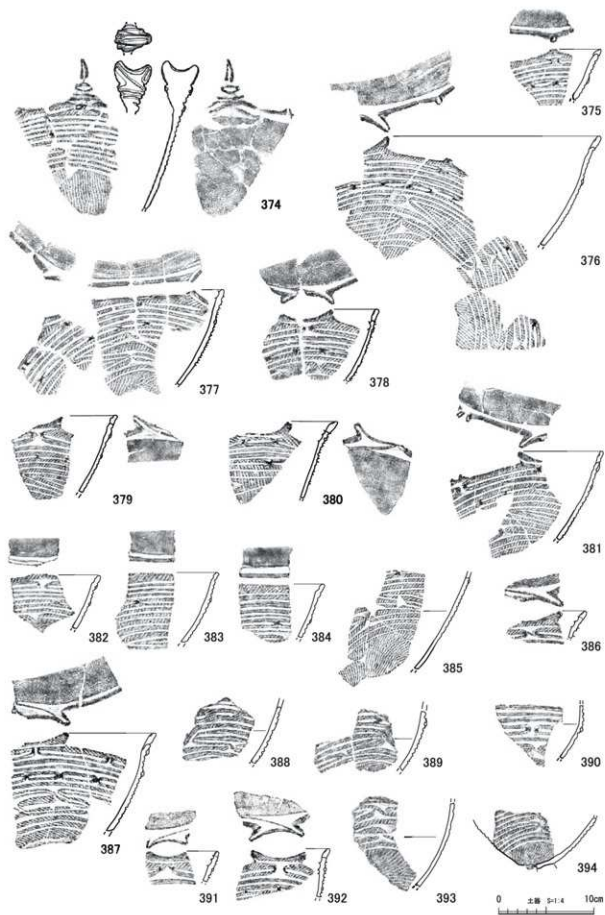
图IV-21 土器実測图 17



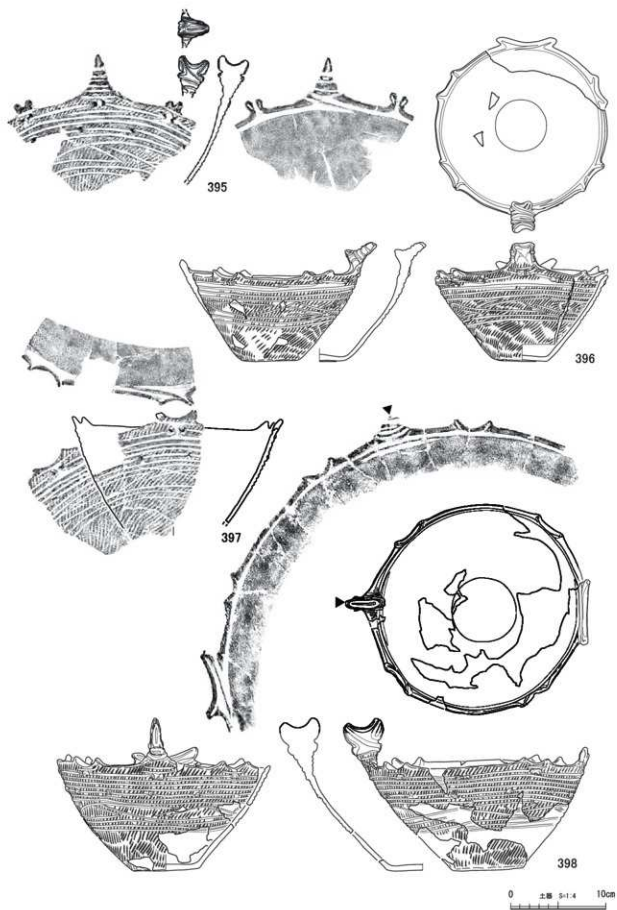
図IV-22 土器実測図 18



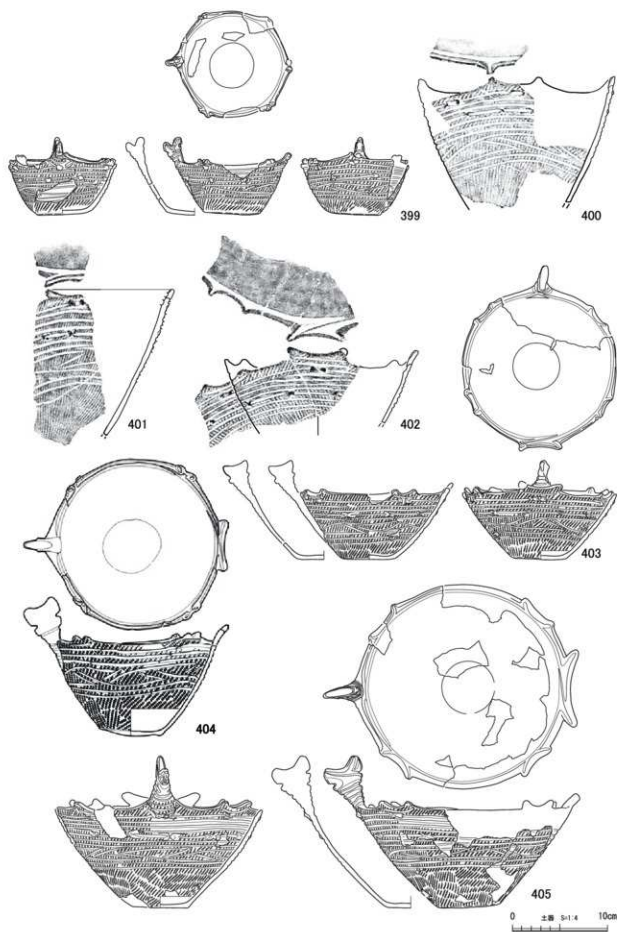
圖IV-23 土器実測圖 19



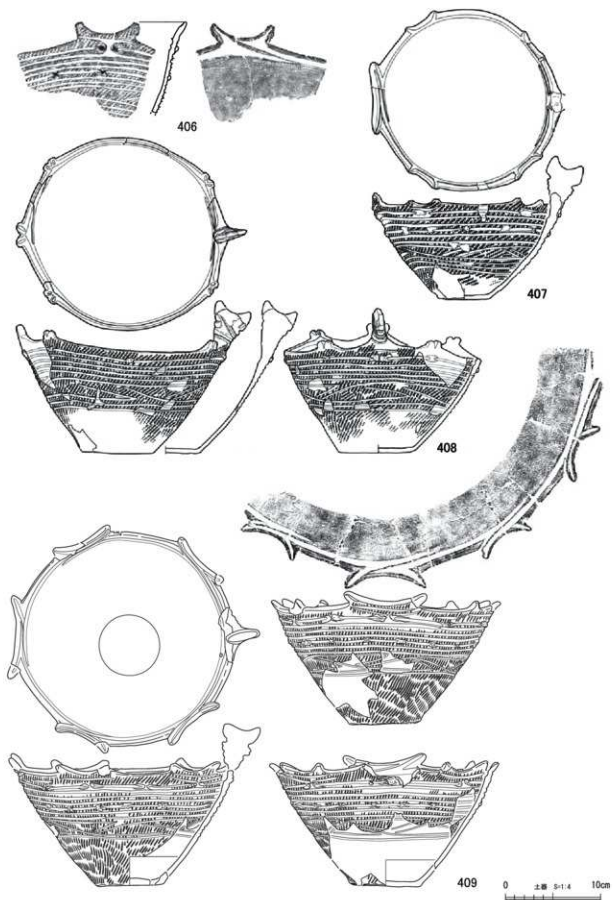
図IV-24 土器実測図 20



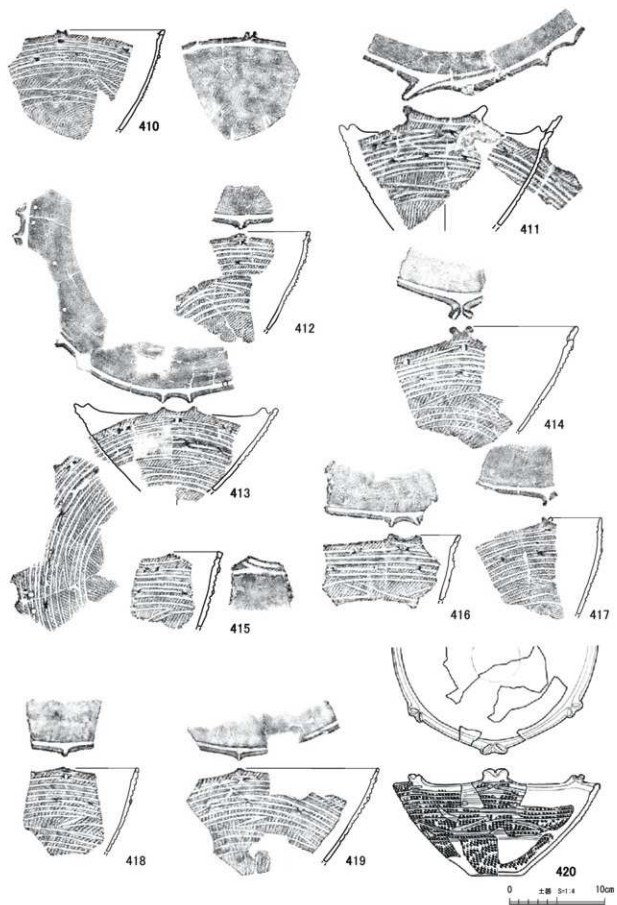
图IV-25 土器実測图 21



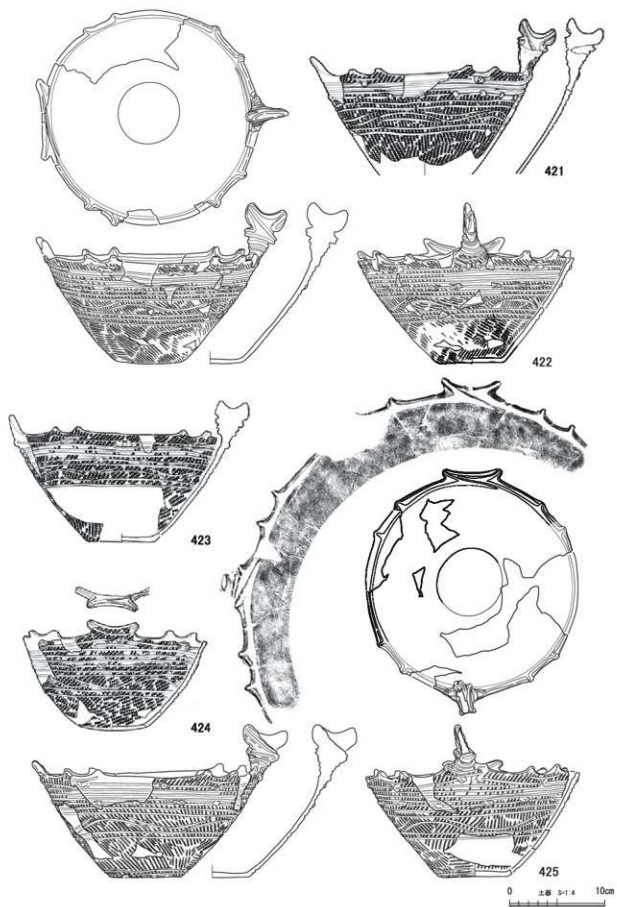
図IV-26 土器実測図 22



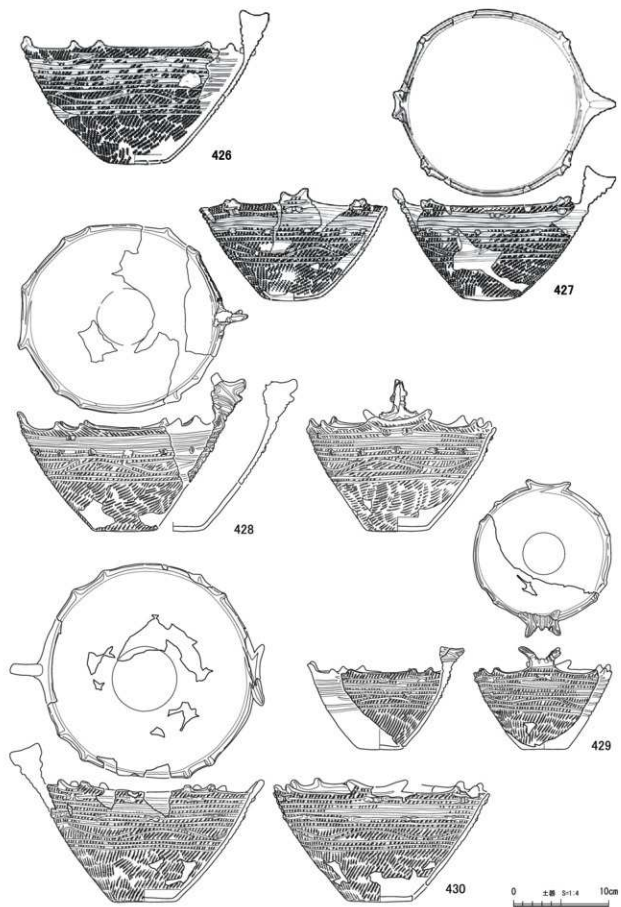
图IV-27 土器实测图 23



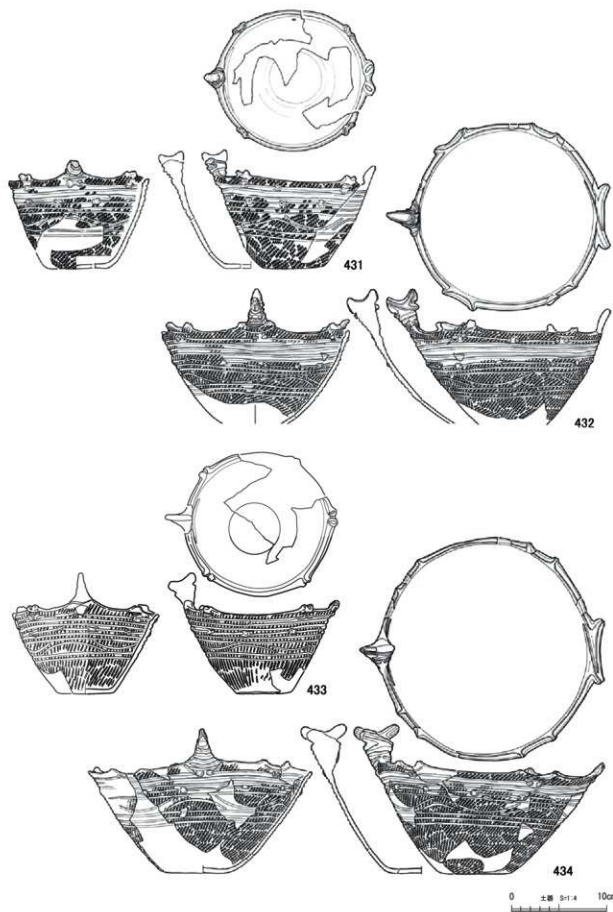
図IV-28 土器実測図 24



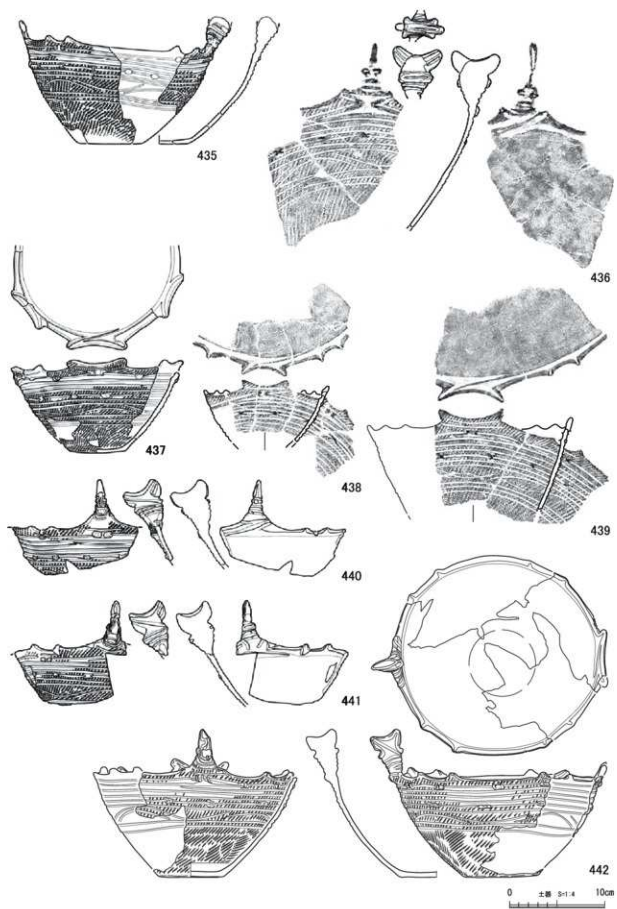
圖IV-29 土器実測圖 25



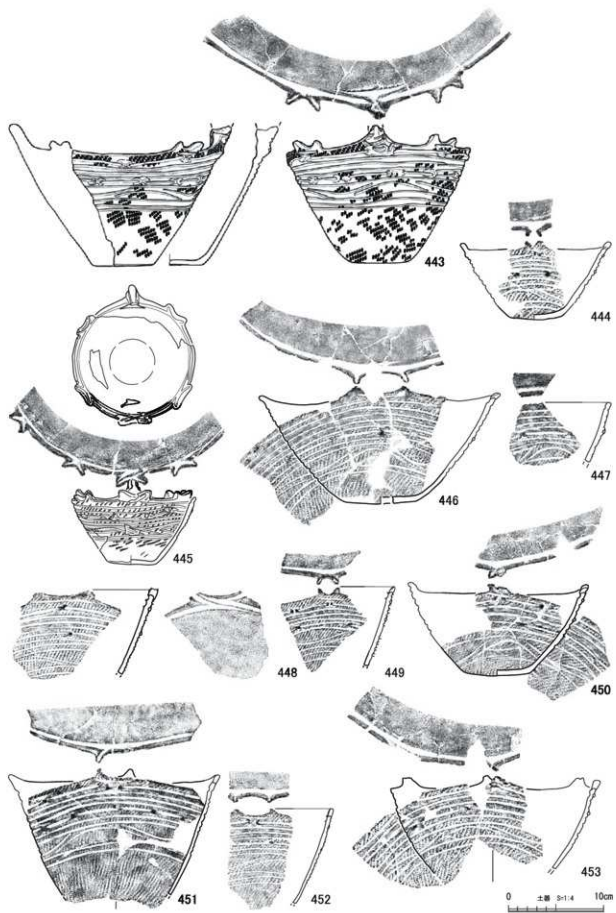
図IV-30 土器実測図 26



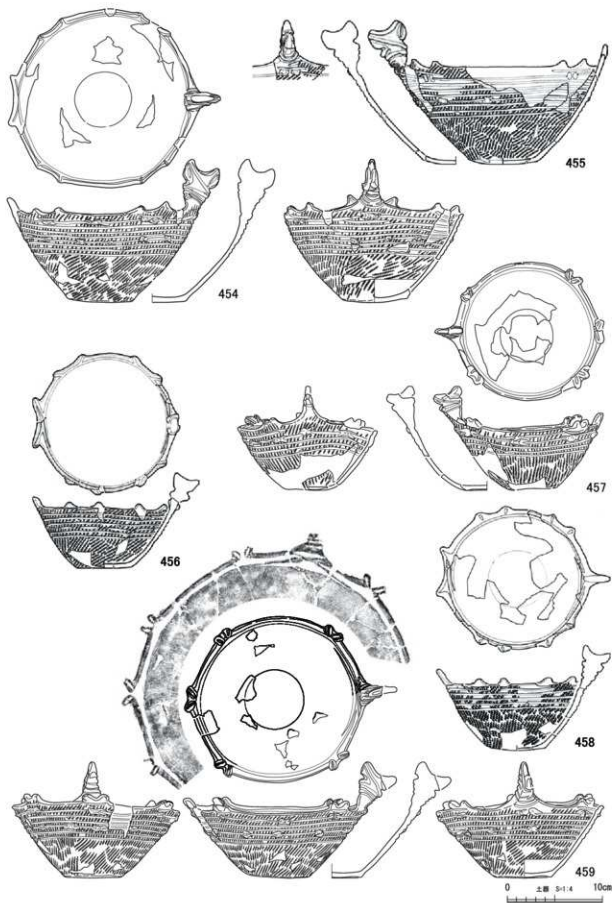
圖IV-31 土器実測圖 27



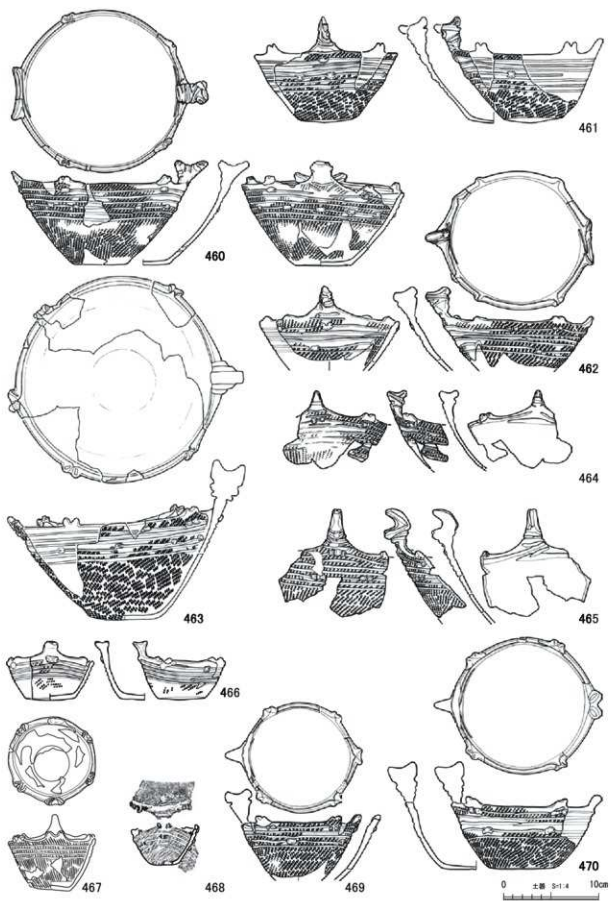
図IV-32 土器実測図 28



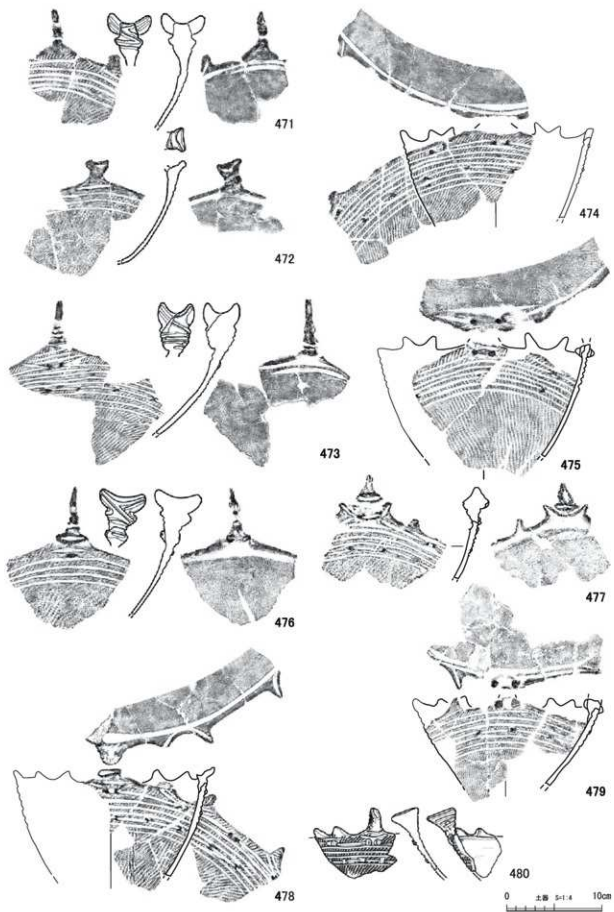
图IV-33 土器实测图 29



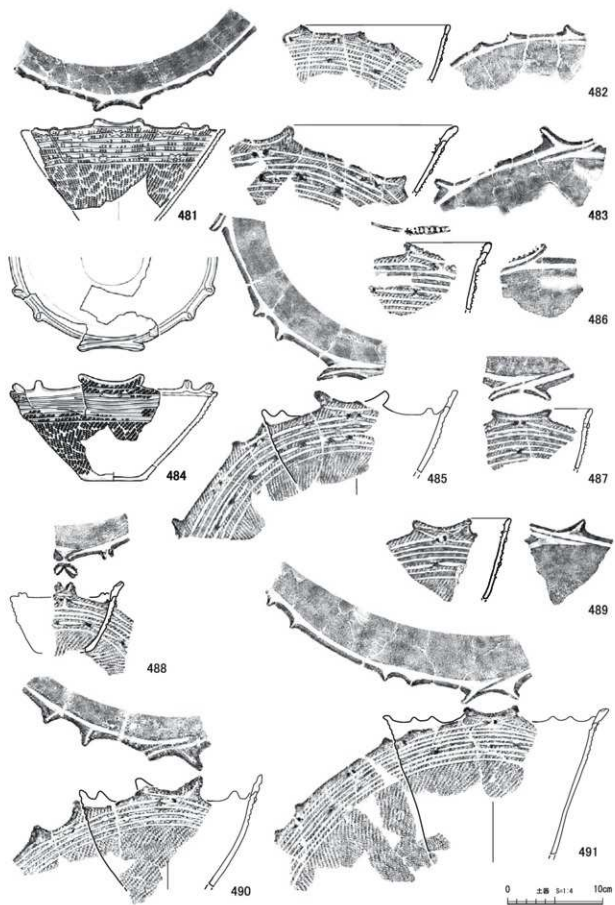
図IV-34 土器実測図 30



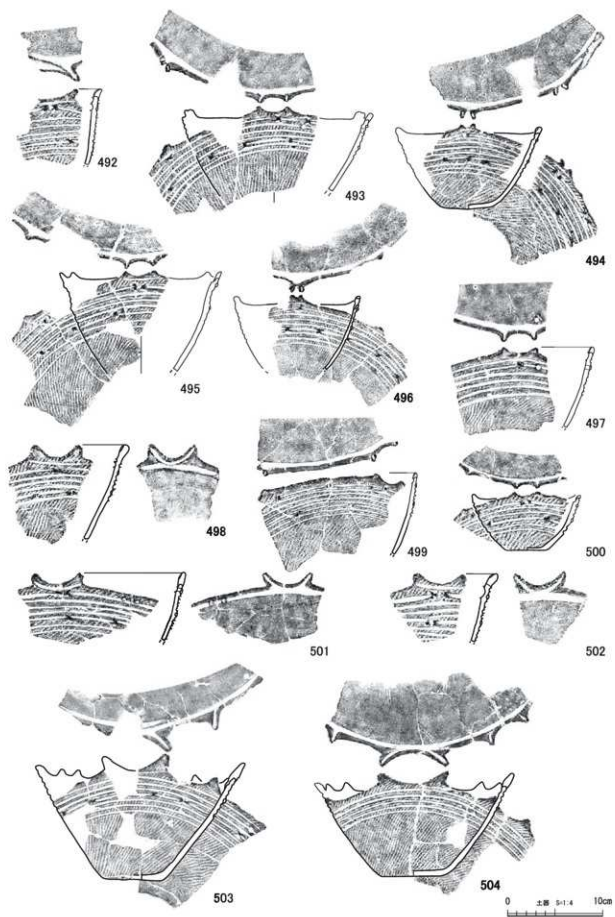
圖IV-35 土器実測図31



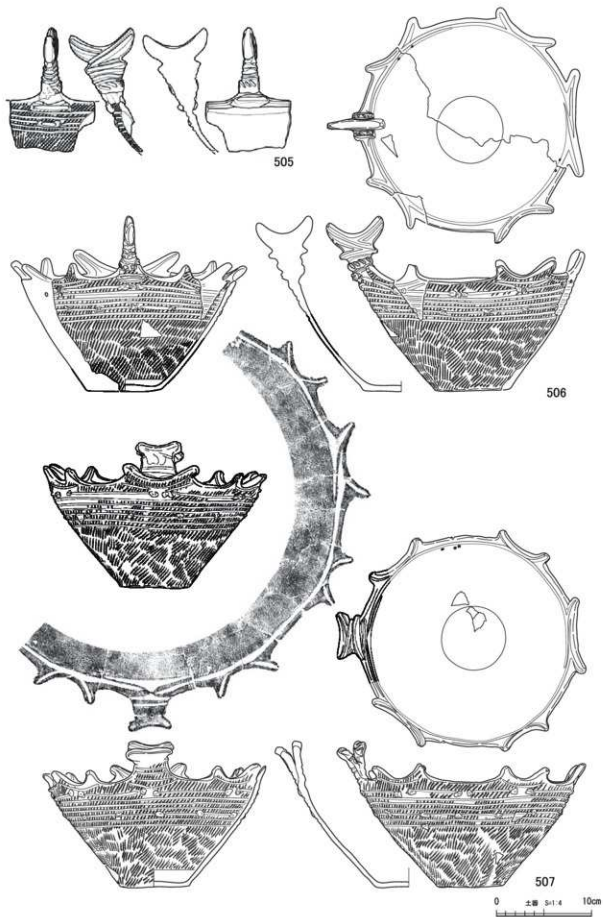
図IV-36 土器実測図 32



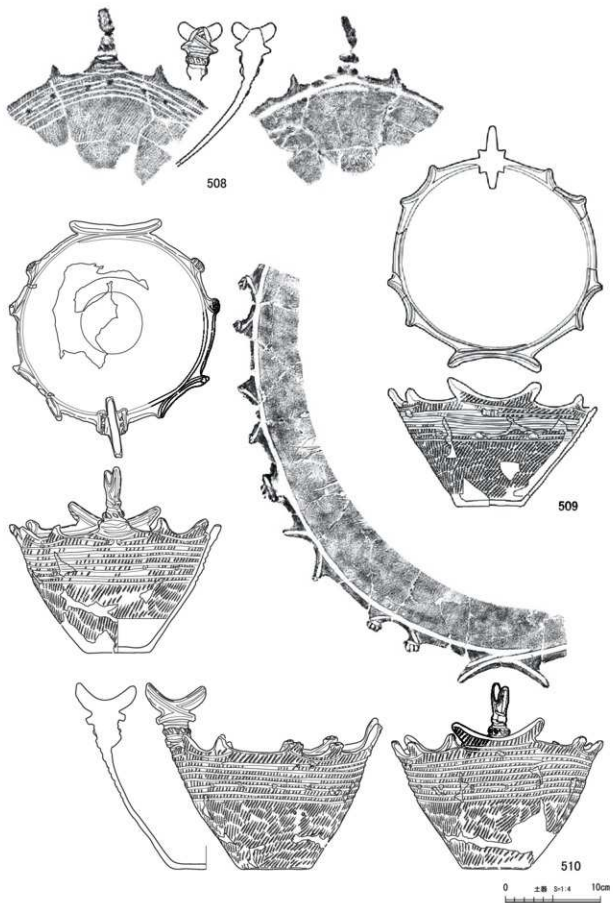
圖IV-37 土器実測圖 33



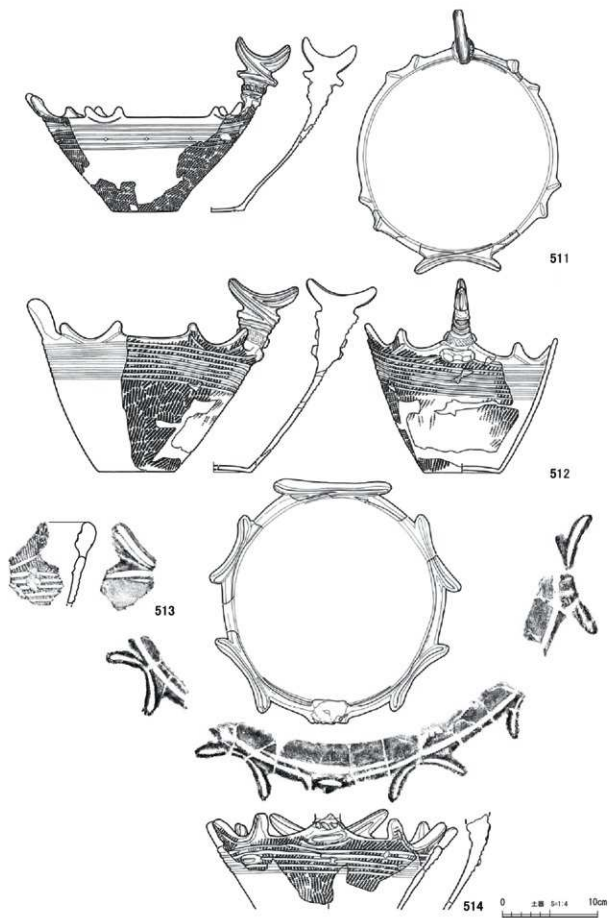
図IV-38 土器実測図 34



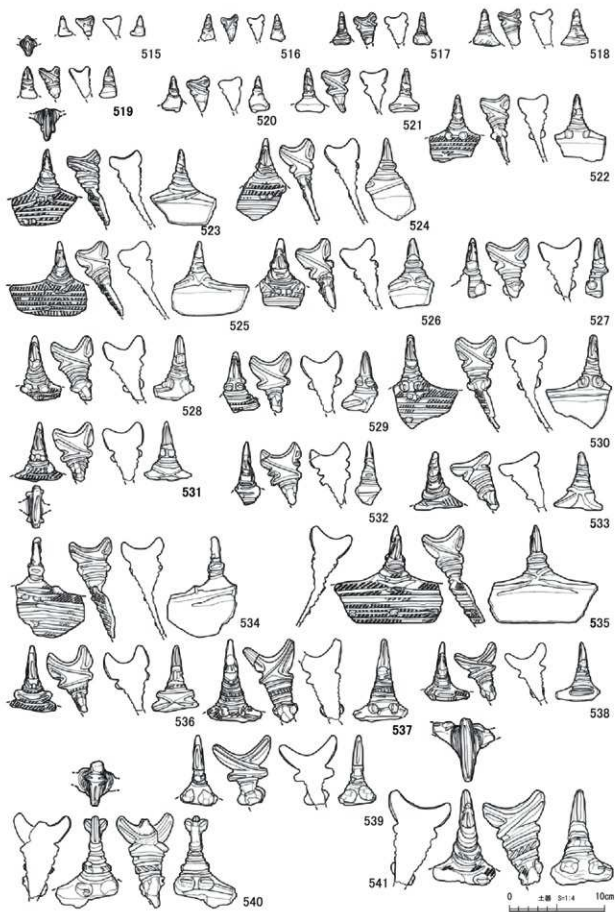
图IV-39 土器実測図 35



图IV-40 土器実測图 36



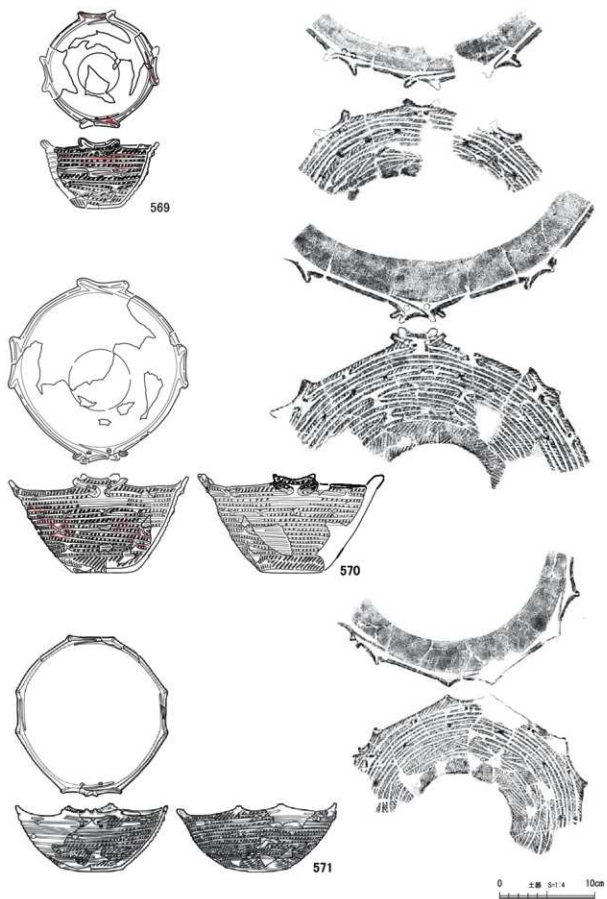
圖IV-41 土器実測図 37



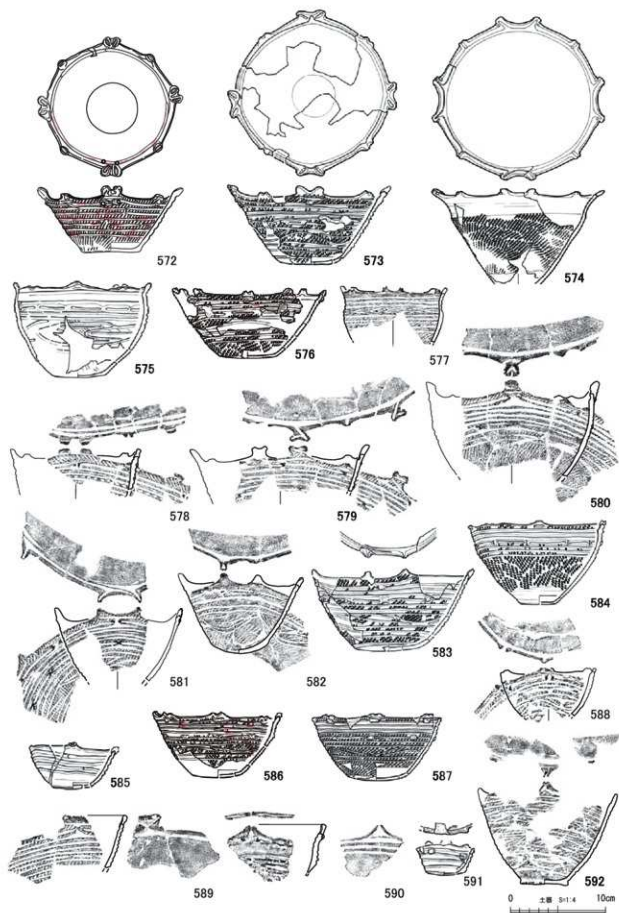
図IV-42 土器実測図38



圖IV-43 土器実測圖 39



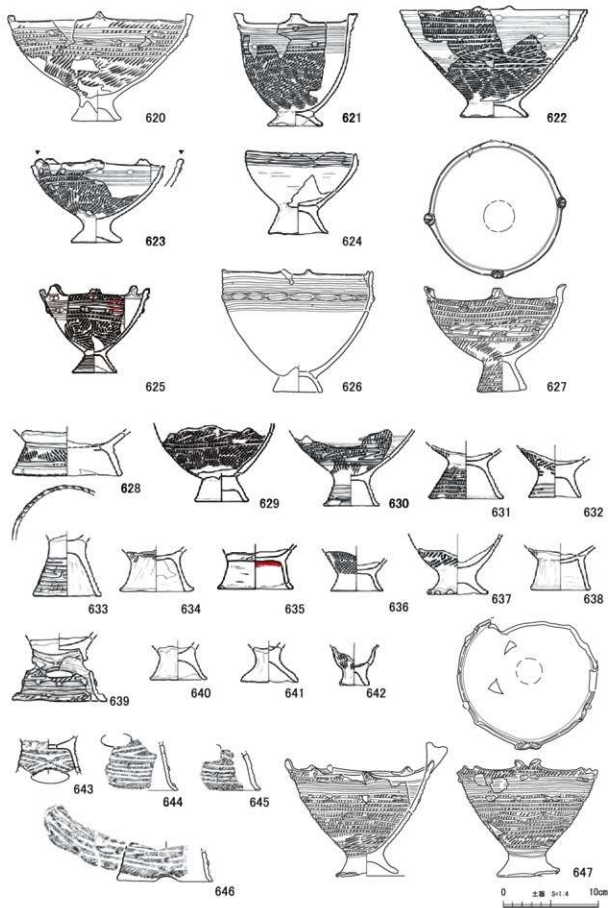
図IV-44 土器実測図 40



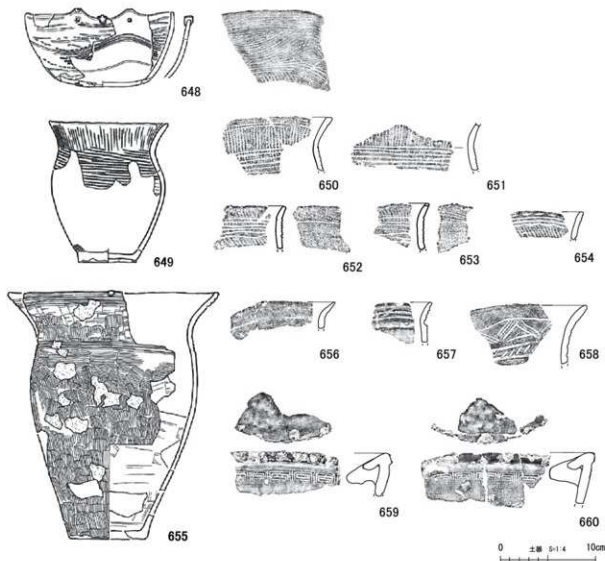
圖IV-45 土器実測圖 41



図IV-46 土器実測図42



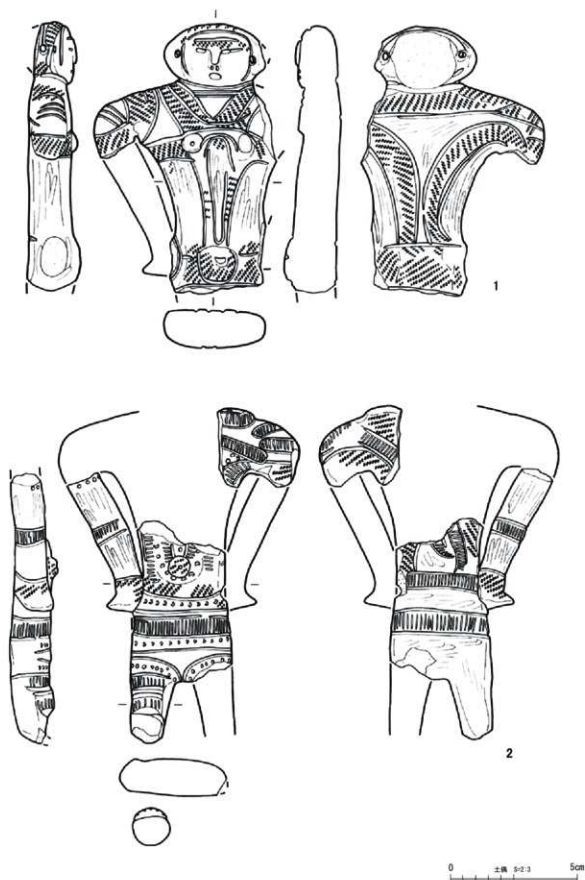
圖IV-47 土器実測圖 43



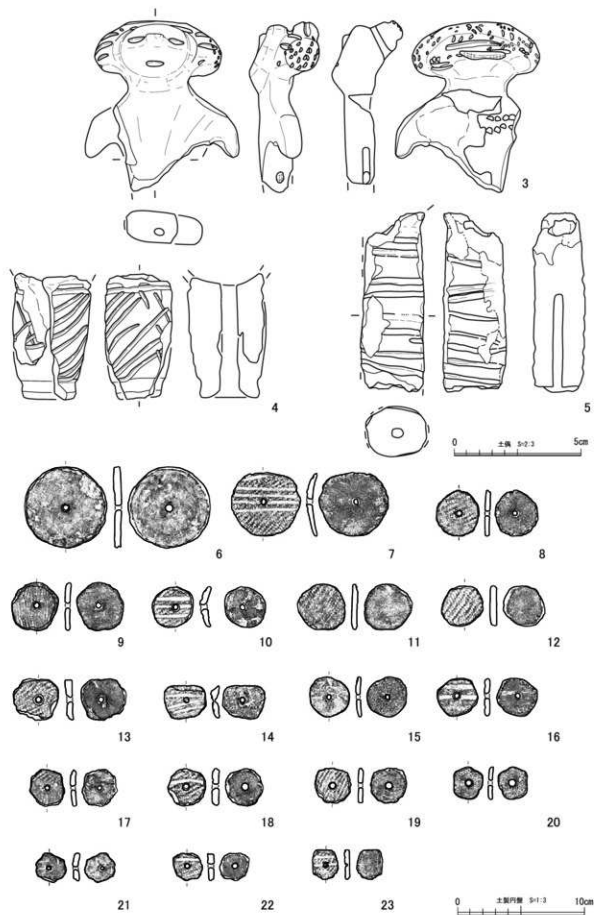
図IV-48 土器実測図 44

2 土製品

土製品は97点出土した。そのうちの63点が焼成粘土塊で、それ以外は、土製品2点、土偶9点、土製円盤25点である。土製品としたものの1点は、土製品5に掲載した。表採品で、表IV-2掲載土製品一覧表では土偶?としたが、集計上では土製品としている。上下とも欠損し、上部には中空状の内面の一部が残り、下部は途中まで穿孔される。断面は楕円形で、表面には横走する沈線が付されている。土偶は、縄文時代後期後葉が2体分の5点、晩期後葉が2体分の4点出土し、そのすべてを掲載した。後期後葉の土偶は、4点が斜面縁のd・e98区から出土し、土偶2の肩部が段丘上面b99区から出土している。大きさや腰に手を当てる姿勢がほぼ同じで、文様は同時期の土器の施文と共通する。晩期後葉の土偶3は頭頂部にスリットの入るアーチ状の髪結い型を有する土偶で、胴部は無文、腕は小さく省略されている。胴部中央まで下から穿孔されている。頭部がd98区、胴部はd0区から出土した。土偶4は土偶の脚部とみている。中央が縦に穿孔され、上部は中空状である。6~23は土製円盤である。すべて縄文時代晩期後葉の土器片が使用されている。6は底部片を使用したもの、11、12、14、23は穿孔のないものや加工途中のものである。



图IV-49 土偶实测图



図IV-50 土偶・土製品実測図

3 石器

遺跡からは、剥片石器1,019点、礫石器377点、剥片28,411点、礫35,002点の合計64,809点が出土した。剥片石器の詳細は、石鎌209点、石錐95点、ナイフ類9点、ヘラ状石器10点、スクレイパー類631点、楔形石器24点、石斧34点、たたき石210点、すり石3点、砥石24点、扁平打製石器1点、石鋸44点、石錐1点、くぼみ石50点、台石・石皿10点である。

石器は図IV-51-1～図IV-69-320に掲載した。頁岩の産地である木古内町では、石材となる頁岩が豊富にある一方、火山岩に乏しく、大型の礫が少ない傾向にある。包含層から出土する礫は、長径10～20cmの円礫が多く、それらを利用した礫石器類が多い。そのためか、剥片石器が大きく、礫石器が小さい傾向がある。掲載した石器類は剥片石器、礫石器とも2分の1にしている。

出土する石器の時期は、土器が多数出土するエリアで同様に石器類も出土するため、最も多くの破片を検出した縄文時代晩期後葉、次に晩期前葉に伴っている石器群の可能性が高い。

石器1～109は石鎌である。細身で縦長の有茎鎌が目立つなか、無茎鎌が4点(石器1～3、27)、ひし形状のものが18点(石器4～21)、作りの荒い木の葉状のもの4点(石器51・22～25)、などが混じる。石器2などは、頁岩製だが基部が燕尾形であることなど、同時期の道央部の石鎌の形態に似る。道央部との関係も深い時期で、石鎌には黒曜石製のものが約1割混じる(石器4、5、6、15、31、47、59、72、92)が、有茎の細身の形状のものは少ない。また、黒曜石に関しては、赤井川産や白滝産のものが多く混じるようである。また、アスファルトが付着するものも17点(石器3、19、26、28、32、45、50、58、65、68、76、81、86、88、100、104、107)あり、基部だけでなく先端部にまで付着するものもあった。図中ではアスファルト付着部にグレートーンを重ねている。102はメノウ製で、他の石鎌より幅や長さが大型である。108は長さが56mmあり、出土した石鎌中で最長である。

石器110～171には石錐を掲載した。形態では、棒状のもの、つまみが付くもの、剥片の一端に尖頭部を作りだしたものなどがある。125は基部にアスファルトが付着する。棒状のものと、つまみが付くものの境は微妙であるが、131～134のように比較的丁寧なつまみの加工があるものは、縄文時代後期後葉のものに似る。170は先端部の残片だが、土器に補修孔を空けたとみられる擦痕がある。原形は169のような厚みのある尖頭器状のものであったとみられる。171も石鎌の未成品にも見えるが、基部の両側に補修孔を空けたときに付いたとみられる擦痕が付き、基部の外形が170と同じである。

172～178はナイフ類である。中でも174～176はつまみ付きナイフで、175は加工の丁寧さから縄文時代前期のものかもしれない。173、177、178は両面調整のナイフである。

179～188はヘラ状石器である。晩期中葉から後葉の聖山遺跡でみられた、縦長の剥離調整で浅い角度の刃部をもつ例はなく、片面調整の深い角度の刃部のものがあり、様相が異なる。179の裏面は、古い剥離面のような光沢がある。183は緑色片岩製で、裏面に擦痕がある。188は玄武岩製である。

189～258はスクレイパー類である。使用痕、加工痕のあるものをまとめている。縦長剥片の長い縁辺に刃部を付けたもの、側面から端部に深い角度の刃部を付けたものなどがみられる。259～265は楔型石器である。両極からの力が加わった剥片を丹念に探したが、聖山遺跡のように多量にはみつからなかった。266、267は石核である。どちらも頁岩の円礫を割ったものである。加工のない頁岩やメノウの円礫は、原石とも考えられるが、礫に分類し集計した。268～284は石斧である。刃部片、基部片、擦切りの残核も含まれている。掲載した石斧の半分近くに擦切り加工の痕跡がある。271、274のような基部が擦切り面に傾斜するものは、刃部が減って短くなった275の様な石斧を、縦に二つに切って使用した可能性もある。270は後期後葉の副葬品にみられる石斧に形状が似る。272は縦長の泥岩に刃部を付けたものである。285～294は石鋸である。粘板岩製のものが多く、石斧の加工に使用

されたものとみられる。288は石刃片の可能性も考えたが、石刃類は出土していないとみた。295は扁平打製石器である。後期前葉の遺物が多かった札刈6遺跡で多く出土していたことなどから、後期前葉のものと考えられる。296～305は敲き石である。敲き石には円礫の一面を執拗に使用しているもの(石器296～299)と、楕円形の扁平礫などの端部を多少使用したもの(300～305)の2種類がみられる。306～314はくぼみ石である。唯一珪岩製の307は、晩期前葉の土坑から出土したものの、そのほかはすべて柔らかい泥岩製である。306には擦痕とは異なる傷が残る。315は唯一石錘としたもの。側断面が方形に近い礫の端部付近の周囲の角に敲打を加え、縄の溝を作ったものと考え、石錘とした。石材は頁岩で、このような石錘に類例があるのかは不明だが、出土状況から縄文時代晩期の遺物とみられる。316～320は砥石・石皿で凝灰岩、砂岩せいのものである。318には石器などが擦れたとみられる擦痕がつく。317は両面を薄くなるまで研磨で使用し割れたもの。316、319、320の表面には研磨の痕跡が残る。掲載した石器類の個々のデータは表Ⅳ-3掲載石器一覧の記載している。

4 石 製 品

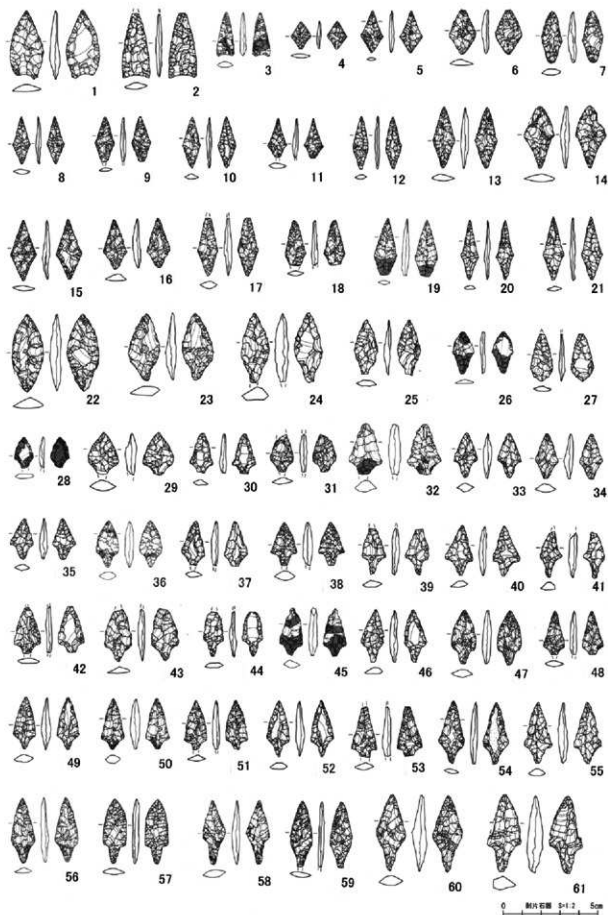
図Ⅳ-70-1～13には石製品を掲載した。1～7は緑色凝灰岩製の平玉である。これらの平玉は出土状況から、すべて晩期後葉のものと考えられる。2はe98区の標高3.17mで、晩期後葉の土器530の破片わきから出土した。3～6はd98区の標高3.15m前後で晩期後葉の土器500の破片上で4点がまとまって出土した。7は、c94区の土器324のわき、標高6.44mで最初に見つかった玉で、その後、周辺の調査の際に廃土を回収し水洗したが、みつかった平玉が1のみであった。

8はb1区出土の礫を分類中につつけたもので、半分は欠損する。泥岩製で、中央の凹んだ自然石の表面を面取り加工し、複数の穿孔を施し、ボタン状の製品に近いものに加工したものとみられる。b1区では晩期前葉の遺物が多量に出土していることから、同時期のものである可能性がたかい。9はd96区の礫を整理中に、緑色の目立った本品を注視したところ、自然石に穿孔しようとした痕跡がみつかったもの。10はb0区の出土で、棒状の泥岩の一端にすず状の黒ずみが付着し、その中に紐などを巻いた痕跡が残っていたもの。小さな石錘かもしれない。11は石棒片である。横断面は紡錘形で、被熱しており細かく割れた破片はe98～e1区、d2区に広く散在して出土した。石棒は晩期後葉には出土例が少なく、石棒片の散らばる範囲は、後期後葉や晩期前葉の土器がまとまって出土した範囲と重なることから、そのいずれかの時期のものと考えられる。

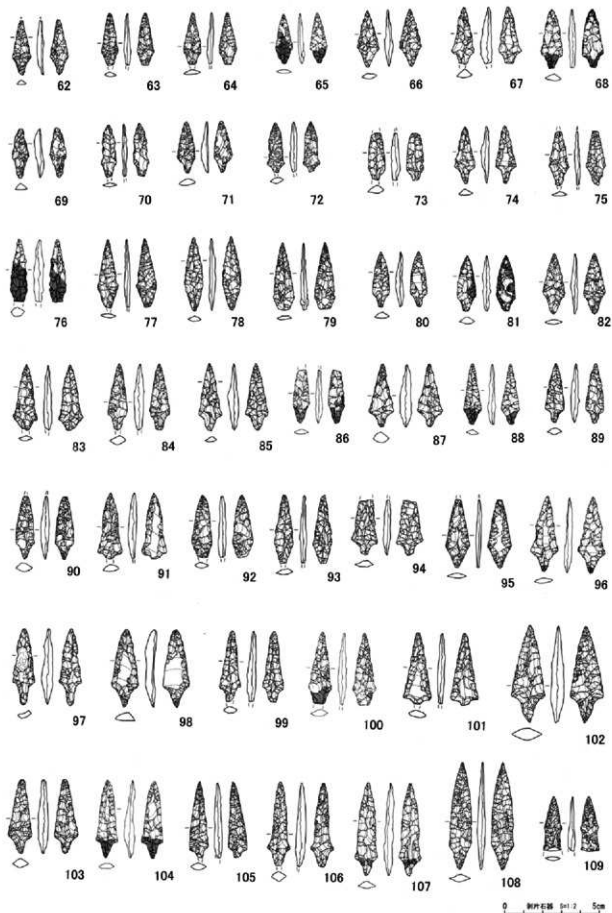
12は滑石製の石筆である。尖らせた先端部はクレヨンの先端と似たり減りかたをする。13は粘板岩製の石板である。薄く加工し、両面に擦痕などがみられる。石鋸と同じ石材を使用しており、当初は石鋸としていたが、緑の加工が直線で両面を磨き薄く加工しているところが、新しいものとみられ、石板と判明した。石筆は現在も販売されているが、この石筆と石板はセットとみられる。これらのものは、紙(ノート)や鉛筆が普及する以前に、教育現場で使用されていたもので、主に明治期に使われていたものとみられる。

5 漆 製 品

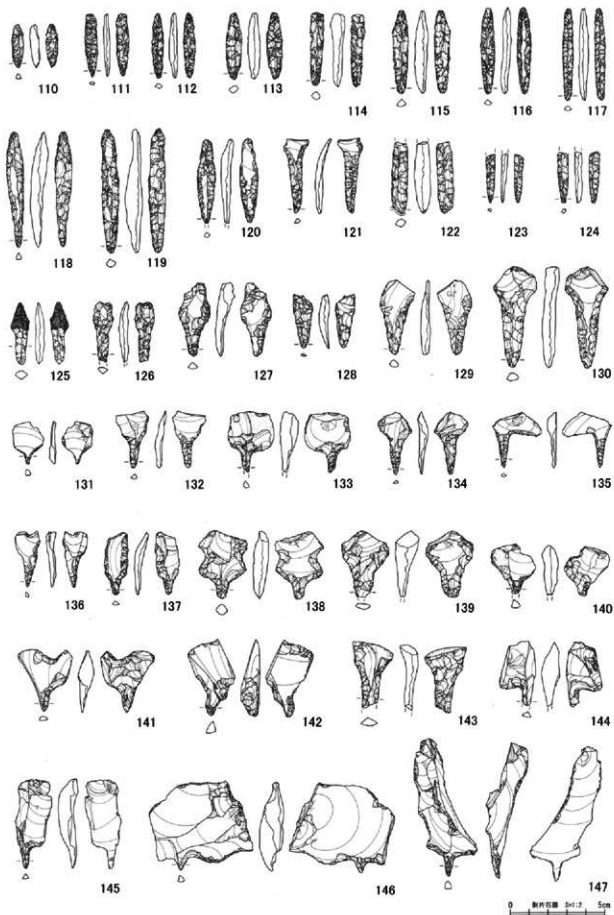
図Ⅳ-70-14～16にはd97区Ⅲ層から出土した漆製品を掲載した。斜面裾の晩期後葉の包含層から礫や土器片が出土する間から破片が検出されている。3片は、約50cmの間隔で並んで検出されており、同一製品の破片である可能性もある。木質部は失われ、塗膜だけが残ったもので、土ごと取り上げ、固めている。色調は、一部に赤色部分があるが、全般に赤黒い。時期は周囲の遺物と同時期の晩期後葉のものと考えられる。



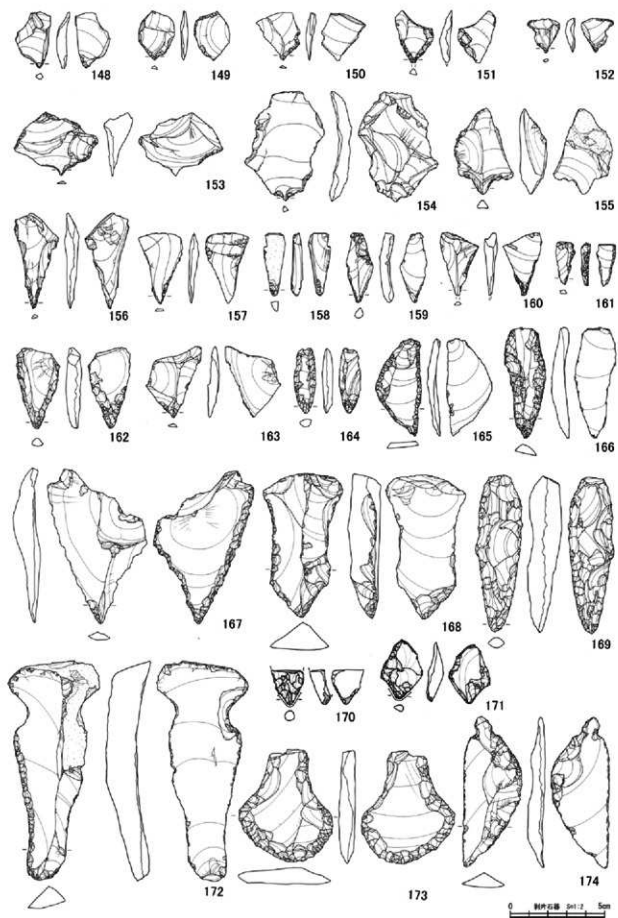
图IV-51 石器实测图 1



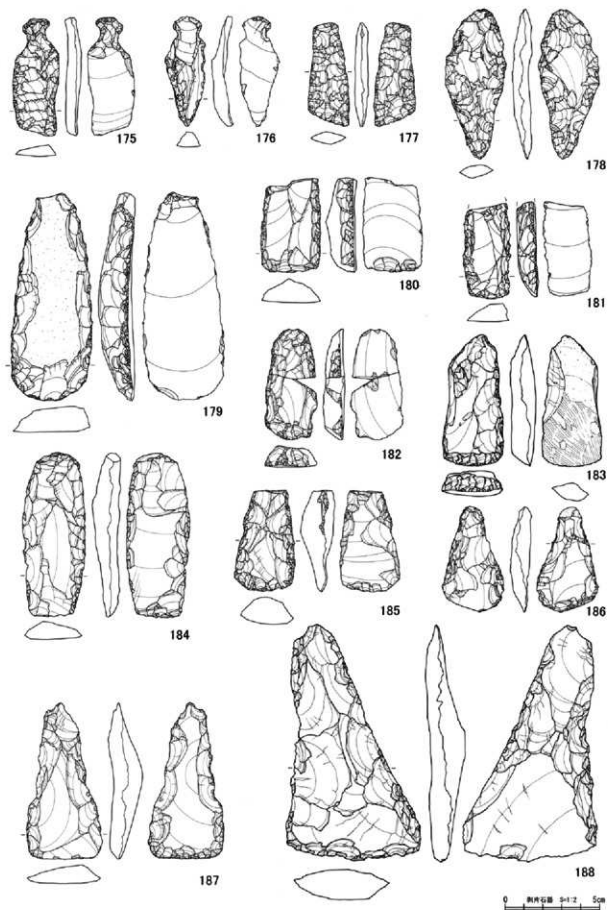
図IV-52 石器実測図 2



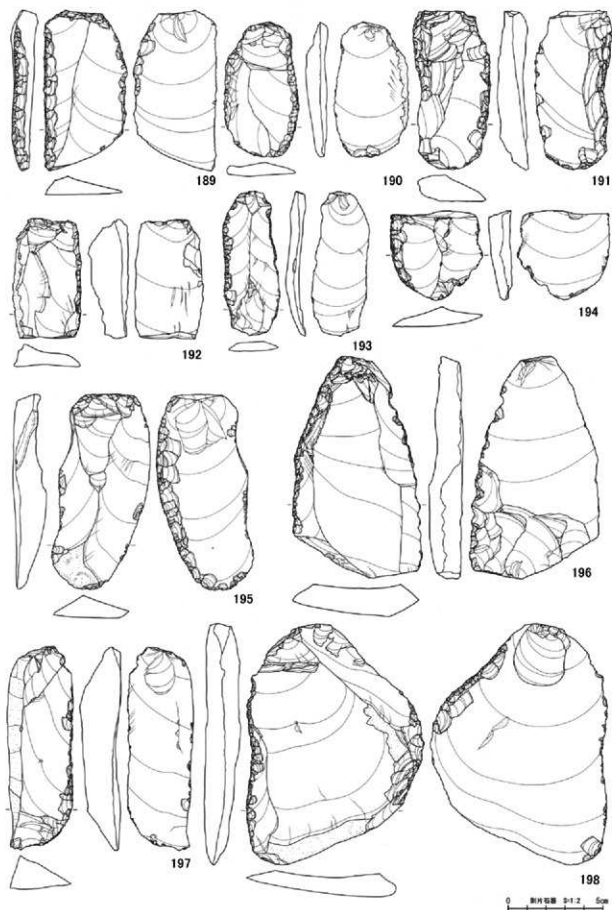
图IV-53 石器实测图3



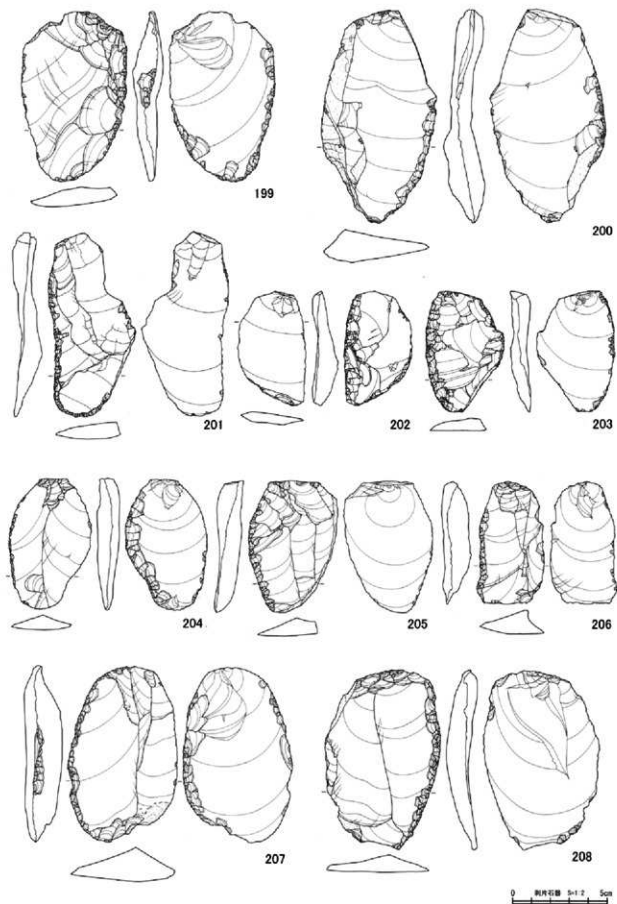
図IV-54 石器実測図4



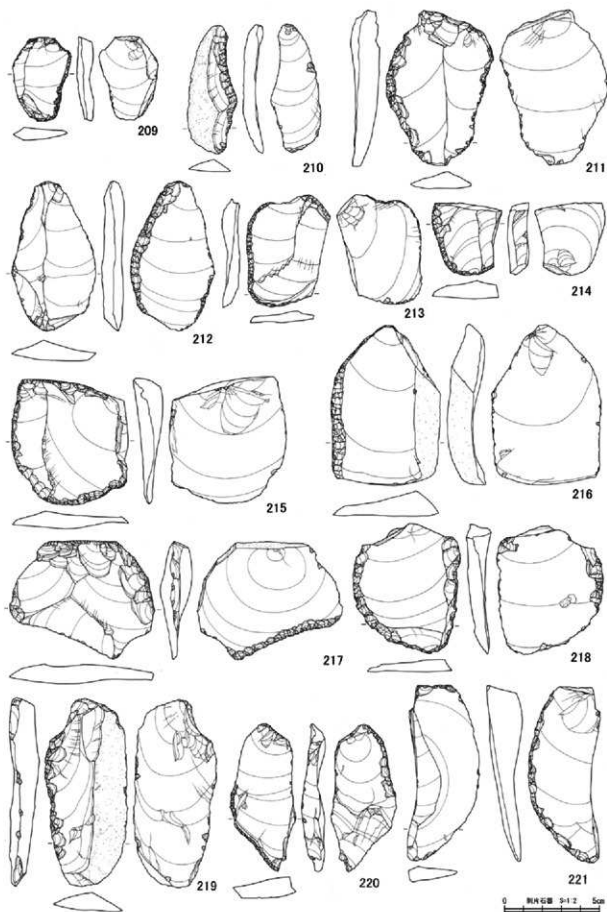
图IV-55 石器实测图5



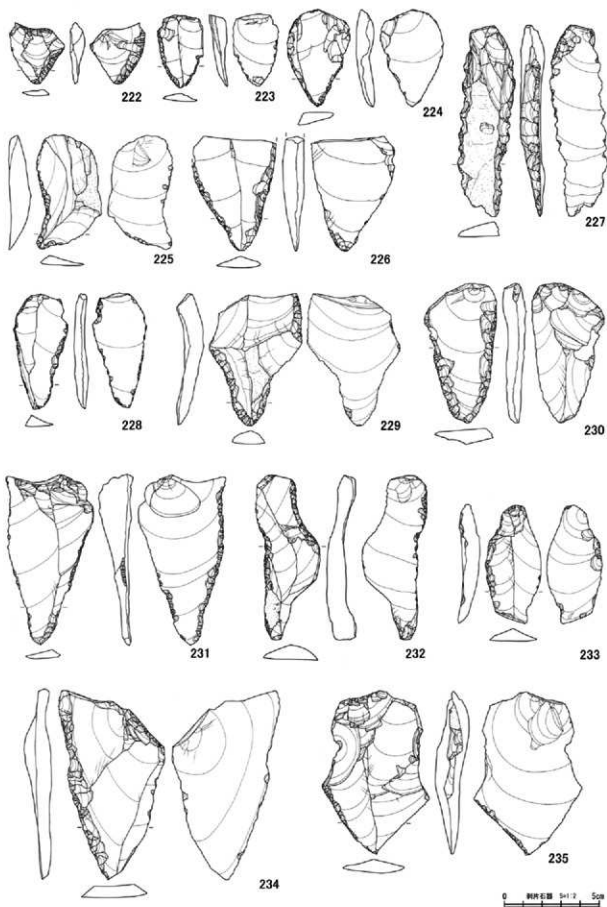
図IV-56 石器実測図6



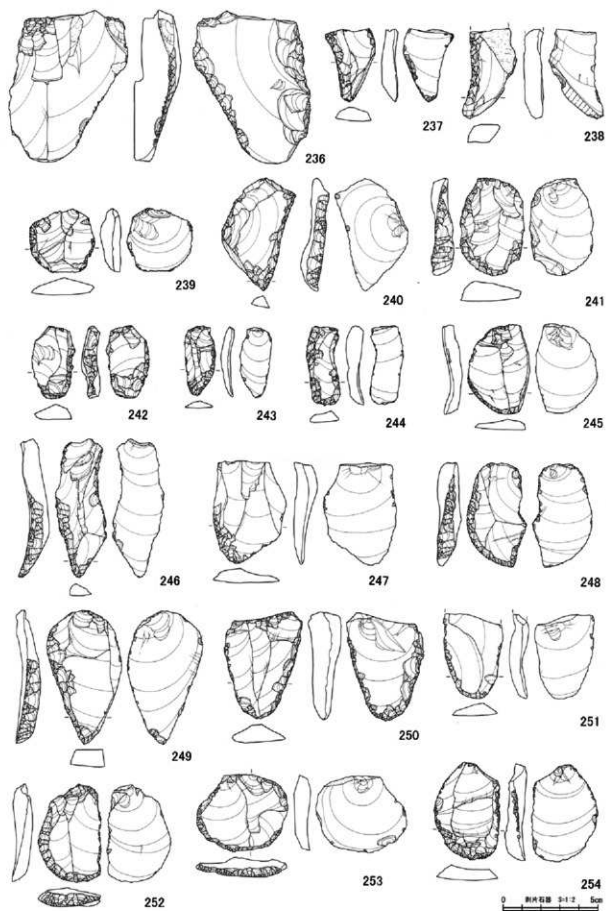
圖IV-57 石器實測圖 7



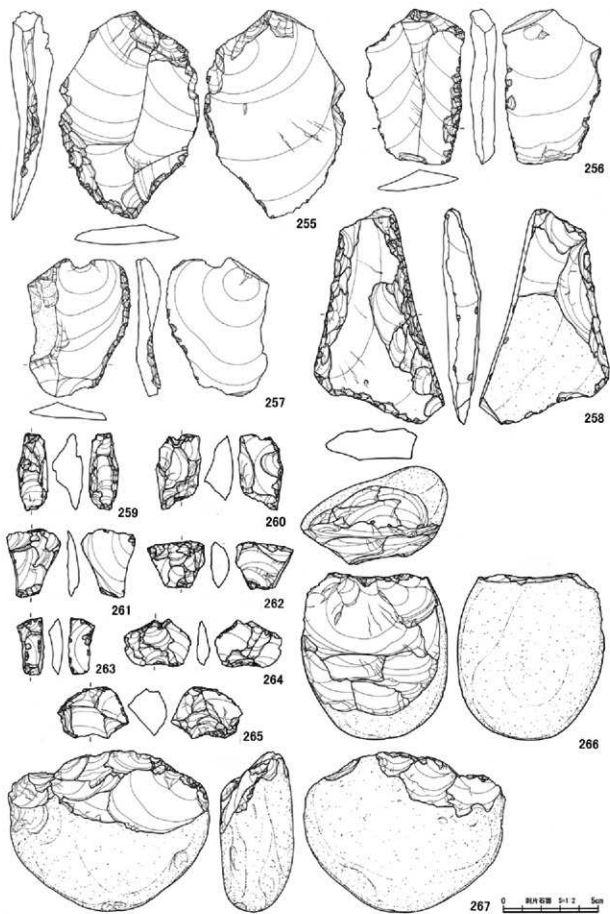
図IV-58 石器実測図8



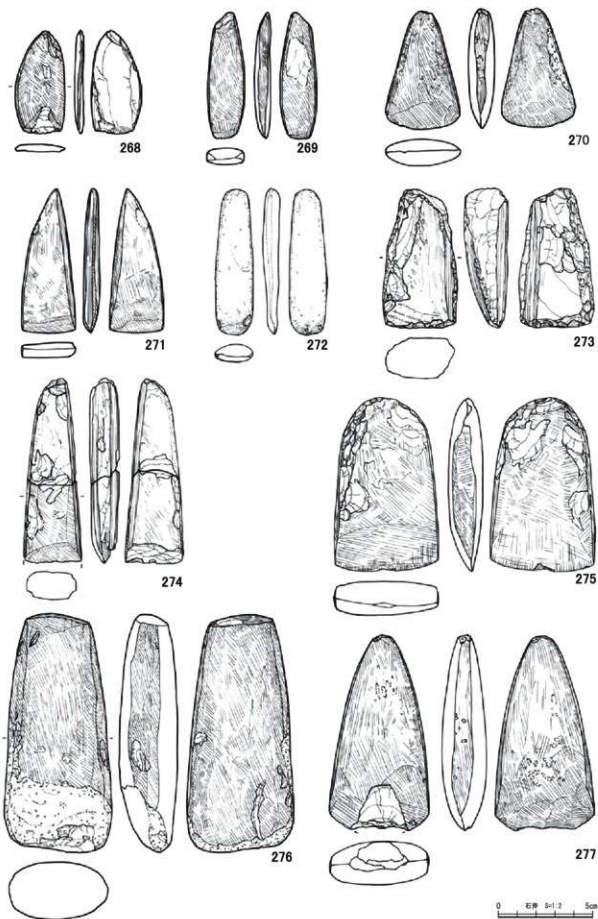
图IV-59 石器实测图9



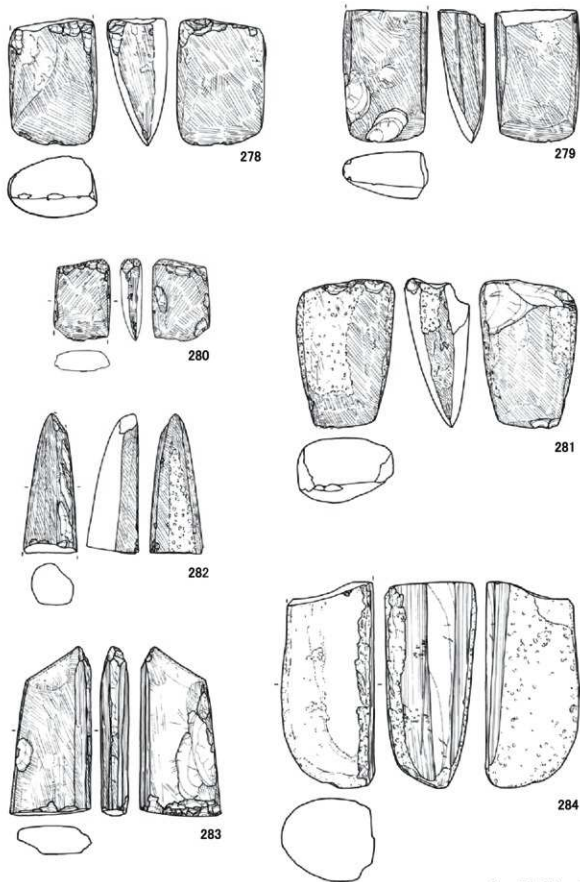
圖IV-60 石器実測圖 10



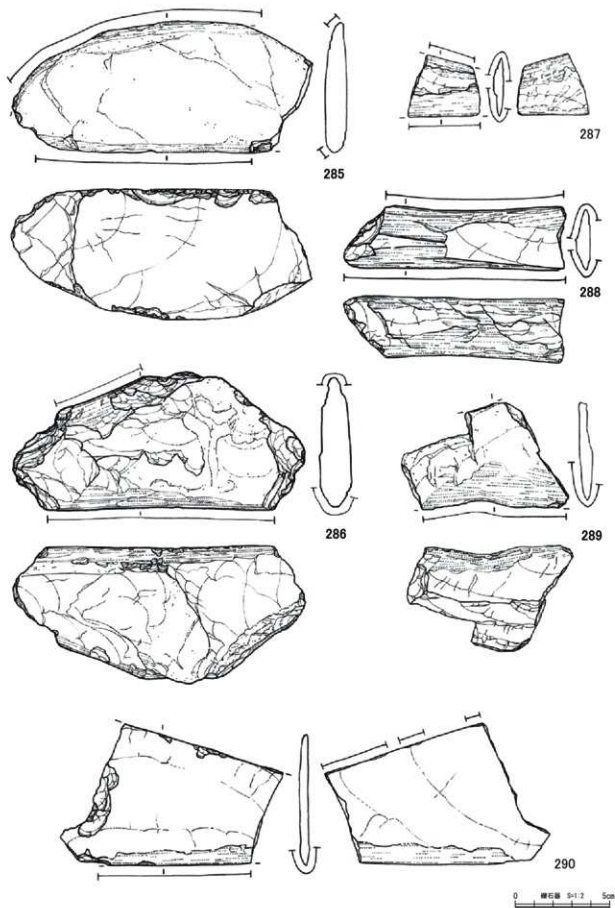
圖IV-61 石器實測圖 11



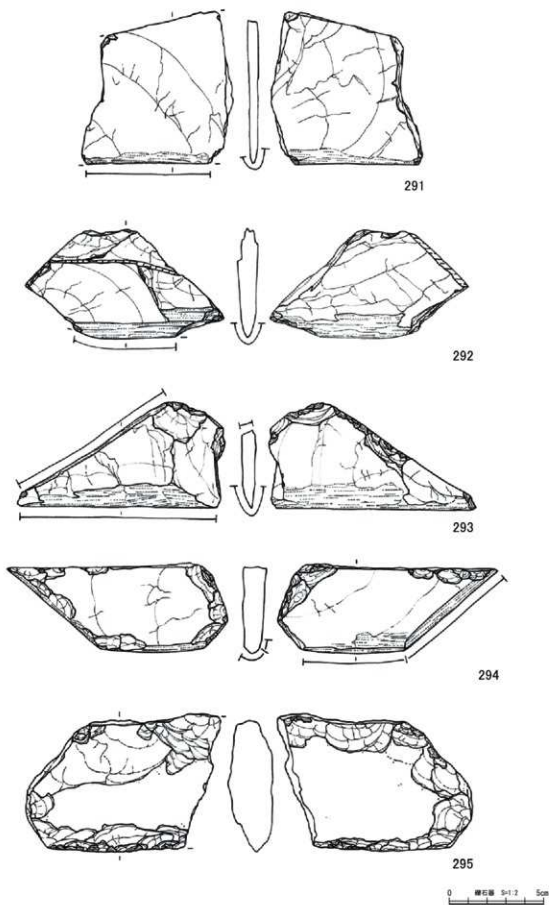
図IV-62 石器実測図 12



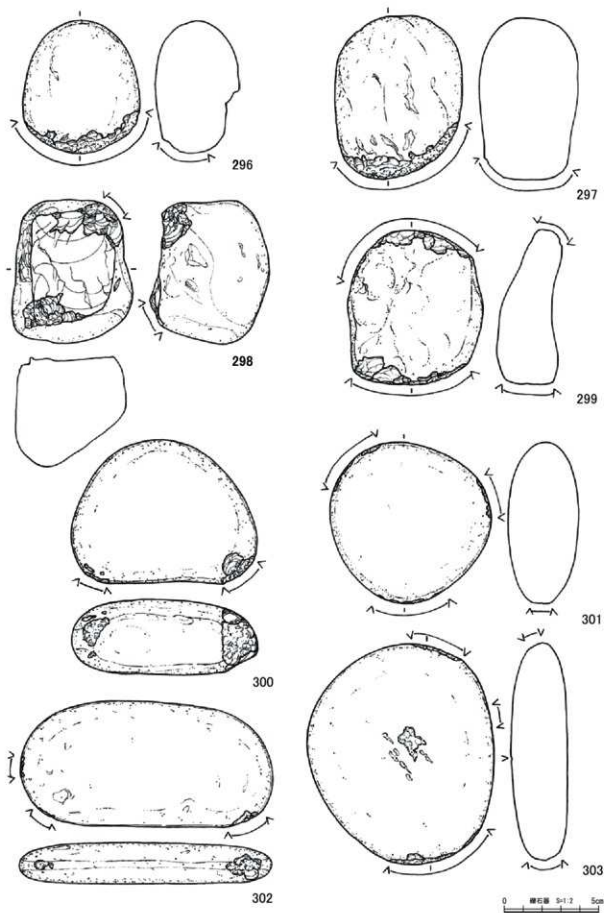
圖IV-63 石器實測圖 13



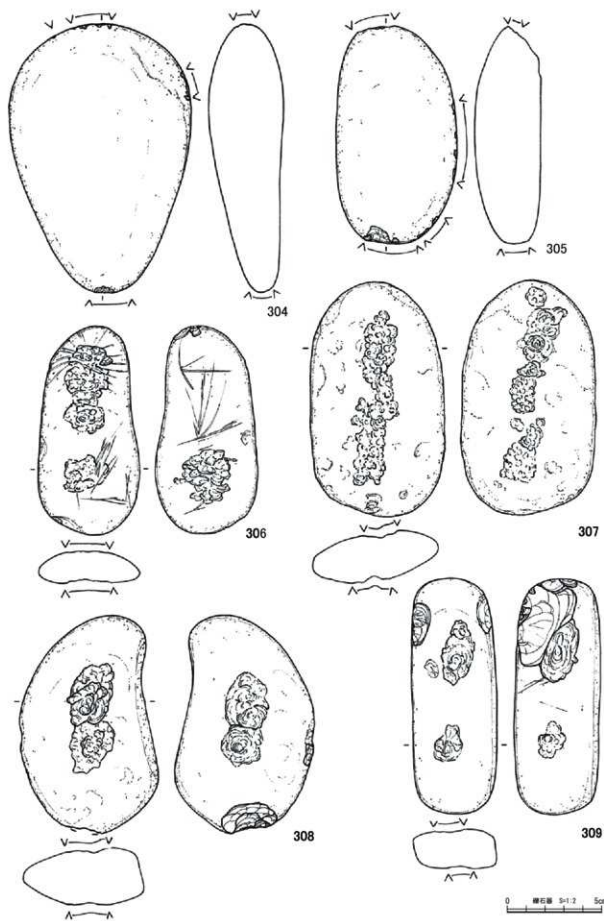
図IV-64 石器実測図 14



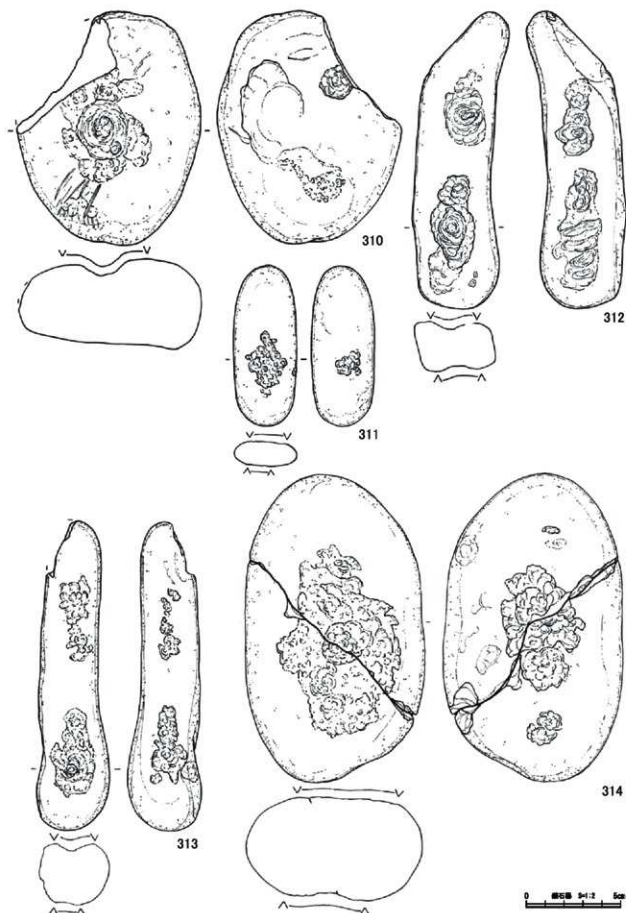
圖IV-65 石器實測圖 15



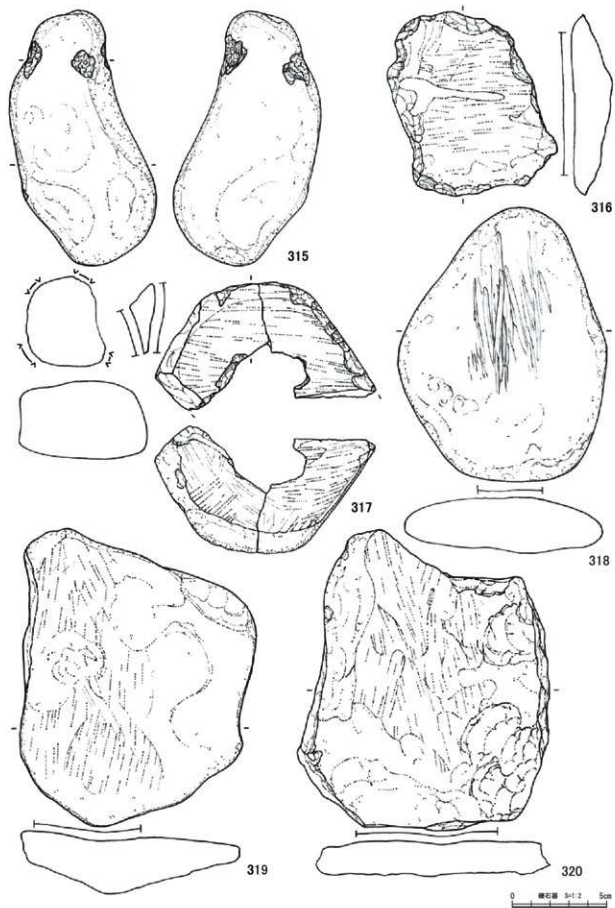
圖IV-66 石器実測圖 16



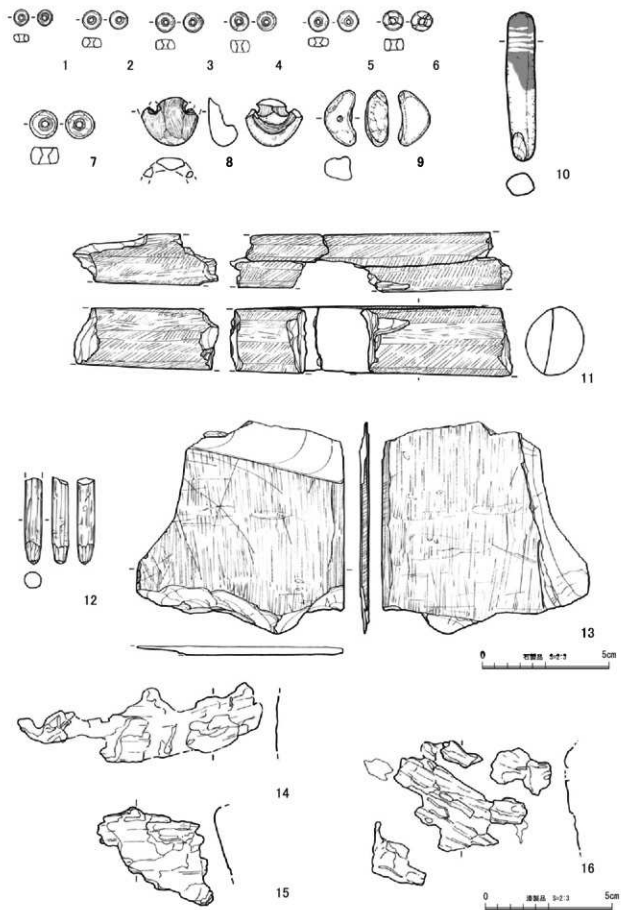
圖IV-67 石器實測圖 17



圖IV-68 石器実測圖 18



圖IV-69 石器實測圖 19



図IV-70 石製品・漆製品実測図

報告書抄録

ふりがな	きこないちょう おおひらいせき							
書名	木古内町 大平遺跡(4)							
副書名	高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北理調報）							
シリーズ番号	第329集							
編著者名	土肥研品							
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター (http://www.domuibun.or.jp)							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 Tel. (011)386-3231							
発行年月日	平成28（西暦2016）年11月25日							
ふりがな 収録遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大平遺跡	北海道木古内町字大平63-3	01334	B-05-07	41° 41′ 24.99″	140° 26′ 54.78″	20130513 ～ 20131108	1,700㎡	道路建設に伴う記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
大平遺跡	集落址	縄文時代後期後葉				土器・石器		
		縄文時代晩期前葉		墓3基、土坑2基		土器・石器	漆塗り堅櫛×2	
		縄文時代晩期後葉		小ピット		土器・石器		
		中世以降		畝状遺構				
要約	<p>遺跡はJR木古内駅から南西へ2 km、木古内川河口付近の左岸にある海岸段丘上から低位の段丘面に立地し、標高は約12～3 mの範囲である。</p> <p>検出された遺構は、縄文時代晩期前葉の墓3基のほか土坑5基が主なもので、墓の副葬品として土器や石器のほかに、漆塗り堅櫛やサメ歯の装身具が出土した。</p> <p>縄文時代晩期後葉では、聖山式以降の土器様相を考える上で、良好な資料とみられる、大洞A式併行期の土器が、小ピットや捨て場からまとまって出土した。</p>							

(公財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第329集

木古内町 大平遺跡(4)

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行 平成29年 2月28日

編集 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地 1

TEL (011)386-3231 FAX (011)386-3238

<http://www.domaibun.or.jp>

印刷 三浦印刷株式会社

〒064-0809 札幌市中央区南9条西6丁目

TEL (011)511-6191 FAX (011)512-6041

